駒形遺跡

平成23・24年度保存目的のための確認調査報告書

2013. 3

茅野市教育委員会

駒 形 遺 跡

平成23・24年度保存目的のための確認調査報告書

2013. 3

茅 野 市 教 育 委 員 会

序　　文

八ヶ岳、蓼科山、霧ヶ峰高原に抱かれた長野県南東部にある茅野市は、豊かな自然に育まれた、日本列島でも稀な縄文文化の華開いた地域です。市内には特別史跡尖石石器時代遺跡、史跡上之段石器時代遺跡・駒形遺跡や、棚畑遺跡出土の国宝土偶（縄文のビーナス）、中ッ原遺跡出土の重文土偶（仮面の女神）などの、日本の縄文文化を代表する文化財が数多く残されており、「縄文の里」として全国にその名を知られているところです。

茅野市では3つの史跡を整備して永久に後世に伝えるとともに、これらの史跡を連関させた活用により、茅野市のまちづくり・人づくりを推進しようとする『縄文の里史跡整備・活用事業』の実施に向けて、その基礎となる資料を得る目的で、駒形遺跡の範囲確認調査、ならびに上之段遺跡の詳細分布調査を進めてまいりました。

駒形遺跡は黒曜石原産地で有名な霧ヶ峰の南麓にある、縄文時代前期から後期の集落遺跡です。古くから黒曜石製の石鏃がたくさん拾えることで知られていましたが、これまでの発掘調査によって、石鏃はもとより、その原材料である原石、石器製作の途上で生じた大量の剥片・砕片などが発見され、石鏃の製作に深く関わった遺跡であることが確認されました。また黒曜石を各地に供給する役割を担った遺跡として重要であるとして、平成10年に国史跡に指定されました。

近年、史跡の隣接地で開発に伴う発掘調査が行われ、史跡の外側に縄文集落の広がることが確認されました。史跡整備を進める上で、遺跡範囲を確認する必要があるため、西側隣接地および北側近接地を対象に国庫補助事業による確認調査を行うこととなりました。

調査の結果、前期から後期の竪穴住居址が多数確認され、竪穴住居のつくられた位置から前期集落ならびに中期集落の範囲を知ることができました。これにより時期ごとに場所を変えて営まれた縄文集落の姿がいっそう明らかとなりました。

その調査成果をまとめたものが本報告書です。こうした調査の成果を踏まえ、史跡駒形遺跡の整備と活用を進め、縄文をいかした茅野市のまちづくり・人づくりを実現していく所存です。

最後になりましたが、確認調査に要する土地の借用について快くご承諾いただいた地権者の皆さまをはじめ、駒形遺跡の保護にご理解とご協力を賜りました米沢地区の皆さま、調査に従事された作業員の皆さまに心からお礼を申し上げます。あわせて、この事業の実施にあたってご指導をいただいた文化庁、長野県教育委員会、調査指導・遺跡評価会の皆さまに対し、深甚なる感謝を申し上げます。

平成25年3月

茅野市教育委員会
教育長　牛山 英彦

例　　言

1　本書は長野県茅野市が平成23・24年度に国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて実施した、保存目的のための駒形遺跡確認調査報告書である。

2　本書は平成24年度国宝重要文化財等保存整備費補助金で作成した。

3　調査は以下の期間に実施した。

平成23年度確認調査　平成23年11月18日～平成24年 1月 4日

平成24年度確認調査　平成24年 7月 2日～12月14日

整理作業および報告書作成　平成24年 4年10日～平成25年 3月15日

4　調査における委託業務は以下の業者に委託した。

基準点測量　株式会社両角測量

5　調査に係わる出土品、諸記録は茅野市尖石縄文考古館で収蔵・保管している。

6　確認調査を行うにあたり、土地の借用に快くご承諾いただいた皆さま、ならびにご指導とご助言を賜りました皆さまに対し、お名前を記して感謝申し上げます。

上原道男　塩沢正江　吉田貞雄　小松　正　前島和良（以上、地権者の皆さま）

水ノ江和同　佐藤正知　寺内隆夫　戸沢充則　勅使河原　彰　会田　進　三上徹也　綿田弘実　樋口　猛　小池洋市　吉田 弘　北澤俊弘

凡　　例

1　本書における挿図の縮尺は、挿図中に記している。

2　挿図における遺構の略号は以下のとおりである。

①　1号住居址 → 1住　　② 1号土坑 → 1土

3　本書で用いる縄文時代の時期区分は以下のとおりとする（本文中にある時期のみ）。

早期前半　押型文

早期後半　沈線文、条痕文、絡条体圧痕文

前期前半　羽状縄文系、中越式

前期後半　諸磯A・B・C式、下島式

中期前半　狢沢式、新道式、藤内式、井戸尻式

中期後半　曽利式、加曽利E式

後期前半　称名寺式、堀之内式、加曽利B式

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　　調査の経過 …… 3
　第３節　　調査の組織 …… 4
第２章　遺跡を取り巻く環境 …… 5
　第１節　　地理的環境 …… 5
　第２節　　霧ヶ峰南麓の縄文時代遺跡 …… 10
第３章　これまでの調査の概要 …… 16
第４章　調査の目的と方法 …… 36
　第１節　　調査の目的 …… 36
　第２節　　調査の方法 …… 36
第５章　調査の成果 …… 39
　第１節　　平成 23 年度確認調査 …… 39
　第２節　　平成 24 年度確認調査 …… 59
第６章　調査の総括 …… 84
　第１節　　桧沢川扇状地の縄文時代遺跡 …… 84
　第２節　　集落の変遷と構造 …… 84
　第３節　　市域の中での駒形遺跡 …… 89

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

茅野市米沢地区の県営圃場整備事業は平成4年に開始された。霧ヶ峰の南麓に位置する米沢地区は、上川を挟んで対峙する八ヶ岳西麓とともに縄文時代の遺跡が密集する場所で、縄文遺跡の一つに国宝土偶（縄文のビーナス）の出土で知られる棚畑遺跡がある。圃場整備事業の計画地には、棚畑遺跡とともに古くから知られた駒形遺跡をはじめ、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、大桜遺跡などの学史上著名な縄文遺跡が知られており、事業の計画ならびに実施によって、これらの遺跡が消滅の危機に瀕することとなった。

このような状況の中で、米沢地区北大塩の事業計画地内に所在する縄文遺跡の内容を明らかにし、保護のための資料を得る目的で、長野県教育委員会による詳細分布調査が平成6年と8年に行われた（4次調査）。平成6年の一筆毎の表面採集調査では、遺跡の範囲・時期・内容等が把握されるとともに、新たに菖蒲沢遺跡、大田苅遺跡、出ノ脇遺跡、買地遺跡の4箇所の縄文遺跡が発見された。また駒形遺跡では表面採集調査の結果を踏まえ、平成6年と8年にトレンチ法による試掘調査が行われた。平成6年は台地を対象に調査が行われ、縄文時代早期（末葉）から前期前半（初頭・前葉）、中期後半、時期の不明な27軒の竪穴住居址（6号～33号住居址、ただし25号住居址が欠番）、後期前半（前葉）の配石址などが確認された。その状況からみて、台地上の平坦部に100軒を超える竪穴住居址が埋もれているものと考えられた。平成8年は台地の南側斜面からその下に広がる湿地を中心に調査が行われたが、少量の遺物しか検出されなかった。

駒形遺跡は霧ヶ峰や和田峠周辺の黒曜石原産地を背後に擁する立地を背景に、黒曜石の流通や黒曜石製石器の製作に深く関わった重要な遺跡といわれてきたが、平成6・8年の詳細分布調査で得られた27kg以上もの黒曜石と、これに含まれる大量の黒曜石製石鏃およびその未製品から、これまでの遺跡の評価が裏づけられることとなった（県教委1997）。

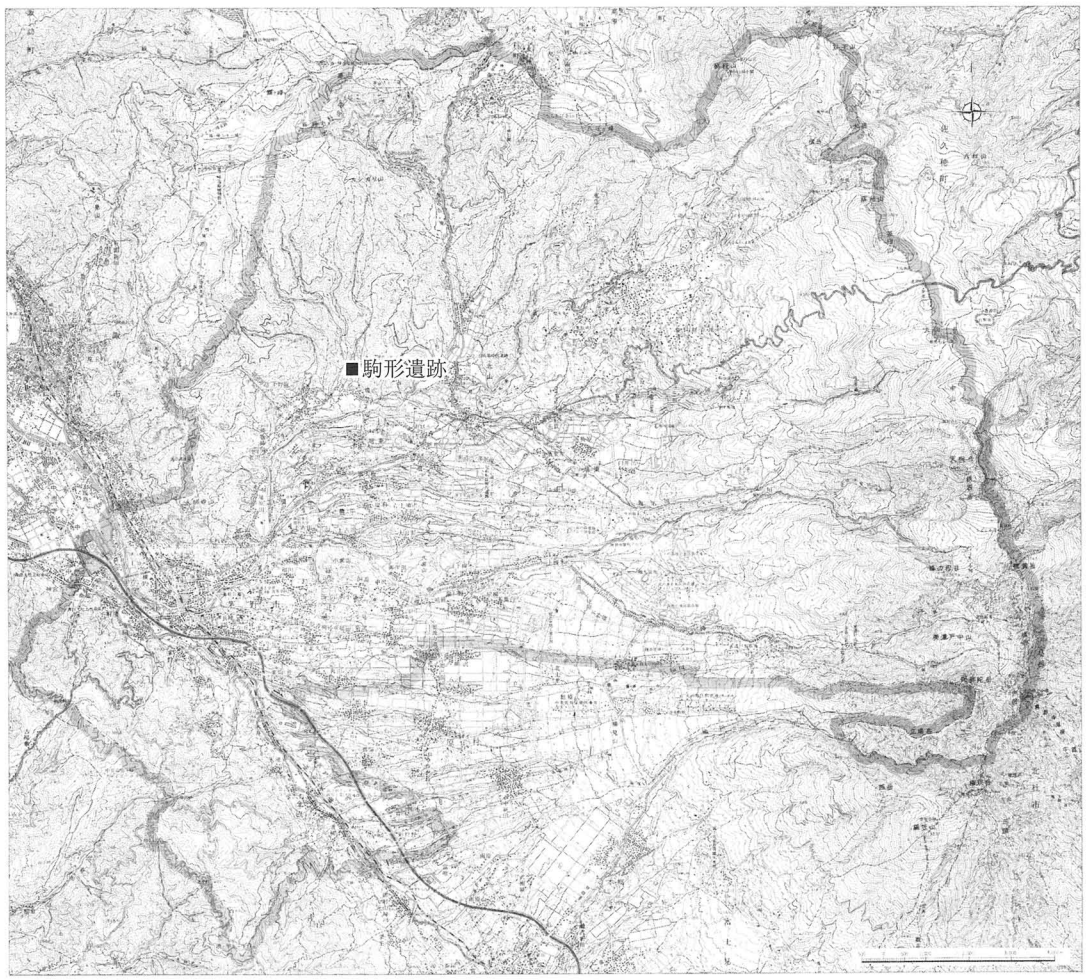
これらの調査結果を受けて、関係者の間で駒形遺跡の保存について協議が行われ、台地上の平坦部が事業計画地から除外されるとともに、現状のままで史跡指定を受けて保存を図っていくこととなった。指定は平成10年1月16日付け　官報　第2300号登載　文部省告示第12号をもって行われた。指定の理由は「八ヶ岳山麓に位置する縄文中期を中心とした大規模な拠点集落である。縄文時代の石器石材として珍重された黒曜石の原産地として名高い霧ヶ峰から、尾根・谷筋を南に下った最初の平場に所在する。多量の黒曜石の鏃や原石、作りかけなどが発見された。黒曜石の集積、製作、搬出に関与していた集落跡と推定され、当時の石器製作技術や交易の実態を知る上で重要な遺跡であるので、史跡に指定して保存をはかるものである。」と説明されている。指定面積は遺跡面積の約1/3にあたる27,919.22㎡である。

茅野市では駒形遺跡の史跡指定を受け、これを公開し活用するために、平成13年度～16年度まで4ヵ年をかけて公有地化を行った。その後、遺跡の内容と歴史的な価値を踏まえた特徴ある整備に向けて、市教育委員会はその基礎資料を得る目的で史跡の内容を詳しく知るための確認調査の計画を立案した。庁内の調整を図るとともに、文化庁文化財部記念物課および長野県教育委員会文化財・生涯学習課の埋蔵文化財部門担当者から実施計画とその内容についての指導と助言を得て、平成23年度から史跡内の確認調査に着手する準備を整えた。また平成21年度には、すでに史跡指定を受けている特別史跡尖石石器時代遺跡（昭和27年指定）、上之段遺跡石器時代遺跡（昭和17年指定）と連関させた『縄文の里史跡整備・活用事業』の実施に向けて、その基本構想（案）の策定作業に入った。

平成21年の11月に史跡範囲の西側隣接地となる台地の先端部に個人住宅の建築工事が計画され、翌年の3月に調査が行われることとなった（10次調査）。周辺におけるこれまでの調査結果を見る限り（3次・9次調査）、事業計画地とその周辺は台地上に営まれた縄文集落の外縁部とみられ、濃密な遺構（竪穴住居址）の埋蔵は予想されなかった。ところが調査を進めたところ、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）、中期後半などの8軒もの竪穴住居址が切り合った状態で確認された。事業者の遺跡に対する理解と協力によって、これらの遺構は住宅の基礎下に保存されることとなったが、事業地に隣接する西側および南側の民有地に縄文集落の広がる可能性が濃厚となった。

現在、遺跡範囲の北端かつ史跡範囲の北側には民有地が広がっている。平成6年の県教育委員会による確認調査（4次調査）の結果、この民有地にかかるように中期前半（中葉）の複数の竪穴住居址が確認されている。また駒形遺跡の北に接する大六殿遺跡の発掘調査（平成11年）によって、民有地に近い地点から前期後半（末葉）の竪穴住居址が発見されている。こうした遺構の分布状況から、両遺跡に挟まれた民有地に前期後半および中期前半の竪穴住居址の埋蔵が指摘されていた。

現在、これらの民有地は畑に使われているが、特に史跡の西側および南側の民有地は住宅に囲まれていることから、今後宅地化する可能性が十分に考えられる。そのため、文化庁から早急に地下の様子を確認し、状態に応じた適切な措置をとることが求められた。また市教育委員会としても『縄文の里史跡整備・活用事業』を進める上で台地上に営まれた縄文集落の範囲を把握する必要があり、平成23年度は史跡の西側隣接地、平成24年度は史跡の北側近接地を対象に確認調査を行うこととした。



第１図　駒形遺跡遺跡位置図

第2節　調査の経過

平成23年度確認調査の経過

11月18日　機材の搬入、調査区（1区～7区号試掘溝）の設定（基準点・水準点の設置）、表土剥ぎ取り作業、遺構検出作業の開始

12月10・11日　第1回調査指導・遺跡評価会の開催（午前：現地、午後：尖石縄文考古館）

12月14日　報道関係者に現場を公開

12月18日　現地説明会の開催（参加者約60名）

12月20日　遺構検出作業と並行して埋め戻し作業を開始

12月28日　埋め戻し作業の終了

1月　4日　機材の撤収、調査終了

2月10・11・15日　第2回調査指導・遺跡評価会（尖石縄文考古館）

2月 11日　第24回諏訪地区遺跡調査研究発表会で報告（諏訪市博物館）

3月　3日　調査報告会の開催（米沢地区コミュニティセンター　参加者約60名）

・平成23年度確認調査費は1,735,461円で、調査面積は136㎡である。

平成24年度確認調査の経過

6月25日 前期調査の準備作業を開始（草刈り、農業用資材の片づけ）

7月　2日　前期調査区（1号～4号試掘溝）の設定、水準点の設置、機材の搬入、表土剥ぎ取り作業

7月　6日　米沢地区住民を対象とする体験発掘会の講習会の開催（米沢地区コミュニティセンター）

7月10日　米沢小学校「ふれあい教室」の体験発掘（参加者19名）

7月19日　尖石特別学芸員を対象とする体験発掘会の講習会の開催（尖石縄文考古館）

7月21・22日　米沢地区住民対象の体験発掘会の開催（参加者12名）

7月28日　尖石特別学芸員対象の体験発掘会の開催（参加者9名）

8月13日　報道関係者に現場を公開

8月18日　第1回調査指導・遺跡評価会の開催

8月19日　第1回現地説明会の開催（参加者約 120名）

9月11日　文化庁文化財部記念物課 史跡整備部門 佐藤正知文化財主任調査官の現地視察

9月20日　後期調査区（5号～8号試掘溝）の設定、水準点の設置

9月21日　重機による前期調査区の埋め戻し作業

9月24日　重機による後期調査区の表土剥ぎ取り作業

9月26日　遺構検出作業の開始

9月28日　米沢小学校6年1組・2組の体験発掘会の開催

11月23日　第2回調査指導・遺跡評価会（午後：現地、尖石縄文考古館）

11月28日　報道関係者に現場を公開

12月　1日　第2回現地説明会の開催（参加者約50名）

12月14日　重機による表土の埋め戻し作業の終了、機材の撤去

2月11日　第25回諏訪地区遺跡調査研究発表会で報告（茅野市公民館）

・平成24年度確認調査費は2,203,028円で、調査面積は347㎡である。

第3節　調査の組織

発掘調査は茅野市教育委員会事務局尖石縄文考古館および文化財課が実施した。

平成23年度（尖石縄文考古館）・24年度（文化財課）

① 調査主体者　牛 山 英 彦（教育長）

② 事　務　局　小 池 沖 麿（教育次長　平成24年4月1日から生涯学習部長）

③ 尖石縄文考古館・文化財課

鵜 飼 幸 雄（尖石縄文考古館長　平成24年4月1日から文化財課長）　五味　仁（考古館係長　平成23年9月30日まで）　功刀　司（考古館係長　平成23年10月1日から平成24年3月1日まで）　中 村 浩 明（考古館係長　平成24年4月1日から ）　守 矢 昌 文（文化財係長　平成24年3月31日まで）　小 林 深 志　（文化財係長　平成24年4月1日から）　柳 川 英 司（平成24年3月31日まで）　山科　哲　大月三千代　小 池 岳 史

④ 調 査 担 当　小 池 岳 史 (発掘調査・整理作業・報告書担当)

⑤ 発掘調査・整理作業参加者

補　助　員　牛 山 矩 子　武居八千代

作　業　員　阿 部 邦 夫　宮 坂　功　柳 沢 省 一　酒井みさを　大 勝 弘 子　立岩貴江子

発掘作業協力者

赤羽千雲　牛山晴幸　大塚康男　折井正明　小平一次　塩沢幸子　品川正夫　田中未知世　中野侑子　野﨑順子　藤森栄子　宮坂節子　宮澤弘宣　村松紀代子　両角桂子　山岸正衛　山田　武　吉田貞雄　吉田陽紀　吉田悠真（米沢地区、米沢地区コミュニティセンター、尖石特別学芸員修士、尖石縄文考古館ボランティア・サークルの皆さん）

6年1組 担任 濵　智野先生　朝倉モネ　伊藤純夏　江尻林平　帯川祐也　柿澤クリスチャン　柿澤龍太郎　鎌倉優菜　北原ゆず　小林祐太　小松菜々花　鈴木太陸　世良瞭太　竹内まひろ　竹内大和　田中綾夏　田村　葵　樋口遥日　保科美桜花　細川美涼　前川直輝　湯田坂友哉　吉田健太郎　吉田陽紀

6年2組　担任 柳澤英治先生　石原有貴　伊藤愛夏　伊藤さくら　今澤大仁朗　梅北愛唯　大内優希　帯川翔太郎　北澤　望　小平紋加　小平義季　小林未来　小松亜美　小松大地　五味　涼　古畑智大　前島れい　宮武莉沙　両角　茜　両角風香　矢島貴斗　柳谷俊介　山口開聖

ふれあい学級　担任　矢島　滋先生　矢澤博司先生　4年1組　関　雄賀　谷上世樹　4年2組　熊谷拓馬　5年1組　小澤健介　増澤一輝　5年2組　武井響也　伊藤悠介　6年1組　帯川祐也　柿澤龍太郎　小林祐太　鈴木太陸　竹内大和　湯田坂友哉　6年2組　小平義季　矢島貴斗　柳谷俊介　山口開聖　（米沢小学校の皆さん）

確認調査を行うにあたっては、調査の内容と水準を適正に保つとともに、得られた成果を客観的に評価する必要がある。そこで数名の有識者（考古学者）から構成される「調査指導・遺跡評価会」を設けた。現場作業および整理作業時に指導・助言を受けた。

勅使河原　彰　会田　進　三上徹也

第2章　遺跡を取り巻く環境

第1節　地理的環境

茅野市の地形の概要

茅野市は長野県南東部の諏訪地域に位置する。諏訪地域の地勢は、北側が諏訪湖（759m）を中心とする「湖盆」と呼ばれる平地、南側が八ヶ岳火山列・蓼科山・霧ヶ峰山塊とその麓に発達した台地・扇状地・谷などからなる山地に大別される。この平地と山地に跨り、諏訪地域の南東部、265.88km²を占めるのが茅野市域である。

茅野市は、東を主峰赤岳（2,899m）に連なる2,000m級の山からなる八ヶ岳火山列と蓼科山（2,530m）北を車山（1,925m）から西へ続く霧ヶ峰高原の山塊、西を赤石山脈の北に続く守屋・入笠山塊（守屋山1,650m）を市境とし、北西端部が諏訪湖盆と接する風光明媚な高原都市である。市域の三方を囲む山なみの麓には、湧水や小河川による浸食や堆積などの作用によっていくつもの台地や扇状地が形成され、これらの高まりに点々と集落が営まれている。山麓が開析され、これにより生じた大量の土砂は、市内を流れる上川と宮川の一級河川によって諏訪湖方面へ運ばれ、市域の北西部に諏訪湖盆へ続く沖積段丘面および沖積低地を形成する。こうして形作られた標高にして800m前後の平地一帯に現茅野市街地が広がっている。平成25年3月1日現在の人口は55,903人である。

以上に記した市域の地形は、守屋山・入笠山塊の東の裾を西縁とする糸魚川一静岡構造線の断層活動と、その後に生じた隆起や火山活動によって形成されたものである。約2,300万年前に始まったとされる糸魚川一静岡構造線の活動で、その東側の地域は広く大きく陥没した。この広大な落ち込みが「フォッサ・マグナ（大地溝帯）」と呼ばれるものである。ここに日本海と太平洋から海水が流入し、砂や泥が厚く覆うとともに海底火山に伴って噴出した岩石が堆積した。やがてこれらの堆積物が隆起し、守屋山が生まれることとなる。約250万年前になると、フォッサ・マグナの各地で火山活動がさかんとなり、約130万年前から約1万年前までに霧ヶ峰・車山山塊や八ヶ岳火山列が形成されていく。この過程の中で本州最大の黒曜石原産地（冷山、星ヶ台、星ヶ塔、星糞峠、和田峠など）が生成したとされる。これらの火山活動と並行して、約100万年前からフォッサ・マグナの西縁付近で断層活動が進行し、約30万年前に現在の諏訪盆地と諏訪湖が形成されたといわれている。このように市域の地形は、糸魚川一静岡構造線の活動以降のさまざま大地の動きによって、長い年月をかけて形づくられたものである。

こうして形成された変化に富んだ地形が、多様で豊かな山や川の幸を育み、また地形の形成過程において利器の材料に最適な黒曜石を身近な場所にもたらすこととなった。このような自然環境が備わった茅野市域は、特に自然界への依存度の高い縄文時代の人々にとって、生活を営む上で最適な場所であった。これを裏づけるように、茅野市内には特別史跡尖石遺跡、史跡上之段遺跡・駒形遺跡をはじめ、200箇所以上もの縄文時代の遺跡が八ヶ岳火山列、蓼科山、霧ヶ峰山塊、入笠山・守屋山塊の麓を中心に残されている。

米沢地区の地理的環境

米沢地区は茅野市域の北側、霧ヶ峰山塊を北に負う袋状の地形をなし、南東に八ヶ岳、南に赤石山脈の甲斐駒ヶ岳・鳳凰三山、その間に遠く富士山を望む位置にある。南に向いた袋状の地形は、八ヶ岳西麓に発達した台地の北端を断ち切って、西から南へ向きを変えながら流れる上川の沖積地と、ここに流れ込む幾筋もの小河川の扇状地から形づくられる。北から塩沢・北大塩・鋳物師屋・米沢台・埴原田の各集落が、扇状地

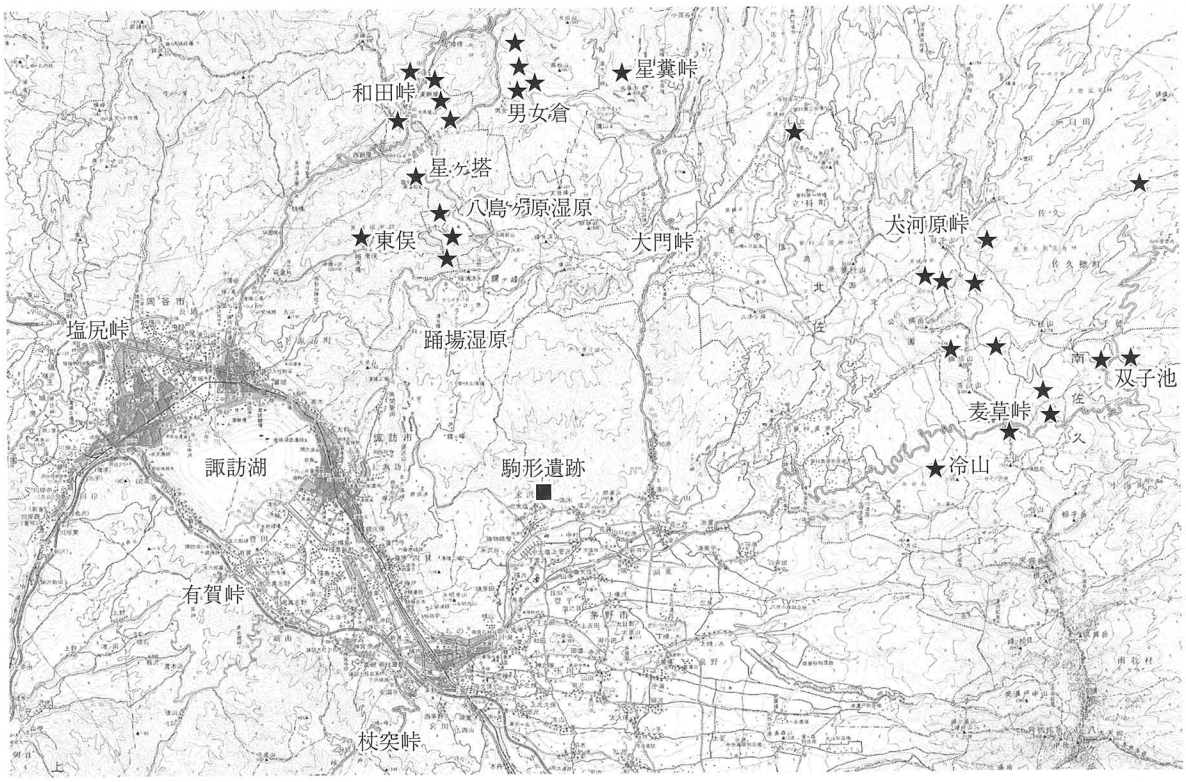
の末端付近から沖積地にかかる付近を中心に営まれている。

各集落の背後（北側）には霧ヶ峰の山塊が迫り、諏訪湖から吹き上げてくる北風は当たらない。そして南に向いた地形であることも相まって、冬場も過ごしやすい土地である。また山裾であるために水に恵まれた土地でもある。山塊の中腹にある高層湿原の「踊場湿原」やその南に発する小河川は、年間を通して安定した水量を保っている。沖積地に接するあたりの各所から、扇状地を伏流した水が湧き出しており、駒形遺跡の南東にある「大清水」は茅野市最大の水源地として有名である。飲料に適した水が変わることなく湧き出しており、米沢地区とその周辺地域の上水をまかなっている。

米沢地区の南縁を流れる上川は、霧ヶ峰山塊と北八ヶ岳に発する水を集めて諏訪湖に流れ込む、市内で最も大きな河川である。今日でもアマゴ・イワナ・アユなどの釣り場としてにぎわいを見せているが、縄文時代においては今よりも種類・数ともに豊富であったに違いない。上川はこの地域の人々に豊かな川の幸をもたらす存在であったと思われる。

霧ヶ峰山塊を南に流れ下る小河川が、北から藤原川・前嶋川・桧沢川・横河川である。これらの小河川が刻む谷や山塊に発達した尾根の筋を7～10kmほど北上すれば、本州最大の黒曜石原産地である「霧ヶ峰」へたどり着くことができる。谷筋に開かれた林道から黒曜石が点々と採集されており、霧ヶ峰産黒曜石の搬出ルートも推測されている（米考ク1973）。北から上の平、一ノ瀬・芝ノ木、駒形、大桜、棚畑といった米沢地区の主要な縄文時代の遺跡は、これらの小河川が霧ヶ峰南麓の平坦部にでるあたりに形成した扇状地、あるいは上川に向かって張り出した山裾のテラス状の台地に約1kmの距離をおいて列状に営まれている。

米沢地区は上川の沖積地とその支流の谷筋に発達した交通路によって、東は大門峠から佐久平を経て北関東、西は諏訪湖盆から松本平、伊那谷といった地域とつながっている。米沢地区には早期から晩期までの遺物が出土する棚畑遺跡や一ノ瀬・芝ノ木遺跡をはじめ、長期にわたり営まれた縄文遺跡が多く残されている



第２図　駒形遺跡と黒曜石原産地

が、各地の人々や文物、さまざまな情報の行き交う交通路に面した遺跡の立地が、こうした遺跡の継続性の高さに少なからず影響を及ぼしているのであろう。このような継続性の高い縄文遺跡が上川水系に沿って、点々と営まれている状況から、この水系沿いに発達した交通路は、すでに縄文時代の早い時期に市域と他の地域をつなぐ「幹線道路」として機能していたことがうかがわれる。時代は異なるが、古代の幹線道路の一つである「古東山道」は、市域の西壁をなす守屋山塊の鞍部を東に下り、現茅野市街地を経由して、上川水系に沿って大門峠に至るルートが有力視されている。

駒形遺跡の位置と諸環境

駒形遺跡はＪＲ中央東線茅野駅から北東へ約6km、上川に沿って東西に通じる県道192号（県道茅野停車場八子ヶ峰公園線）から1kmほど北に入った霧ヶ峰の裾、米沢地区の北大塩に所在する。

米沢地区最大の北大塩の集落は、同地区のほぼ中央に位置し、霧ヶ峰山塊に発する桧沢川・横河川の形成した扇状地の中央部から上川の沖積地に営まれている。駒形遺跡は北大塩集落の北東にあり、桧沢川左岸の扇状地形に立地する。

史跡範囲上方、国史跡の石柱付近では、南から南西方向に赤石山脈北端の甲斐駒形岳やその北に続く入笠山・守屋山が望めるほか、南西に棚畑遺跡のあるテラス状台地の一部を見ることができる。しかし東方に位置する八ヶ岳火山列と蓼科山の山なみは、遺跡範囲の東側境界となる明神尾根に遮られ、その姿を見ることはできない。史跡範囲下方の台地の先端部に立てば、眼下に扇状地扇端部から上川沖積地に営まれた北大塩集落の東端部と「大清水」水源が一望でき、その奥に上川による八ヶ岳西麓台地の浸食断面が東西に屏風を広げたように北面する。遺跡の背後は直ちに霧ヶ峰山塊となり、桧沢川の開析した谷筋が望める。

駒形遺跡は古くから知られた縄文時代の集落遺跡であるが、平成23年度の確認調査（12次調査）で平安時代の竪穴住居址（96号住居址）が発見され、新たに該期の遺跡であることが確認された。また平成6年度の長野県教育委員会による確認調査（4次調査）で旧石器時代の槍先形尖頭器、平成15・16年度の長野県埋蔵文化財センターによる発掘調査（6次調査）で中世の遺構と遺物も発見されている。

駒形遺跡の名は、遺跡内の字名の一つ「駒形」に由来する。遺跡のある扇状地から上川の沖積地にかかる一帯には、「駒（馬）」にちなむ字名やこれを連想させる「塩」を冠した字名がみられ、ここを信濃十六牧の一つで延喜式に記載されている「塩原牧」とする説がある。国史跡指定地内に塩原牧の守護神を祀った駒形神社の石祠が鎮座するほか、諏訪明神が鹿狩りの際に馬を繋いだといわれる駒繋石が史跡の隣接地にある。遺跡の東側には「塩ノ原」、「塩坪」、「塩沢」の字名があるほか、周辺に「野馬久保」、「駒見石」などの字名がみられる。

桧沢川左岸の扇状地形は、南北（頂部から端部）約650m、東西（端部の幅）約350mの広がりをもつ。標高930m付近から標高900m付近までが駒形遺跡で、その北側に縄文時代と平安時代の集落遺跡である大六殿遺跡が接している（第17図）。大六殿遺跡は平成11年に県営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われ、駒形遺跡との間に地形的な境界のないことが確認されている。こうした調査の結果から、駒形遺跡と一体となる縄文時代の集落遺跡の可能性が指摘されている。両遺跡を合わせた面積は、市域にある縄文遺跡で最大級の約110,000㎡を測る。

駒形遺跡の南東にある「大清水」水源から、縄文時代の遺物が採集されている。大清水遺跡として遺跡登録されているが、立地する地形の上で駒形遺跡の一部を形成する「湿地」に連なることから、同一遺跡とみてよいように思われる。

桧沢川の右岸にある大田苅遺跡は縄文時代と平安時代の集落遺跡で、大六殿遺跡ならびに駒形遺跡上方と

桧沢川を挟み東西に対峙している。平成11年に県営圃場整備事業に伴う発掘調査が行われ（第18図）、縄文時代では前期後半（末葉）、中期前半（中葉）、後期前半（前葉）の3時期の竪穴住居址が検出されている。桧沢川という地形上の大きな境界を挟んでいるが、直線距離にして150m前後と近い位置関係にある。また3時期の縄文時代の住居址が、駒形遺跡および大六殿遺跡でも発見されている。そのため駒形遺跡および大六殿遺跡と一体をなす縄文集落遺跡と考えることが可能である。

遺跡の立地する地形

茅野市における地形面の区分図（茅野市1986）によると、駒形遺跡のある桧沢川の扇状地は「第Ⅳ段丘面」に区分されている。第Ⅳ段丘面とは、「上川・柳川・宮川沿いに発達する地形面で、河床からの比高は数メートル前後で、厚さ2m前後のれき層をのせている浸食段丘である。上川沿いでは、沖積世の砂れき層のみで形成された面もある。この面上にはテフラ層をのせていない。」面である。

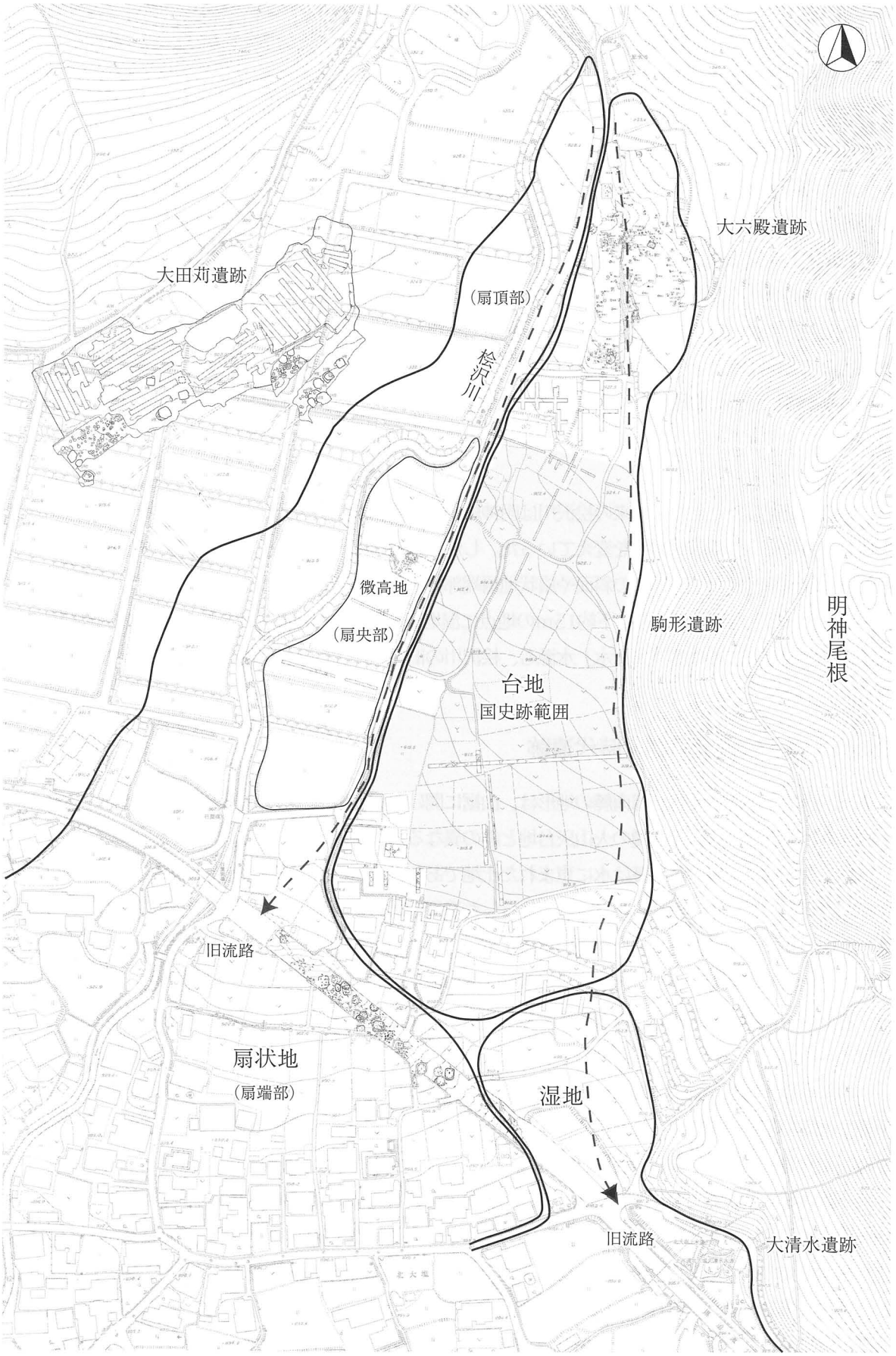
この記述によれば、桧沢川の扇状地形にローム（テフラ）層が存在しないこととなるが、桧沢川左岸の台地にあたる大六殿遺跡から国史跡範囲までの高い面には、「御岳火山・乗鞍火山起源の伊那谷型テフラ層」の堆積が確認されている。また国史跡範囲から桧沢川までの低い面、国史跡範囲を南へ降りた扇端部の緩斜面には、拳大から人頭大程度の河原石を大量に含む二次堆積のローム層が認められている。こうしたローム層の存在から、駒形遺跡に指定された範囲の大部分は、少なくとも「上川・柳川・宮川沿いに発達し、第Ⅱ段丘面を侵食して形成されたもので、厚さ1～2mのれき層をのせているところもある。沖積面との比高はほぼ10m以内である。この面の上には30～50㎝の厚さのテフラ層をのせている。」とする「第Ⅲ段丘面」に相当する地形面であると思われる。なお扇状地形の末端から上川までの沖積地は、これまでどおり第Ⅳ段丘面および沖積面とした地形区分でよいと思われる。

駒形遺跡の立地する扇状地は、基本的に霧ヶ峰山塊の火成岩・深成岩の火山岩類を基盤とし、この上に先に記したローム層が堆積して形成されたものであるが、その形成過程において桧沢川の沖積作用（例えば流れた方向）が深く関わっていることは明白である。そして、この沖積作用によって左岸に異なる要素の小地形が形づくられることとなった。これが「集落の拠点となる平坦な段丘面と、その段丘面より傾斜をもつ桧沢川の扇状地の扇央、湧水により湿地化した扇端部」（県埋文2007）と記された3つの小地形である。

本報告書では、この3つの小地形を、**台地**（大六殿遺跡から国史跡範囲までの、明神尾根の山裾に沿う高い面）、**扇状地**（国史跡範囲の西側境界から桧沢川までの低い面と、これに続く台地南下の緩やかな斜面。この中を便宜的に**扇頂部・扇央部、扇端部**と区分する）、**湿地**（明神尾根の山裾・台地・扇状地に囲まれた窪んだ面）と便宜的に呼称し、第3図のとおり区分を試みた。区分にあたっては、前述した地形図から読み取れる起伏をもとに、**ローム層およびその上位の自然堆積層に礫を含まない場所 ＝ 台地、ローム層およびその上位の自然堆積層に礫を含む場所 ＝ 扇状地、ローム層に達するまでに水の浸み出す場所 ＝ 湿地** と定義した。そこで3つに区分された小地形毎に、その形成過程を推測してみることとする。

台　地

現在の桧沢川は、霧ヶ峰山塊の谷筋を扇状地に向かって南東に流れ出た後、直ちに南西へ向きを変える。今日まで流れ出た方向が同じであるとすれば、本来の桧沢川は明神尾根の裾を南（大清水水源方向）に向かって流れていたと考えるのが自然である。やがて桧沢川によって運ばれた火山岩塊などの礫および土砂は山裾に堆積し、沖積低地にみられるような「自然堤防」状の高まりを形成した。この高まりが台地の原型と考えられる。そして山裾に見られる谷状地形を示す等高線、および4次調査で確認された山裾に入る谷状地形（第10図Ｅトレンチ）などが、例えるならば「後背湿地」にあたる部分と思われる。礫や土砂の堆積が進み、



第３図　駒形遺跡周辺の小地形区分

南北に細長い「撥形」の高まりが形づくられるに従って、流路の向きが南西に移動し、概ね現在の場所に定着したと考えられる。これ以降、高まりに桧沢川の沖積作用が及ぶことはなく、御岳火山・乗鞍火山起源の伊那谷型テフラが降下して土壌化し、現在の台地が形成されたと考えられる。

扇状地

台地の形成が進み、桧沢川が現在の流路付近を右往左往する中で、台地の西側および南側の低い面にローム・火山岩礫・土砂が運ばれ、ここでいう狭義の扇状地が形成された。台地との比高は、西側の扇状地扇央部が約5m、南側の扇状地扇端部が約10mである。扇状地扇央部付近の西側には、駒形橋付近から南西に伸びる微高地といえる高まりが形成されたほか、微高地と台地の間（南北に通じる農道付近）に旧流路の名残と思われる谷状地形が認められる。8次調査および12次調査において、この谷状地形を流れた後期前半（中葉）以降の土石流（土砂の押し出し）とみられる堆積層が確認された（第21～23図第2層群）。なお、この土石流による堆積層は、6次調査で確認された「Ⅱａ層」に相当する土層と考えられる。Ⅱａ層は後述する湿地へ向かうに従って礫の量が減少し、さらに湿地周辺に堆積していないことが確認されている（県埋文2007）。

湿　地

台地の項で記したとおり、本来の桧沢川は明神尾根の山裾を大清水水源に向かって流れていたが、台地が形成されるに従って南西に向きを変えていった。しかし台地下に水道（みずみち）が残っており、ここを流れた水（伏流水）が台地先端部の斜面や扇状地扇端部の各所から湧き出すこととなる。こうした伏流水の湧き出しによって、台地先端部の南下約15mの地点に湿地が形成されたと考えられる。以上の推測が妥当であれば、湿地の南東に連なる「大清水」水源も、桧沢川の旧流路に関わる伏流水の湧き出しと考えることができる。

第2節　霧ヶ峰南麓の縄文時代遺跡

米沢地区を中心とする霧ヶ峰南麓の地形は、山裾に開けた扇状地形と、その南縁を流れる上川の沖積地から形作られており、八ヶ岳西麓の火山灰台地と趣の異なる景観が広がっている。

前述したように、霧ヶ峰南麓は水に恵まれた土地であり、狩猟および採集に加え、漁撈による生業活動もさかんに行われていたと考えられている。こうした漁撈活動の主な舞台となった上川は、その右岸に沖積地を形成するが、山地の占める割合の高い市域において、この沖積地は交通路に最適な平坦面であったに違いない。また霧ヶ峰南麓を流れ下る小河川の谷筋、あるいは山脚の尾根筋を7～10㎞ほど北上すれば、「星ヶ台・星ヶ塔・和田峠・星糞峠」などの名で知られる本州最大の「霧ヶ峰」の黒曜石原産地にたどり着くことができる。

このような多様な自然環境に囲まれ、かつ良質な黒曜石の原産地を背後にかかえる立地を背景に、霧ヶ峰南麓には同じ茅野市域である八ヶ岳西麓と異なる特徴をもった縄文時代の遺跡が残されることとなった。

黒曜石を大量に保有する縄文時代遺跡

霧ヶ峰南麓にある縄文遺跡の特徴といえば、まず黒曜石を大量に保有する点が挙げられる。発掘調査された集落遺跡では、時期に関わらず、例外なく、黒曜石が大量に出土する。例えば、中期を中心に営まれた国宝土偶（縄文のビーナス）の出土した棚畑遺跡では、約9,000㎡が発掘調査され、110.17kgの黒曜石が出土している。報告書では、原石の平均重量が25ｇであることから、原石にすると4,400個以上が運び込まれたこととなり、石鏃の平均重量を仮に0.5ｇとすると、約22万個もの石鏃をつくることができると試算されて

第４図　霧ヶ峰南麓・蓼科山麓・八ヶ岳西麓の遺跡（1/50,000）

14 上の棚、15 キツネ原、16 矢の口、17 上之段、18 高風呂、19 窪田、20 枡形、21 上の平、22 湯川経塚、23 イモリ沢、24 上ゲ溝、25 横山、26 上の平、27 丸山、28 よせの台、29 芝ノ木、30 一ノ瀬、31 鳥の窪、32 大六殿上、33 大六殿、34 駒形、35 大清水、36 上の山、37 向林、38 三軒屋、39 大桜、40 八幡坂、41 中ノ平、42 丸山、43 蛇石、44 棚畑、50 長峯、51 聖石、52 滝之脇、53 神ノ木、54 上ッ原、55 下ッ原、56 下島、57 松原、58 山口、59 新井下、60 中ッ原、61 花蒔、62 辻屋、63 中村、64 下菅沢、65 高尾戸、66 上半田、67 子の神、68 中原、69 宮の上、70 八幡社前、71 山寺、72 経塚、73 権現林、74 日向上、75 塩之目尻、76 中ツルネ、77 梨ノ木、78 師岡平、79 向原、80 立石、81 城、82 水尻、83 中ッ原、A84 神立林、85 与助尾根、86 与助尾根南、87 尖石、88 竜神平、89 新水掛A、90 鴨田、91 稗田頭A、92 中原、93 細沢、94 棚畑、158 茅野和田、166 上の平、168 上見、202 糸萱、203 朝倉城跡、204 菖蒲沢A、205 菖蒲沢B、206 竜神平下、207 新水掛B、208 金堀場、209 稗田頭B、210 威力不動尊東、211 古田城跡、212 尼御前、213 田部石、214 埴原田城跡、215 埴原田、216 李久保、217 鬼場城跡、218 土佐屋敷、219 御座石神社、220 齢松山城跡、233 矢倉田、234 山之神沢、235 北山菖蒲沢A、236 広井出、237 北山菖蒲沢B、238 珍部坂A、239 箒原、240 珍部坂B、241 牛ノ児、242 間久保、243 姫御前、244 桂入、246 中島、254 石塔坂、255 上ノ棚、260 藤右衛門前、277 広畑、284 日向前、287 平十郎久保、288 小久保、290 塚、291 梵天原、302 中ッ原B、304 稗田頭C、309 菖蒲沢、310 大田苅、311 出ノ脇、312 買地、313 久保御堂、315 中尾、317 トクアミ、320 スナアラ古墳、327 別田沢、328 町道下、333 尖石南、339 南堀東

いる（市教委1990）。発掘歴のない遺跡であっても、量の多寡はあるものの、地表面に黒曜石を見ることができる。出土および散布する黒曜石が、原石、石核、剥片、砕片、両極石器（両極剥離痕をもつ石器）、石鏃やその未製品など黒曜石製石器製作の各工程を示す遺物で構成されることから、黒曜石製石器（特に石鏃）が大量に製作されていたことがうかがえる。また原石・両極石器などの塊状の黒曜石が一箇所にまとめられた「黒曜石集積」と呼ばれる遺構が、市内各所の縄文遺跡から発見されているが、こうした遺構は霧ヶ峰南麓の縄文遺跡に集中することがこれまでの発掘調査によって確認されている。

こうした黒曜石との密接な関係は、黒曜石原産地の直下である霧ヶ峰の南麓に遺跡が立地することに他ならないが、この点は古くから先学らから指摘されているところである。また黒曜石原産地同定分析の進展によって、霧ヶ峰産の黒曜石が関東・東海・北陸地方を中心に、遠くは東北地方や近畿地方にまで流通することが明らかにされているが、これと霧ヶ峰南麓の縄文遺跡群が深く関わるとする指摘も以前からなされている。

このように黒曜石製石器（石鏃）の製作工程の復元、黒曜石（原石）の入手や流通過程の解明はもとより、中期の石鏃の減少を論拠の一つとする「縄文中期農耕論」の検証に寄与する可能性を秘めた多くの遺跡が霧ヶ峰の南麓には残されている。こうした点において霧ヶ峰南麓の縄文遺跡群は注目されてきたのである。

継続性の高い縄文時代遺跡

霧ヶ峰南麓の縄文遺跡は中期を中心に営まれる遺跡であっても、前後の時期に集落の営まれるものが多い。つまり遺跡の継続期間が長いのである。この点が、中期に始まり中期に終わる遺跡の多い八ヶ岳西麓の縄文遺跡との大きな違いであり、霧ヶ峰南麓における縄文時代遺跡の特徴である。そして扇状地やテラス状の台地に所在する拠点とみられる集落遺跡ほど、継続期間の長いことも明らかにされている。

他地域の遺物を保有する縄文時代遺跡

もう一つ特徴を挙げるならば、他地域（遠隔地）の遺物の出土が目立つ点である。代表的な遺物といえば、縄文時代中期を中心に搬入されたと考えられているヒスイ製およびコハク製の装身具（垂飾）であろう。市域の縄文遺跡はこれらの遺物を豊富に保有することで知られているが、八ヶ岳西麓よりも霧ヶ峰南麓での出土事例（点数）が多い傾向にある。特にコハク製垂飾はその傾向が顕著である。

第1表　霧ヶ峰南麓の遺跡と竪穴住居址数

遺跡番号	遺跡名	時代・時期															備考
		旧石器	縄文							弥生			古墳	奈良	平安	中世	
			草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	前期	中期	後期					
18	高風呂			3	31	15			5								1984年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
26	上の平	●			1	45			6							●	1994年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
27	丸山				●	●											
28	よせの台			●	4	9	●										
29・30	一ノ瀬・芝ノ木	●		2	18	53	9	2							14		1976年発掘調査(原因－工場建設)
31	鳥の窪				●	●										●	1994～1998年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
32	大六殿上														●		
33	大六殿			1	3		4								2		1999年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
34	駒形	●		●	62	22	3	●	11						1		2000年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)ほか
35	大清水					●											
36	上の山					●											
37	向林			10	1										2		1998年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
38	三軒屋				●												
39	大桜			●	●	14	9		5			●			6		1999～2000年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
40	八幡坂			●	4	11	1		6							●	1997～1998年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
41	中ノ平					●	●										
42	丸山			●	2	1			1								1973年発掘調査(原因－会社更生施設建設)
43	蛇石								●								
44	棚畑	●		●	3	146	●	●							9	●	1986年発掘調査(原因－米沢工業団地造成)
212	尼御前					●											
213	田部石					●											
214	埴原田城跡															●	
215	埴原田								●								
216	李久保								●								
241	牛ノ児								●								
242	間久保																不明
243	姫御前																不明
244	桂入																不明
287	平十郎久保				1												
288	小久保								●						●		
309	菖蒲沢								●								
310	大田苅				10	2	1								5		1999年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
311	出ノ脇								●								
312	買地			5	●	1											1999年発掘調査(原因－県営ほ場整備事業)
	合計			21	140	319	27	2	34						39		

●は遺物の出土のみ

駒形遺跡の前期住居址は、早期・末葉～前期・初頭とされたものを含む

第２表　発掘された霧ヶ峰南麓の遺跡の概要①

遺跡番号 遺跡名 種別 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	関係文献
18 高風呂 たかぶろ 集落址 965	2,000	1984.5.23～ 1984.8.10	縄文	住居址51 －早期3 －前期31 －中期12 －不明5 土坑42 方形柱穴列1 集石8 黒曜石集積4	早期・前期・中期 土器 石器 玦状耳飾 木製品	・縄文時代早期末葉～前期初頭を中心とする集落址 ・この時期の尖底土器群は貴重な資料	『高風呂遺跡』 茅野市教育委員会 1986年
26 上の平 うえのだいら 集落址 940	6,342	1994.5.24～ 1994.12.22	旧石器 縄文 中世	住居址52 －前期1 －中期45 －不明6 土坑269 黒曜石集積1 ピット群 地下式坑7基	彫器・剥片 中期後半土器 黒曜石製石器 打製石斧 白磁・天目茶碗	・旧石器時代の散布地 ・縄文時代中期の集落址	『上の平遺跡』 茅野市教育委員会 1995年
28 よせの台 よせのだい 集落址 920	460	1976.6.12～ 1976.7.19	縄文	住居址13 －前期4 －中期9小竪穴 小竪穴22	早期・前期・中期後半・後期初頭土器 石器 玦状耳飾	・縄文時代中期後半は隣接する芝ノ木・一ノ瀬遺跡の支村的な性格が考えられる	『よせの台遺跡』 茅野市教育委員会 1978年
29・30 芝ノ木・一ノ瀬 しばのき・いちのせ 集落址 930	20,081	1996.6.4～ 1997.1.31 1997.4.21～ 1998.1.30	旧石器 縄文 平安 近世	住居址98 方形柱穴列22 石棺墓44 土坑773 住居址14 黒曜石集積2 掘立柱建物址1	槍先形尖頭器 ナイフ形石器 早期前半～晩期初頭土器片 土偶・土製耳飾 石鏃・スクレイパー 灰釉陶器坏 鉄製雁股鏃 染付碗片	・縄文時代早期前半～晩期初頭まで継続する拠点的な集落で、黒曜石製石器が多量に出土しており、黒曜石製石器の製作遺跡であったと考えられる。	『一ノ瀬・芝ノ木遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
33 大六殿 だいろくでん 集落址 930	6,000	1999.9.9～ 1999.12.28	縄文 平安	住居址8 －早期前半1 －前期末葉3 －後期前葉4 竪穴状遺構3 配石1 土坑158 焼土址5 屋外炉1 住居址2	早期前半・前期前半・前期末葉・中期初頭・後期前葉 土器 石器 玦状耳飾 土師器・灰釉陶器・須恵器 砥石	駒形遺跡と連続する縄文時代と平安時代の集落址	『大六殿遺跡』 茅野市教育委員会 2002年
37 向林 むかいばやし 集落址 925	5,000	1998.6.15～ 1998.10.30	縄文 平安	住居址11 －早期10 －前期1 土坑60 住居址2	早期押型文土器片 スクレイパー・石鏃・特殊磨石 前期土器片 石鏃・磨石・打製石斧 須恵器坏・須恵器横瓶・土師器甕	・縄文時代早期、前期末葉の集落址 ・平安時代の集落址	『向林遺跡』 茅野市教育委員会 1999年

第２表　発掘された霧ヶ峰南麓の遺跡の概要②

遺跡番号 遺跡名 種別 標高(m)	調査面積 (㎡)	調査期間	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	関係文献
39 大桜 おおざくら 集落址 892	1,900	2000.7.23～ 2001.1.13 2001.6.26～ 2001.9.6	縄文 平安	住居址28 土坑2228 埋設土器9 焼土址6 列石、配石 黒曜石集積1 住居址6 焼土1	中期後半～後期中葉土器 翡翠製垂飾 曹長石製垂飾 琥珀製垂飾 土偶 土師器甕・坏 須恵器甕・坏 鉄製紡錘車	・縄文時代中期から後期中葉の拠点的な集落址	『大桜遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
40 八幡坂 はちまんざか 集落址 892	3,500	1997.7.7～ 1998.1.14	縄文 中世	住居址22 土坑236 掘立柱建物址 方形竪穴16 土坑55 地下式坑13	縄文土器 石器 内耳土器 灰釉陶器 石臼 小金銅仏	・縄文時代前期末葉から後期前葉の集落址 ・霧ヶ峰南麓で稀な中世の複合遺跡	『八幡坂遺跡』 茅野市教育委員会 1998年
42 丸山 まるやま 集落址 893	3,000	1973.11.16 ～ 1973.12.11	縄文	住居址3 －前期2 －中期１ 住居址(時期不明) １ 小竪穴１０	前期・中期土器 石器	・上川沖積地の中の丘陵上にある小規模な集落址 ・前期末葉、下島式の完形に近い土器は優品	『丸山遺跡』 茅野市教育委員会 1974年
44 棚畑 たなばたけ 集落址 881	9,000	1986.4.9～ 1986.11.1	旧石器 縄文 平安 中世・近世	住居址149 －前期3 －中期146 竪穴状遺構2 方形柱穴列14 土坑643 ピット群 集石遺構7 敷石遺構1 黒曜石集積5 住居址9 掘立柱建物址3 土坑1 掘立柱建物址3 柱穴列1 土坑8	尖頭器・剥片 縄文土器・石器 土製品 土偶 (国宝『土偶』1) 平安土器 土製品・鉄製品 石製品 銭貨	・縄文中期の集落を主とする遺跡 ・中期の集落市は住居址が環状に配列する ・環状集落の中央広場より国宝『土偶』(縄文のビーナス)が出土	『棚畑遺跡』 茅野市教育委員会 1990年
310 大田苅 だいたがり 集落址 929	5,200	1999.6.22～ 1999.10.15	縄文 平安	住居址13 －前期10 －中期2 －後期1 土坑182基 住居址5	有茎尖頭器 土器・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・玦状耳飾 土師器坏・甕 須恵器坏・瓶 灰釉陶器碗	・縄文時代前期末葉を主体とする集落址 ・平安時代の集落址	『大田苅遺跡』 茅野市教育委員会 2001年
312 買地 かいち 集落址 897	939	1999.5.20～ 1999.6.30	縄文	住居址6 －早期5 －中期1 土坑5	早期末土器片 スクレイパー・石鏃剥片・砕片 中期中葉・後半土器片	・縄文時代早期末葉の集落址	『買地遺跡』 茅野市教育委員会 2000年

第3章　これまでの調査の概要

田實文朗の表面採集

駒形遺跡は棚畑遺跡、大桜遺跡、一ノ瀬・芝ノ木遺跡などとともに、黒曜石製の石鏃がたくさん拾える遺跡として、すでに明治時代には地元住民や考古学の愛好者らにとって注目される存在であった。大正から昭和の初めにかけて北大塩で開業医を営んでいた田實文朗氏は、諏訪考古学の先駆者の一人であったともいわれ、霧ヶ峰南麓から蓼科山麓の縄文遺跡を主なフィールドとして熱心に考古資料の採集を続けていた愛好家として広くその名が知られている。駒形遺跡からも多くの遺物を採集しており、その数は万単位であったと伝えられている。大正9年には『諏訪史』第一巻（鳥居1924）の編纂を任された東京帝国大学の鳥居龍蔵氏が駒形遺跡を訪れ、田實氏の採集資料を実見している。『諏訪史』第一巻の編纂に貢献するところが大きかったといわれるこの田實氏の資料は、現在、諏訪市博物館に寄託・保管されている。

諏訪実業高等学校と尖石考古館による発掘調査

駒形遺跡における最初の発掘調査は、尖石考古館の宮坂英弐・虎次両氏の指導を得て、昭和36年に諏訪実業高校地歴部によって行われた（1次調査）。この調査では前期前半（初頭）の竪穴住居址（1号住居址）、中期後半の竪穴住居址（2号住居址）、後期前半（前葉）の配石遺構および土坑を発見した。当時、1号住居址は床面から出土した尖底土器から早期終末の竪穴住居址と報告されているが（宮坂1961・1966）、主体をなす土器の時期によれば前期前半（初頭）の竪穴住居址とすべきものである（茅野市1986、第5図）。その後、諏訪実業高校地歴部は、昭和41年に尖石考古館の指導を受け、1次調査の際に竪穴住居址の発見された畑を再度調査して（2次調査）、3号から5号住居址とした中期後半の竪穴住居址を3軒発見している（茅野市1986、第5図）。

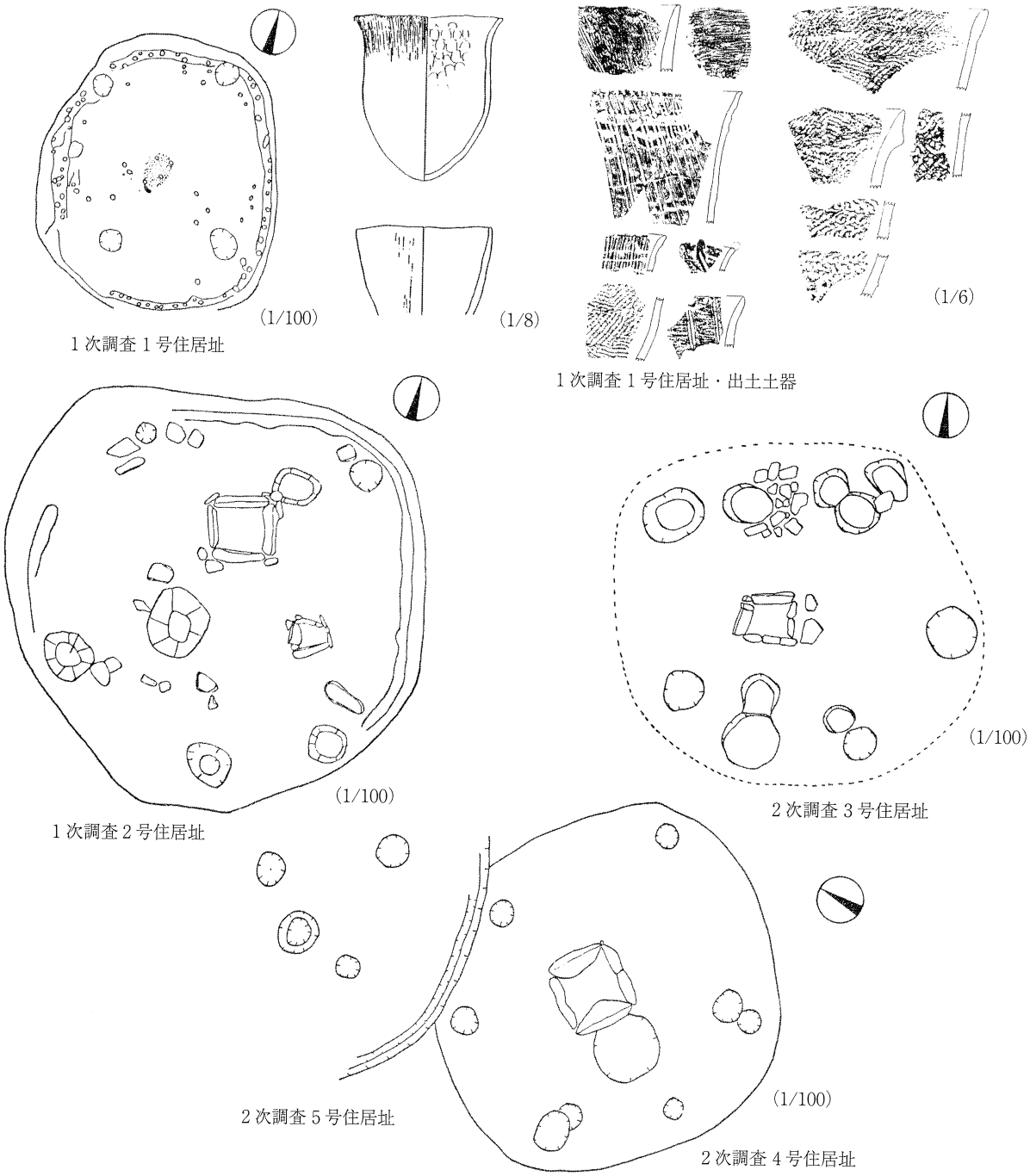
以状の記述は『茅野市史』上巻によるもので、5軒の竪穴住居址の位置関係を示した平面図も同書に記載されている。しかし、これらの竪穴住居址がどこから発見されたのか、つまり地形図上での位置がはっきりしていないのが現状であった。

今回の発掘調査報告書の作成にあたり、1次調査および2次調査に際し、宮坂虎次氏から畑の借用依頼を受けた地権者、ならびに発掘現場を見学した複数の地元住民から話を聞くことができた。『茅野市史』上巻刊行以前の宮坂両氏の報告などに、今回得られた新たな証言を加え、当時の発掘調査を振り返ることとする。

当初、1次調査は駒形神社の南側斜面の畑6筆（5116－1・5116・5117・5118・5119・5120番地）が対象範囲とされていた。その一部にトレンチを設定し掘り下げたが、黒色土層が厚く堆積し、数片の土器を検出しただけで良い結果が得られなかったようである。また予定地の所々をボーリング調査したものの、トレンチ調査を行った地点と同様の地下の状態と考えられた。そこで台地平坦面の畑に調査地点を移し、ここから前期前半（初頭）の竪穴住居址（1号住居址）と中期後半の竪穴住居址（2号住居址）、後期前半（前葉）の配石遺構および土坑が発見されている。『日本考古学年報14』「長野県茅野市駒形遺跡」（宮坂1966）や、「茅野市米沢北大塩駒形遺跡」と題した宮坂英弐氏の昭和43年の原稿によると、1号住居址は駒形神社の南側の畑（5122番地）、2号住居址は農道を挟んだ北側の畑（5130－イ－1番地）から発見されたと記されている。ところが、聞き取りの内容によれば、駒形神社から南におよそ200m離れた、台地の先端部に近い畑（5085？・5087・5090番地）で調査が行われたことが判明した。この証言は現場の指導にあたっていた宮坂虎次氏が『長野県史』考古資料編主要遺跡（中・南信）（宮坂1983）に報告した「発掘地点は、台地の突端から約20m離れた平坦な畑である」とする記述と概ね符合している。では、先に2軒の竪穴住居址が

発見されたとされる駒形神社周辺の台地平坦面の畑では調査が行われなかったのだろうか。これについては、駒形神社に近接する南側の畑（5121・5122番地付近）で、1次調査が行われていたとの証言が得られており、これにより内容はともかく、宮坂英弐氏の報告ならびに原稿にある駒形神社周辺の台地平坦面における調査の実施が裏づけられたこととなる。

上記のとおり、1次調査と2次調査には、調査地点の混乱やはっきりしない点が少なからずある。それでも発掘という考古学的な方法によって、現在知り得ている駒形遺跡の性格（集落遺跡）、および中心となる時期（前期～後期）が概略ではあるものの早い時期に明らかにされ、田實氏が採集した膨大な資料とともに駒形遺跡の重要性が広く知られることとなった。こうした点から極めて意義ある調査であったということができる。



第5図　1・2次調査　竪穴住居址と出土遺物

米沢考古学クラブの黒曜石搬出ルートの調査

昭和41年の2次調査の後、記録に残る発掘調査は市教育委員会による平成3年の宅地造成工事（3次調査）となるが、この間に「米沢考古学クラブ」による霧ヶ峰産の黒曜石の搬出ルートを探る調査・研究が行われている。

地元の数人の高校生が中心となって結成された米沢考古学クラブは、霧ヶ峰南麓の扇状地を形成する小河川沿いに開かれた林道をたどり、黒曜石製の石鏃や破片を根気よく拾い集めた。こうした現地踏査を重ね、茅野市域側の縄文遺跡にいたる霧ヶ峰産の黒曜石の搬出ルートを幾筋か推測し、昭和48年に『古道－霧ガ峰南部における先史時代の黒耀石運搬ルートと考えられる古道の調査－』としてまとめた（米考ク1973）。駒形遺跡にいたるルートは十分な調査がなされていないが、霧ヶ峰高原から「踊場湿原」を経て、南方へ伸びる尾根筋「大久保－池のくるみ線」を下り、桧沢川右岸の谷筋を抜ける「桧沢線」が推定されている。

これら河川沿いに推定されたルートについて、「谷筋は見通しが利かない上に危険であり、尾根筋に推定すべきである」との指摘もなされている。しかし霧ヶ峰南麓の縄文遺跡への黒曜石の搬出ルートに着目した最初の考古学上な調査・研究であり、拠点集落と目される霧ヶ峰南麓の縄文遺跡が黒曜石を搬出するための基地的役割を果たしたとする視点が広く知られるきっかけとなった。こうした点において学術的に高く評価すべき業績であるといえよう。

平成3年以降の発掘調査

平成3年の3次調査以降、さまざまな地点でさまざまな原因による発掘調査が行われ、次第に遺跡の実態が明らかにされていくこととなる（第6図、第3表）。以下に、その概略を記す。

3次調査（第7図）

国史跡範囲の南側隣接地、扇状地扇端部に移行する台地先端の南側斜面が宅地造成されることとなり、削平部分（道路・各区画の北側）を対象にトレンチによる発掘調査が行われた。

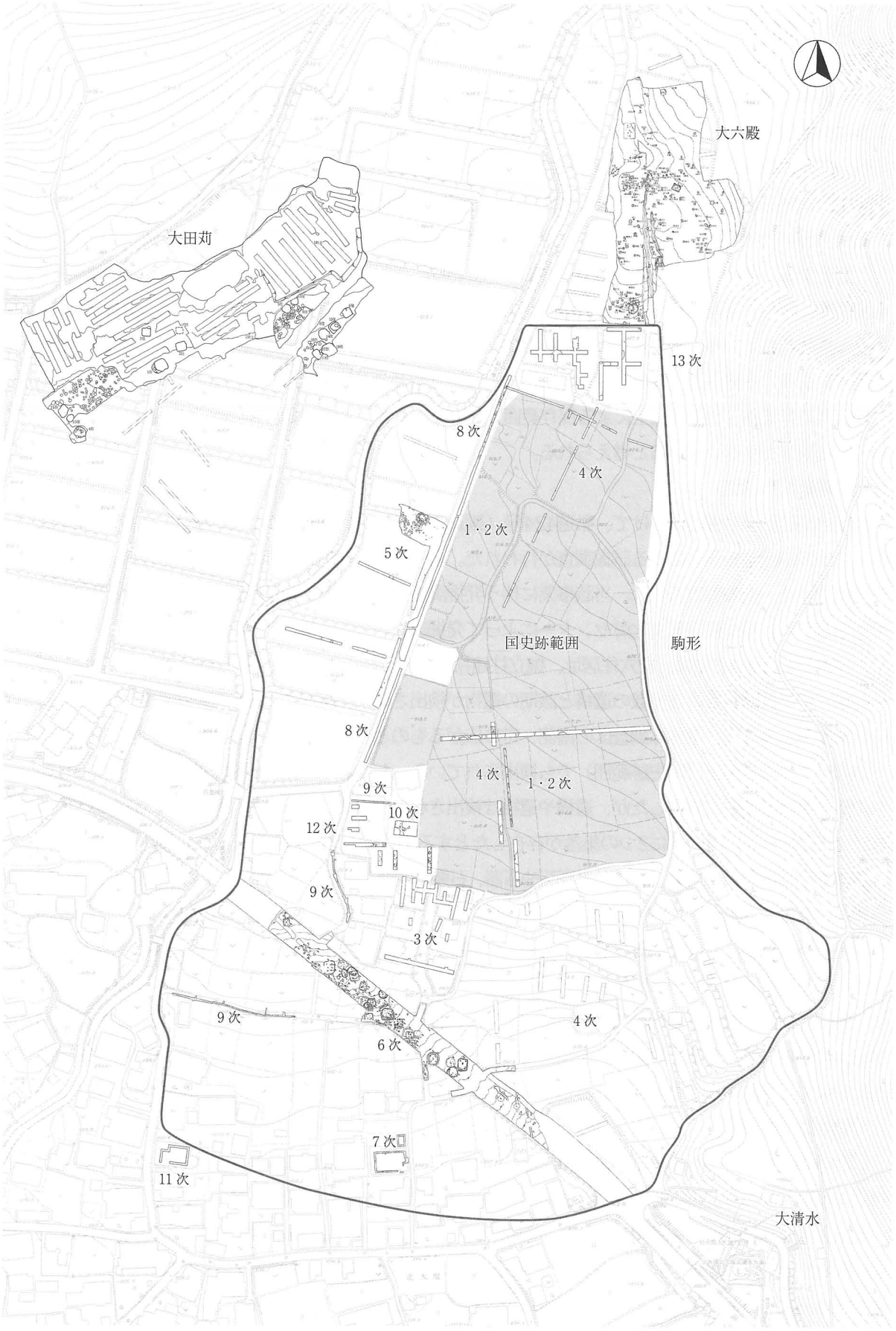
礫を伴う直径100㎝ほどの円形の土坑が検出され、ここから前期前半（初頭～前葉）の土器が複数出土した。検出された遺構が土坑1基であったこと、調査面積に対する遺物の出土量が少ないこと、傾斜のきつい斜面であることなどから、未調査範囲（保存範囲）に濃密な遺構の埋蔵は考えにくいとされている。

4次調査（第8～10図）

平成6年6月の表面採集調査の結果を踏まえ、県営圃場整備事業計画地を対象にトレンチによる試掘調査が行われた。

早期後半（末葉）から前期前半（初頭）、前期前半（初頭・前葉）、中期後半の多数の竪穴住居址、後期前半（前葉）の配石遺構などが台地の平坦面から検出された。ここに中期を中心とした100軒を超える規模の集落遺跡が営まれ、集落は時期により場所や構成を変えながら継続するものと考えられている。

台地の西側に桧沢川、南側に湿地や「大清水」水源などの水場があり、北側に動植物を育んだ森が広がっている。こうした縄文時代の集落を取り巻く生活空間が、駒形遺跡とその周辺に今もなお良い状態で残されている。また本州最大の黒曜石原産地を北に負い、黒曜石の搬出ルートの登り口に位置する遺跡の立地を背景に、大量の黒曜石が遺跡内に運び込まれている。表面採集調査や試掘調査時に住居址から出土した大量の黒曜石は、石器製作の各工程を示す資料で占められており、黒曜石製石器の製作および交易に深く関わった遺跡であることが、この試掘調査によって明らかにされた。霧ヶ峰南麓に所在する黒曜石の集積、あるいは石器製作に関する拠点集落の中で、特に重要な遺跡であるとして、1998年（平成10年）に台地上の平坦部約27,000㎡が国史跡に指定されることとなった。



第6図　駒形遺跡、大六殿遺跡、大田苅遺跡調査位置図（1/3,000）

5次調査（第11・12図）

国史跡範囲の西側隣接地、桧沢川までの扇状地扇央部一帯が県営圃場整備事業にかかるため、削平部分を対象に発掘調査が行われた。

狭い範囲の調査であったが、検出された遺構は敷石住居址、土坑（墓坑群を含む）、埋設土器、配石、土器集中、黒曜石集中、焼土址と多岐にわたり、一箇所に後期集落を凝縮したかのような状態である。出土した遺物は後期前半（前葉～中葉）にほぼ限られるため、各該期の短い期間の中でそれぞれの遺構がつくられたこととなる。各遺構の帰属時期も明らかにされており、住居域 → 住居域＋墓域 → 生産域（黒曜石製の石器製作に関わる場所で、黒曜石の貯蔵・加工・選別または廃棄の場のいずれか）という土地利用の移り変わりが捉えられている。また調査の行われた地点は、桧沢川の旧流路とみられる谷状地形（国史跡範囲の西側境界に沿う）と微高地（駒形橋付近から桧沢川に沿う）といえる微地形からなることが確認された。前述した後期の各遺構、および盛土による保存範囲（1～4トレンチ）から確認された竪穴住居址と土坑は、いずれも微高地につくられていると考えられる。

6次調査（第13図）

扇状地扇端部から湿地にかけて、県道424号（諏訪茅野線）が新設されることとなり、2003年（平成15年）に茅野市教育委員会による試掘調査が行われた。その結果、約3,000㎡から前期とみられる遺構・遺物が確認された。市教育委員会は、当該事業に伴う発掘調査主体を担うことが困難である旨を長野県教育委員会に申し入れ、長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われることとなった。

2ヶ年に及ぶ調査の結果、竪穴住居址、掘立柱建物跡、方形柱穴列、土坑、屋外炉などの前期前半（初頭～前葉）にほぼ限定される多数の遺構と該期の遺物が検出された。調査された前期前半の集落は、縁辺に近い北側部分とみられ、主体は調査区の南側一帯に広がるものと推測されている。該期の集落は、調査区より一段高い北側の台地上（国史跡範囲）でも検出されている。しかし扇状地と台地との間を部分的（県道本線への取り付け道路）に調査したが、遺構や遺物は検出されなかった。両小地形に営まれた該期の遺構に連続性がないとすれば、同時期に2つの集落が存在したとする集落像を描く必要があるとした。

遺構および遺構外を含め、黒曜石の原石や石器、石鏃の製作工程を示す資料が55,325点出土した。石核から獲得した適切な大きさの剥片を素材に石鏃が製作された工程とともに、原石の大きさ、および両極石器の形状とそれに施された加工剥離に着目し、原石に両極打撃を加えて素材をつくり、その素材に加工剥離を加えて石鏃が製作されたとする別の製作工程が示された。また出土した前期前半とみられる8,195点の黒曜石に、過去に駒形遺跡から出土した中期前半（中葉）、後期前半（中葉）の黒曜石と、北側に接する大六殿遺跡出土の前期後半（末葉）の黒曜石を加えた計8,295点の産地同定分析が行われた。その結果、すべての時期において「諏訪星ヶ台産」とされる黒曜石が最も多く持ち込まれていることが明らかとなった。

7次調査（第7図）

扇状地の扇端部、6次調査区から約50m南の地点に個人住宅ならびに倉庫が建築されることとなり、建物外周を筋掘りする基礎掘削範囲を対象に本調査および工事立会が行われた。

個人住宅建築範囲から前期前半（初頭～前葉）の竪穴住居址2軒と土坑4基、倉庫建築範囲から前期前半（初頭～前葉）の竪穴住居址2軒が検出された。遺構のつくられた時期および位置から、6次調査で確認された前期前半集落に伴うものと考えられる。これにより該期の集落範囲が南へ広がることが確実となった。検出された遺構は建物の基礎下に保存されている。

8次調査（第14図）

国史跡範囲の西側境界に沿う市道（農道）に水道管が敷設されることとなり、幅1mから3m、長さ約420mの範囲を対象に発掘調査が行われた。調査範囲の北端が扇状地扇央部付近の微高地、それより南側が台地と扇状地を区分する谷状地形（旧流路）に位置している。

調査の結果、微高地から後期前半（前葉）を主体とする土坑46基が検出された。この中に「鉢被葬」のある墓坑、精製深鉢・粗製深鉢・注口土器など数個体の土器（片）がまとまって出土した土坑がある。土坑群は立地および時期からみて、5次調査で確認された後期前半集落の一部と考えられる。一方、調査範囲の南側には拳大から人頭大の礫を大量に含む黒色土層ないし黒褐色土層が厚く堆積し、早期後半（末葉）から後期前半（中葉）までの縁辺に磨滅の目立つ土器片と黒曜石が出土した。この遺物包含層の上位層は、後期前半（中葉）以降に谷状地形を南に流れた土石流による堆積とみられ、その一部が12次調査の1号試掘溝から4号試掘溝で確認されている。

9次調査（第15・16図）

台地および扇状地扇端部の市道内に下水道管が敷設されることとなり、幅70cmから150cm、総延長約125mの範囲を対象に発掘調査が行われた。

1区（台地西側斜面～扇状地扇央部）から直径約80cmの円形の土坑が1基、2区（扇状地扇端部）から前期前（初頭～前葉）の竪穴住居址7軒と土坑4基、3区（台地西側斜面）から坑底ピットのある直径110cmほどと推測される円形の土坑が1基検出された。1区と3区の土坑は、検出された位置からみて、台地上に営まれた縄文集落に伴うものと考えられる。そして3次調査で検出された土坑とともに、台地の縁辺部（斜面）に土坑群を形成する可能性が考えられる。2区から検出された前期前半の竪穴住居址と土坑は、6次調査で確認された扇状地扇端部に営まれた該期集落の一部である。

10次調査（第7図）

台地の南西端、国史跡範囲の西側隣接地に個人住宅が建築されることとなり、建物範囲を総掘りする基礎工事に伴い発掘調査が行われた。

その結果、保存状態の極めてよい遺物包含層の下から、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）、中期後半と時期の不明な8軒の竪穴住居址が、多数の土坑とともに切り合いながら検出された。この調査によって、国史跡範囲の外側（台地上）に縄文集落の広がることがほぼ確実となり、これを受けて12次調査および13次調査が行われることとなった。検出された遺構は建物の基礎下に保存されている。

11次調査（第6図）

扇状地扇端部の南西端、遺跡範囲境界付近にある個人住宅が建て替えられることとなり、建物範囲を筋掘りする基礎工事に伴い工事立会が行われた。

事業地は6次調査区から南西に約150m離れているが、扇状地扇端部の頂部付近に位置するため、前期前半集落に関わる遺構や遺物の検出が予想された。工事立会の結果、表土層以下の土層が、桧沢川の供給した礫を大量に含む黒色土層ならびに褐色砂質土層、その下が黄褐色砂層であることが確認された。これらの層に掘削が及び、その平面と断面を精査したが、遺構や遺物は検出されなかった。こうした状況から、事業地は遺跡から外れている可能性が高いと考えられている。

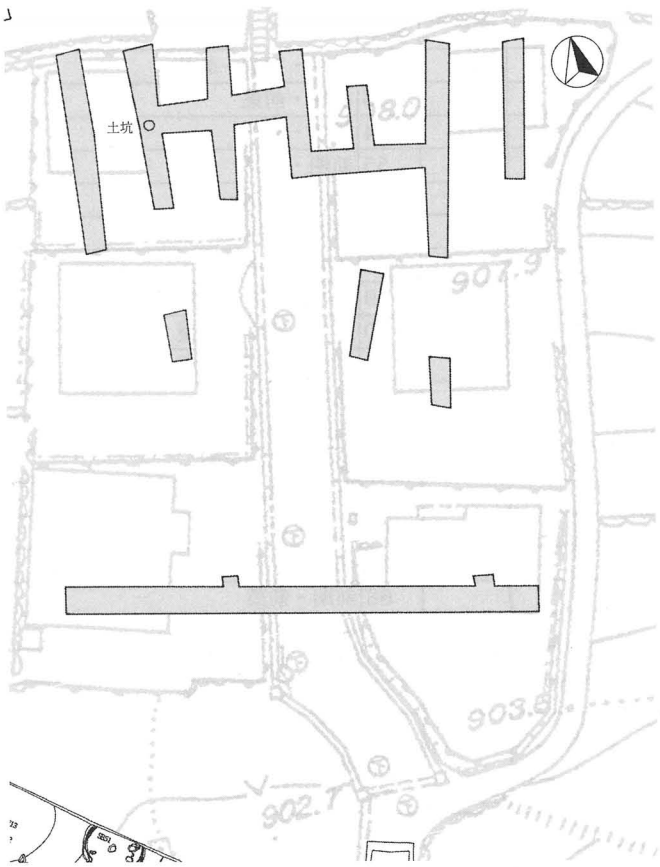
第３表　平成３年以降の駒形遺跡発掘調査等

調査年次	小地形	調査原因	調査機関	調査期間	調査面積	主な遺構	主な遺物
3次	台地	宅地造成	市教委	1991.9.12	288 ㎡	土坑1	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石
4次	台地・湿地	試掘調査	県教委	1994.7.4～ 1994.7.13 1994.11.24～ 1994.12.1 1996.7.3～ 1996.7.5	553 ㎡	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）・後半住居址、時期不明住居址27（6住～33住） 縄文後期前半（前葉）配石1 土坑多数	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（前葉）、中期前半（中葉）・後半、後期前半（初頭～中葉）土器 石器 黒曜石
5次	扇状地 （微高地）	農業基盤整備	市教委	2000.3.1～ 2000.7.24	600 ㎡	縄文後期前半（前葉～中葉）、時期不明住居址3（34住～36住） 土坑（墓坑）多数 埋設土器2 配石3 土器集中1 黒曜石集中1 焼土址1	縄文後期前半（前葉～中葉）土器 石器 黒曜石
6次	扇状地・湿地	県道	県埋文	2004.4.20～ 2004.12.22 2005.8.22～ 2005.12.2	3,300 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址37（37住～73住） 掘立柱建物跡2 方形柱穴列8 土坑43 屋外炉20 黒曜石集積1 配石1	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石（石鏃製作工程に関する資料）
7次	扇状地	個人住宅倉庫	市教委	2005.4.6 2005.5.23～ 2005.5.24	189 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址4（74住～77住） 土坑4	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 黒曜石
8次	扇状地 （微高地～谷）	水道	市教委	2006.6.5～ 2006.8.24	470 ㎡	土坑46	縄文早期後半（末葉）、前期前半、前期後半（末葉）、中期前半（中葉）・後半、後期前半（初頭～中葉）土器 石器 黒曜石
9次	台地・扇状地	下水道	市教委	2006.9.26～ 2006.11.30	140 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）住居址7（78住～84住） 土坑6	縄文前期前半（初頭～前葉）土器 石器 黒曜石
10次	台地	個人住宅	市教委	2010.3.12～ 2010.4.13	87 ㎡	縄文前期前半（初頭～前葉）、中期前半(中葉)～中期後半、時期不明住居址8（85住～92住） 土坑多数	縄文早期後半（末葉）、前期前半（初頭～前葉）、中期前半（中葉）・後半土器 土偶 石器 黒曜石
11次	扇状地	個人住宅	市教委	2011.6.8	41 ㎡	なし	なし
12次	台地	確認調査	市教委	2011.11.18～ 2012.1.4	136 ㎡	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、縄文住居址5（93住～95住、97・98住）、平安住居址1(96住)、土坑多数	縄文早期後半（末葉）～前期前半（初頭）、前期前半（初頭～前葉）、中期後半、後期前半（前葉～中葉）土器 石器 黒曜石
13次	台地～扇状地	確認調査	市教委	2012.7.2～ 2012.12.14	347 ㎡	縄文中期前半（中葉）、後期前半（前葉）住居址4（99住～102住） 土坑6	縄文中期前半（中葉）、後期前半（前葉）土器 土偶？ 石器 黒曜石

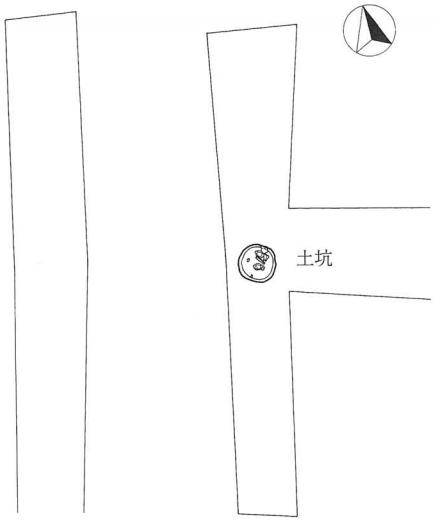
6,151 ㎡

第４表　駒形遺跡検出の竪穴住居址

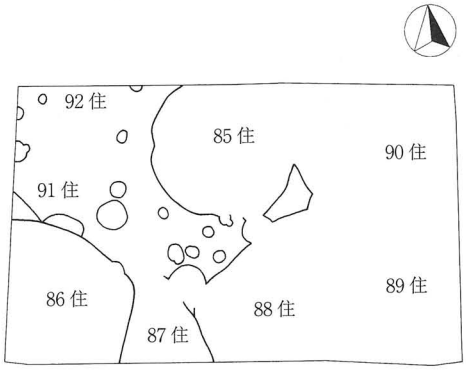
次	調査年	住居番号	時代・時期	次	調査年	住居番号	時代・時期
1次	S36	1	前期・初頭			52	前期・初頭～前葉
		2	中期・曽利Ⅲ期			53	前期・前葉
2次	S41	3	中期・曽利Ⅲ・Ⅳ期			54	前期・前葉
		4	中期・曽利Ⅲ・Ⅳ期			55	前期・前葉
		5	不明			56	前期・初頭～前葉
4次	H6・8	6	中期・曽利Ⅱ期			57	前期・前葉
		7	中期・曽利Ⅱ期			58	前期・前葉
		8	中期・曽利Ⅱ期		H17	59	前期・初頭～前葉
		9	前期・中越期			60	前期・初頭～前葉
		10	中期・曽利Ⅱ期			61	前期・初頭～前葉
		11	前期・中越期または後期・堀之内期			62	前期・初頭
		12	不明			63	前期・初頭～前葉
		13	不明			64	前期・初頭以前
		14	中期・曽利Ⅱ期			65	前期・初頭～前葉
		15	早期・末葉～前期・初頭			66	前期・前葉
		16	中期・曽利Ⅱ期			67	前期・前葉
		17	不明			68	前期・前葉
		18	不明			69	前期・初頭～前葉
		19	中期・曽利Ⅱ～Ⅴ期			70	前期・初頭～前葉
		20	中期・曽利Ⅱ～Ⅴ期			71	前期・初頭～前葉
		21	不明			72	前期・初頭～前葉
		22	早期・末葉～前期・初頭			73	前期・初頭～前葉
		23	早期・末葉～前期・初頭	7次	H17	74	前期・初頭～前葉
		24	早期・末葉～前期・初頭			75	前期・初頭～前葉
		25				76	前期・初頭～前葉
		26	中期・藤内期			77	前期・初頭～前葉
		27	中期・藤内期	9次	H18	78	前期・初頭～前葉
		28	中期・藤内期			79	前期・初頭～前葉
		29	中期・藤内期			80	前期・初頭～前葉
		30	中期・曽利Ⅱ～Ⅴ期			81	前期・初頭～前葉
		31	中期・曽利Ⅱ～Ⅴ期			82	前期・初頭～前葉
		32	前期・初頭			83	前期・初頭～前葉
		33	前期・初頭			84	前期・初頭～前葉
5次	H12	34	後期・堀之内Ⅱ期	10次	H22	85	前期・初頭～前葉
		35	後期・堀之内Ⅱ期～加曽利B1期			86	中期・井戸尻期
		36	不明			87	前期・初頭～前葉
6次	H16	37	前期・前葉			88	中期・曽利Ⅰ期
		38	前期・前葉			89	中期・曽利Ⅱ期
		39	前期・初頭			90	前期・前葉
		40	前期・前葉以前			91	不明
		41	前期・前葉			92	不明
		42	前期・初頭～前葉	12次	H23	93	不明
		43	前期・初頭～前葉			94	前期・前葉
		44	前期・初頭～前葉			95	前期・初頭～前葉
		45	前期・前葉			96	平安
		46	前期・前葉			97	早期・末葉～前期・初頭
		47	前期・前葉			98	不明
		48	前期・前葉	13次	H24	99	中期・新道期
		49	前期・初頭～前葉			100	中期・藤内期
		50	前期・前葉			101	中期・藤内期
		51	前期・初頭～前葉			102	後期・堀之内期



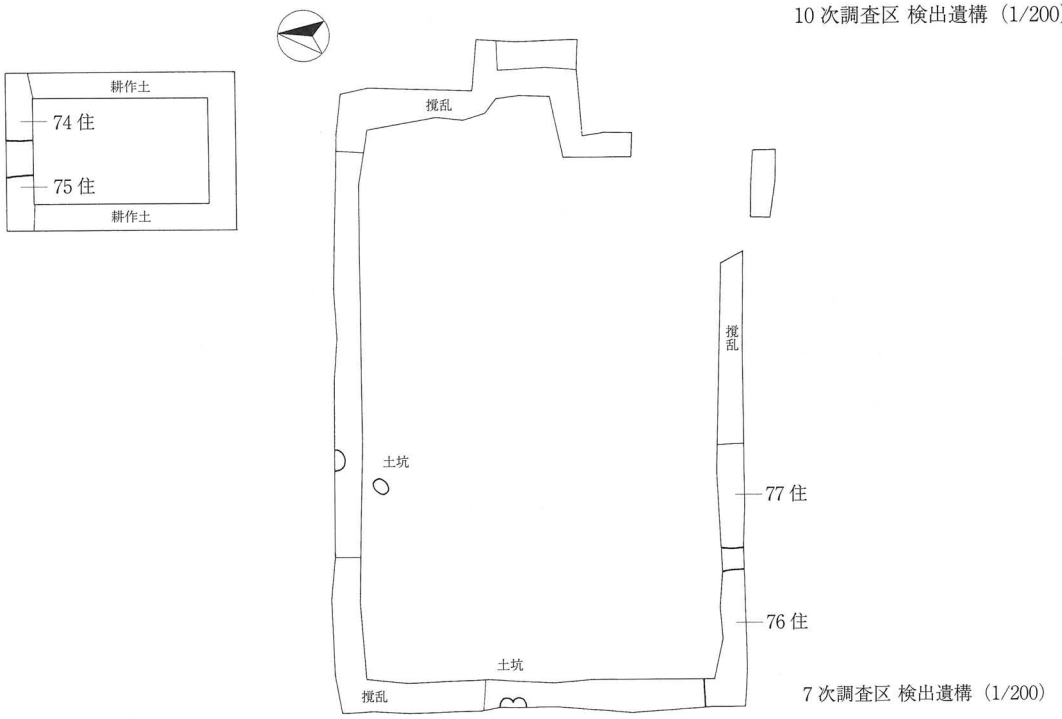
3次調査区（1/600）



3次調査区 検出遺構（1/200）

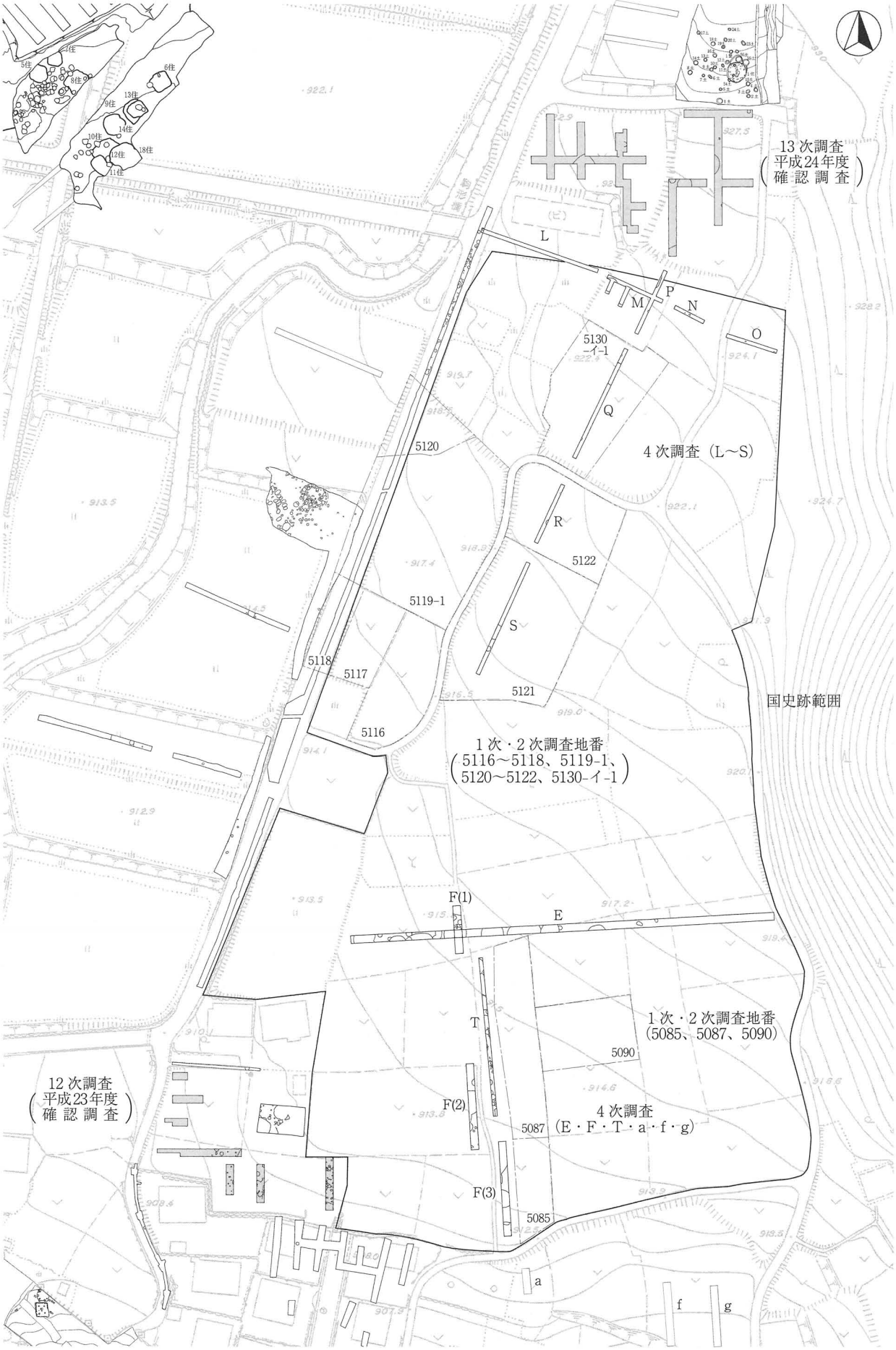


10次調査区 検出遺構（1/200）

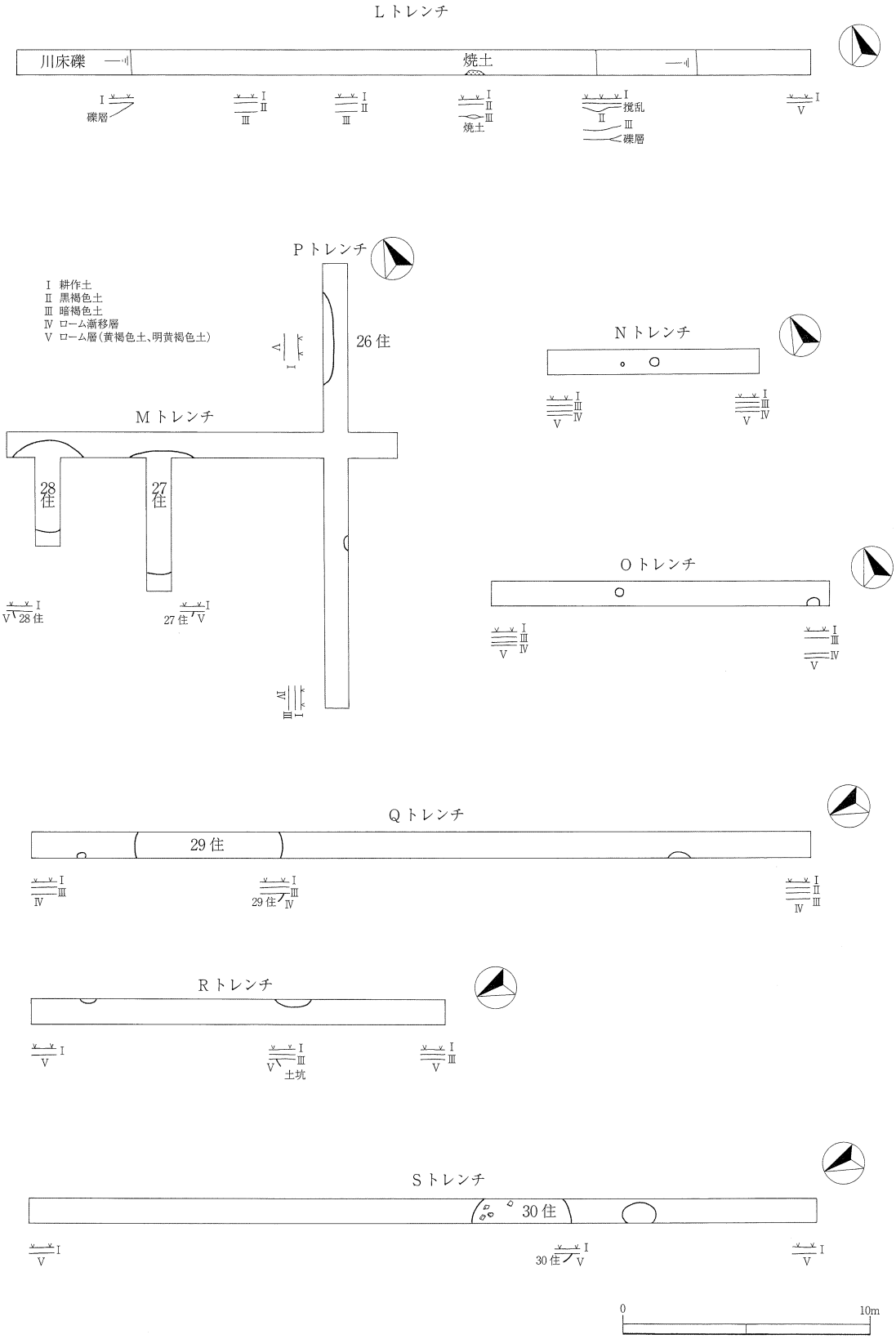


7次調査区 検出遺構（1/200）

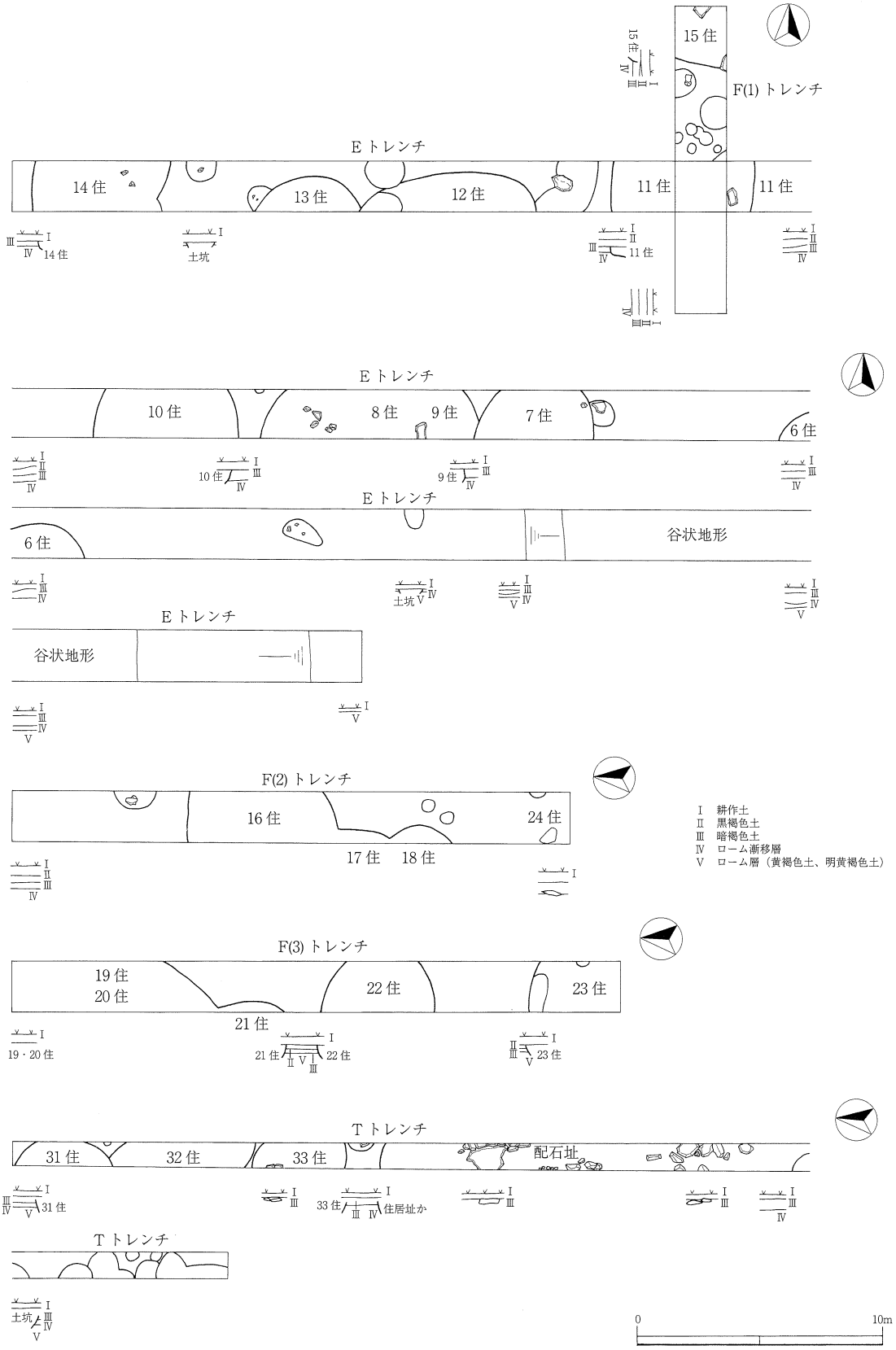
第7図　3次・7次・10次調査 平面図（1/200・1/600）



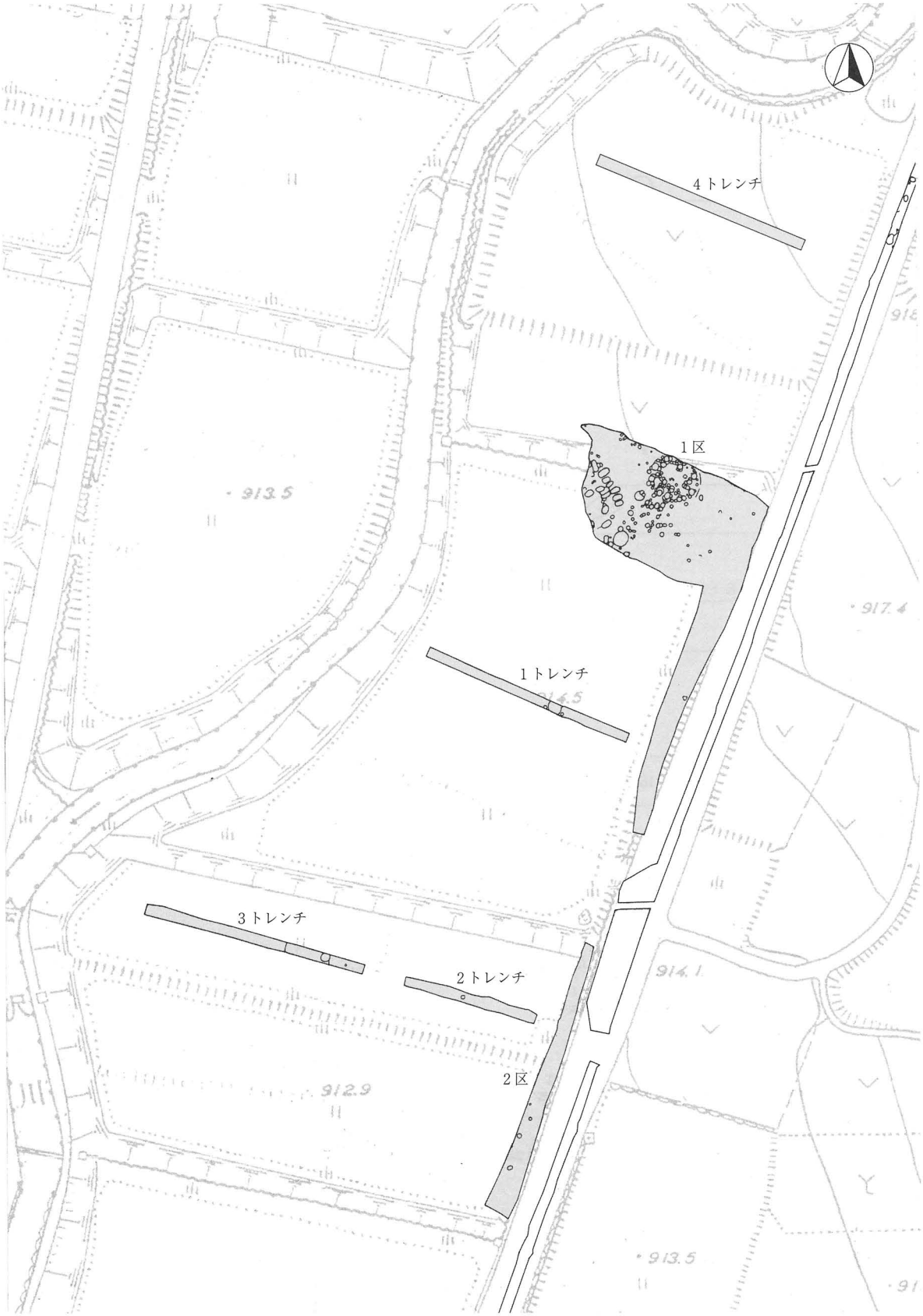
第8図　駒形遺跡調査位置図（1/1,500）



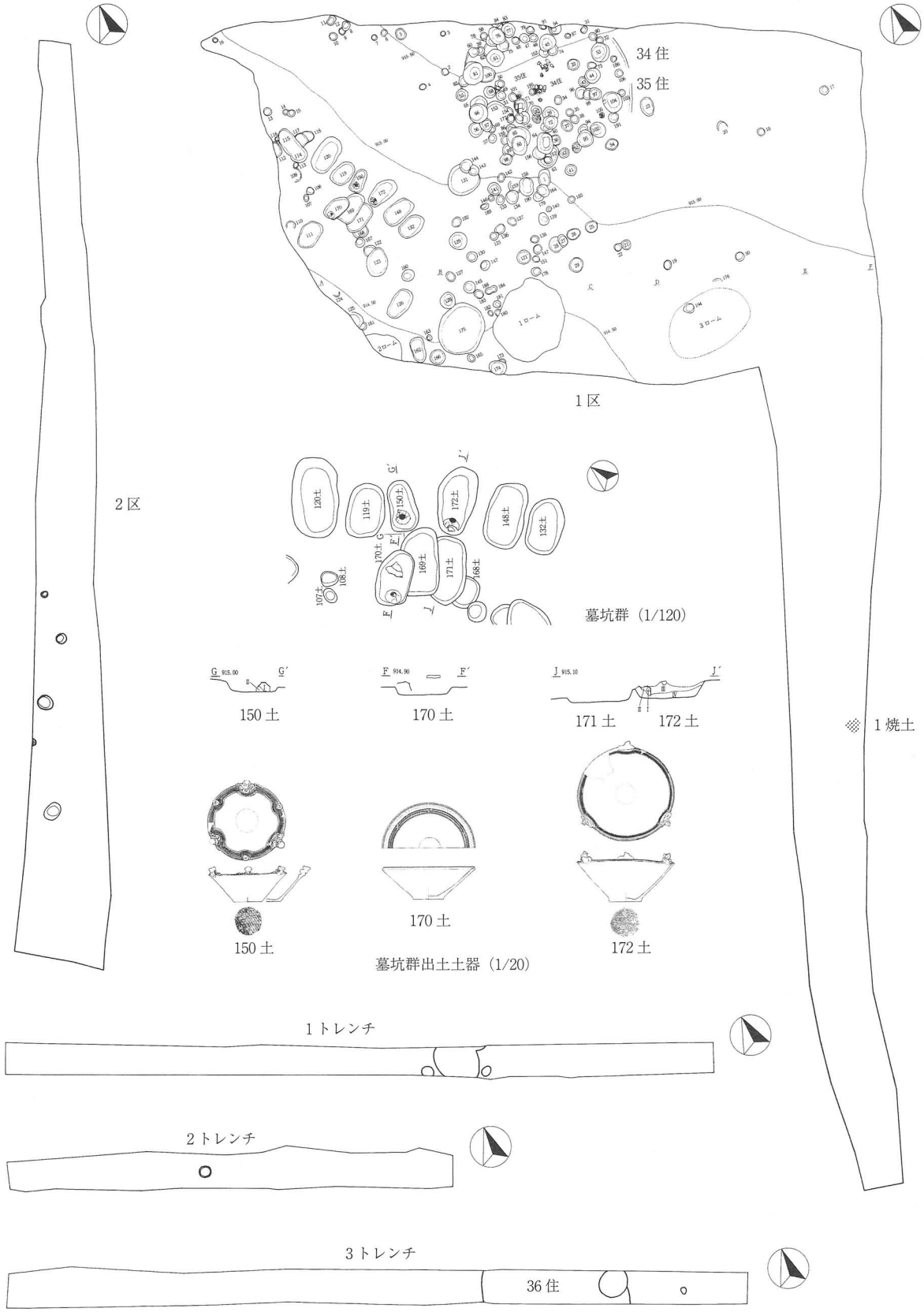
第9図　4次調査 平面図・断面図①（1/250）



第10図　4次調査 平面図・断面図②(1/250)

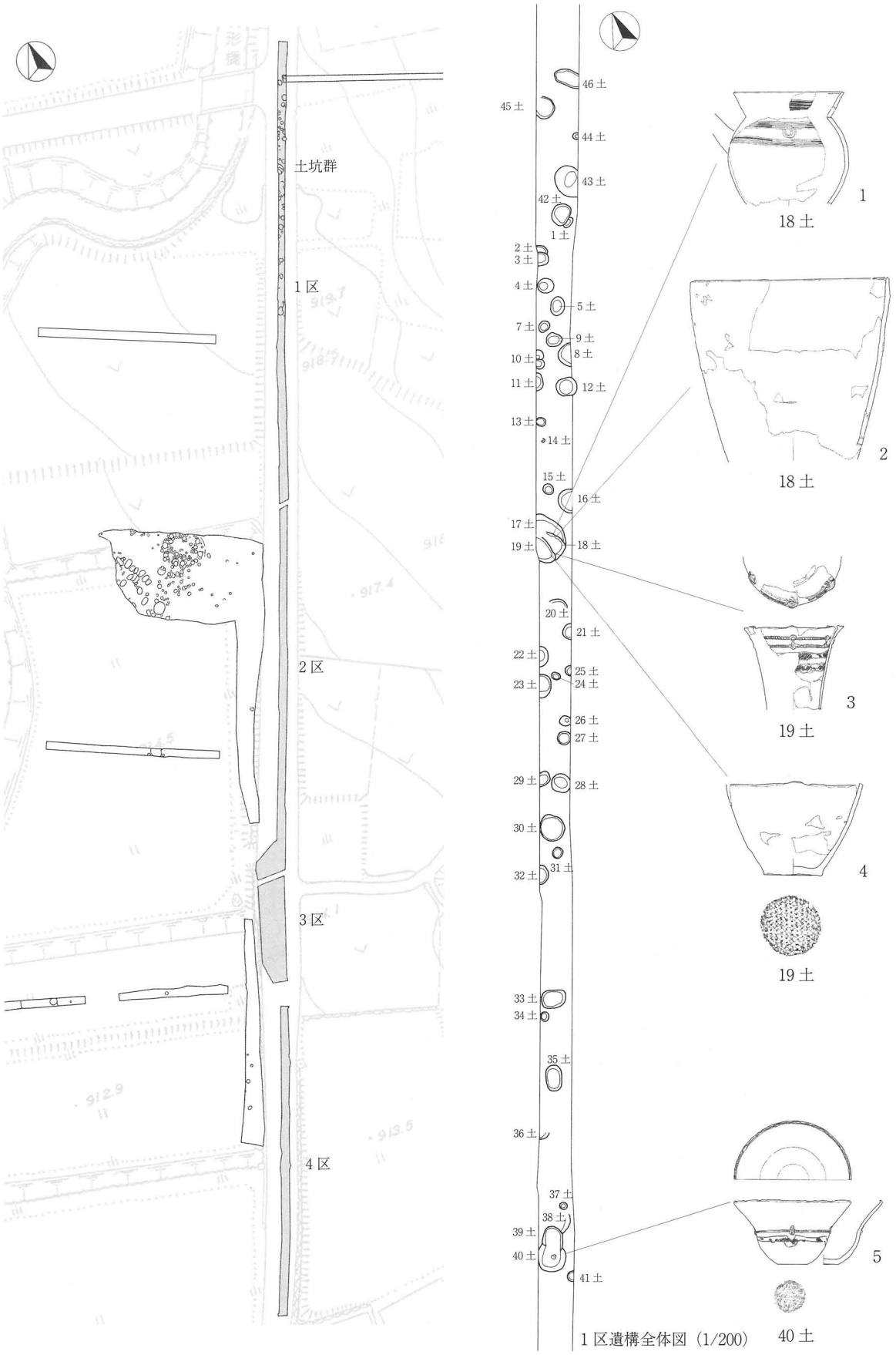


第11図　5次調査 位置図（1/800）



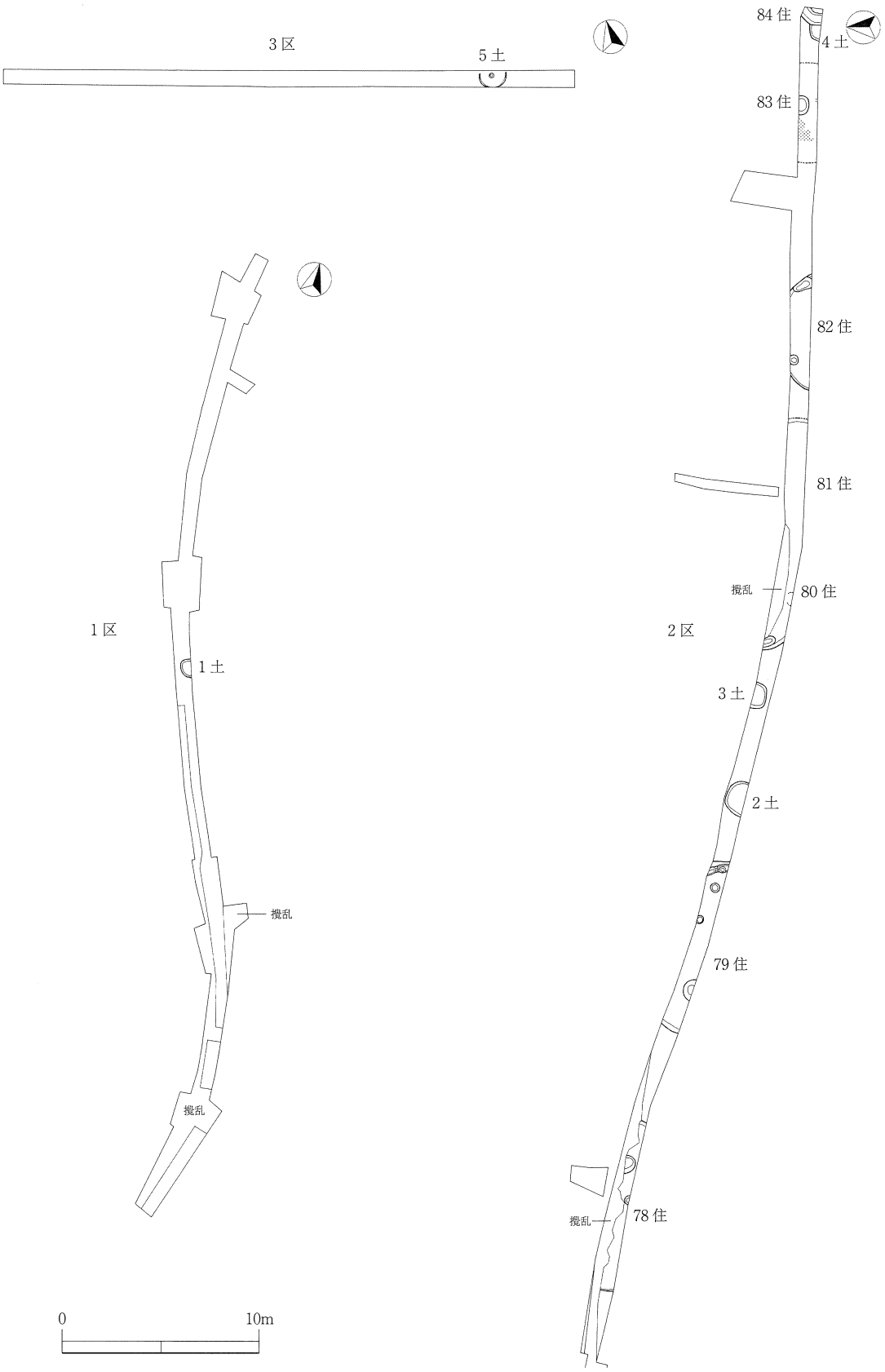
第 12 図　5 次調査 平面図（1/250）、墓坑群（1/120）、出土土器（1/20）

第13図　6次調査 位置図（1/1,200）、平面図（1/600）

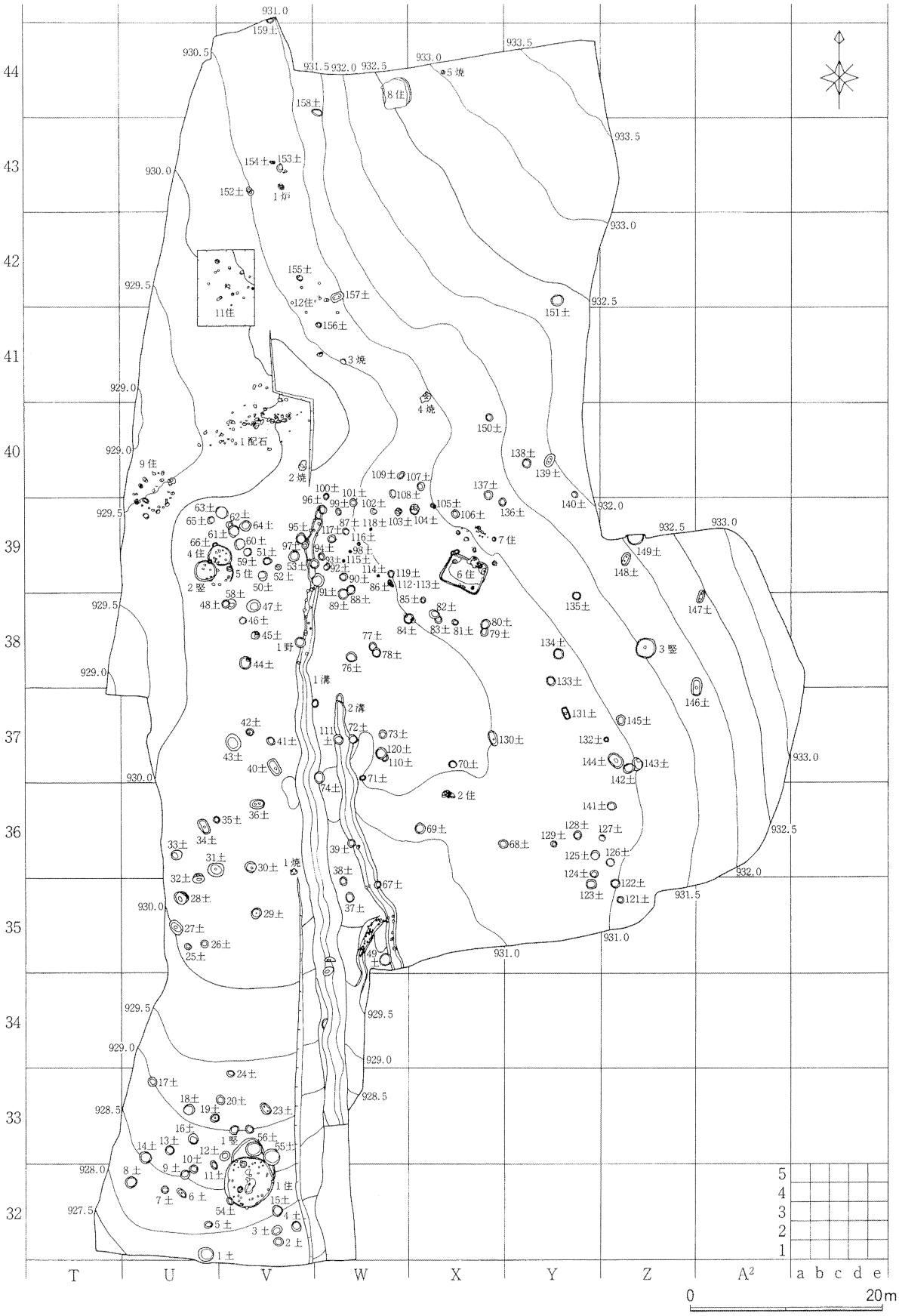


第14図　8次調査 位置図（1/1,000）、平面図（1/200）、出土土器（1/10）

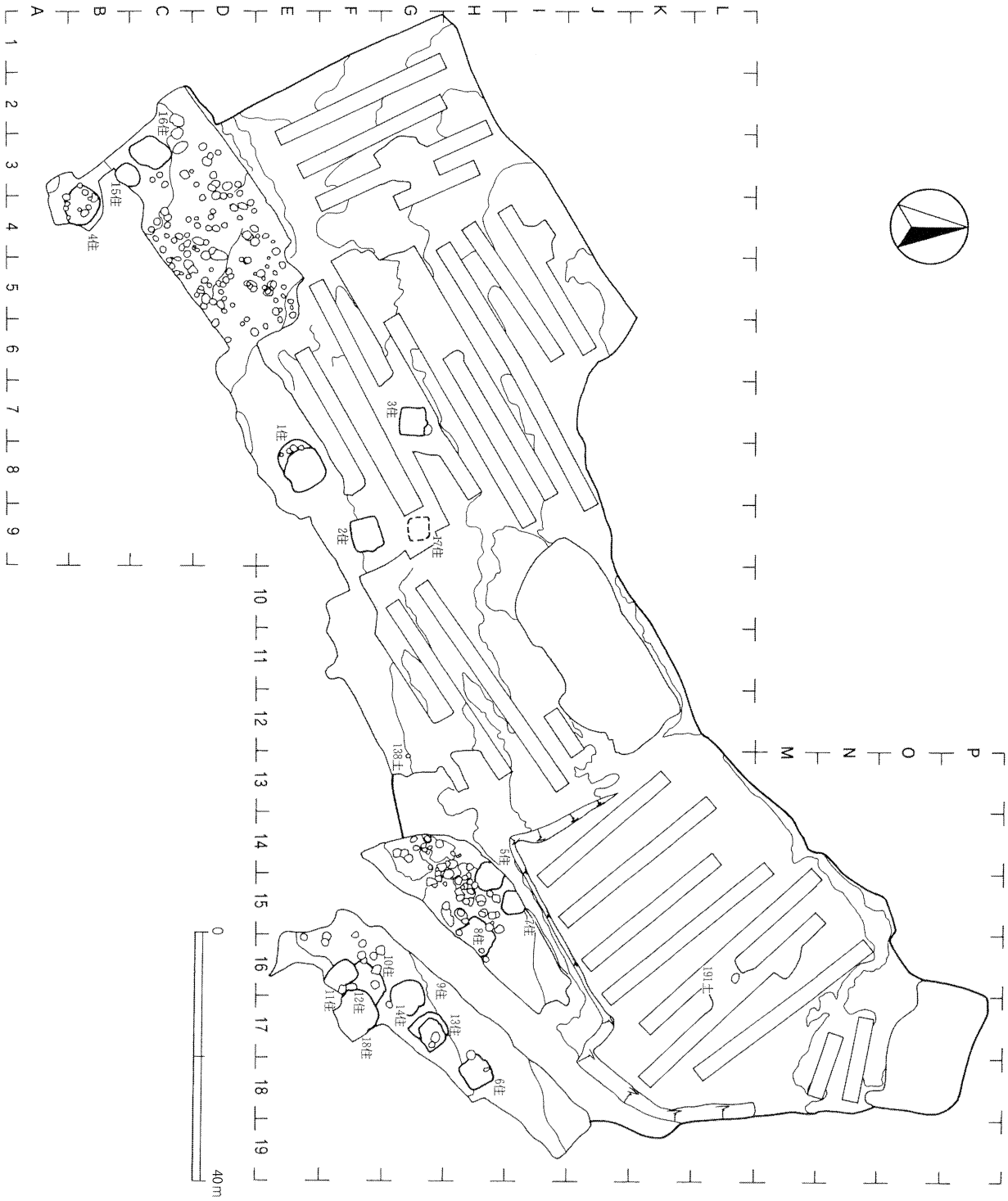
第15図　9次調査 位置図（1/800）



第 16 図　9 次調査 平面図



第17図　大六殿遺跡全体図（1/600）



第18図　大田苅遺跡全体図（1/1,000）

第4章　調査の目的と方法

第1節　調査の目的

第1章第1節で記した経緯のとおり、この度の確認調査は国史跡に指定されている台地に営まれた縄文集落の範囲の確認を目的としている。ここでいう「縄文集落」とは、竪穴住居や土坑などの集落遺跡を構成する主要な遺構を指すため、これらの遺構の有無の確認が実際的な調査の目的となる。あわせて遺構の遺存状態を確認するとともに、縄文時代の地形（旧地形）の把握に努めることとした。

第2節　調査の方法

トレンチ法の採用

今回の調査は、遺跡の保存を前提に縄文集落の範囲を確認し、縄文時代の地形の把握を目指すものである。そのため地下の様子を広範囲かつ連続的に見ることのできるトレンチ法（試掘溝）を採用した。遺跡の保護を前提とする以上、試掘溝の幅は狭いことが理想である。しかし狭小な試掘溝の中で遺構か否かを見極めることは容易でなく、掘削作業および記録作業を効率よく進める上でも、最低2mの幅が必要と考えられた。そこで試掘坑の幅を2mとし、必要に応じて拡幅することとした。

掘削作業と遺構確認面の設定

駒形遺跡は史跡に指定されるまで畑と水田に利用されてきたが、微地形が観察できる状態にあることから、大がかりな土の移動（造成）が行われていないと考えられた。そのため耕作土層に含まれる遺物であっても、ある程度、地下の様子を反映している可能性がある。そこで掘削作業は耕作土層から手掘りで行うこととした。しかし、耕作土層下に最大80㎝の厚さの盛土（埋土？）があり、限られた期間と費用の中で手掘りによる掘削が不可能であった13次調査の後半に調査対象とした畑（5172番地）については、0.11㎥級のバックホーで耕作土層とこの盛土を除去することにした。

前述したように、遺跡の保存が前提の調査であるため、原則として遺構は確認に留め必要以上の掘り下げは行わないこととした。遺構であるのか確信の持てないものについては、状態に応じた必要最小限のサブトレンチを設けて慎重に掘り下げを行った。なお土層の保存状態のよい地点には、耕作土層の直下に遺物包含層が認められた。遺構の確認が調査の目的であるため、遺物包含層の下まで掘り下げて遺構を確認することとしたが、13次調査後半の試掘溝には遺物包含層全体を掘り抜いていないものがある。

調査を行った地点の土層は、例えば13次調査の前半に調査対象とした一枚の畑（5137番地）であっても、地形の高い北側と低い南側で土層の遺存状態がまるで異なっているように、決して一様ではない。そこで遺構確認面は地点毎の土層の遺存状態に応じて、できる限り高い面に設けることとした。12次調査を行った地点は、台地の平坦面が広範囲にわたり耕作による攪乱を受けて、すでに明黄褐色土層まで乱された状態であった。そのため、おのずと明黄褐色土層面が遺構確認面となった。一方、13次調査を行った地点は、12次調査区と対照的に土層の遺存状態がよく、遺構の多くを黒褐色土層面で確認することができている。

遺構の名称

12次調査では、遺構の遺存状態が悪い上に、確認に留めるとする調査の制約も重なり、遺構の認定に苦慮する場面が多々あった。埋土・床・炉などが検出され、竪穴住居址（94・95号住居址）と確実視できるものがある一方で、僅かに周溝や柱穴と思われる埋土が残るだけの竪穴住居址であるのか判断に迷うものがあっ

た（93・98号住居址）。そのため現地において「住居址」・「土坑」などの遺構名を付すことを控えた。調査概要の報告では、床または床の可能性のある面を除いたすべての人為的な痕跡、すなわち「竪穴住居址・土坑・炉・カマド・周溝」とみられる遺構を、試掘溝ごとに「遺構1・2・3～」の名称で掲載することにした（市教委2012）。

13次調査も12次調査にならって、検出された遺構を「遺構～」と呼称した。ただし試掘溝を交差または連結するように設定したため、遺構の中には異なる試掘溝に跨って検出されるものがあった。こうしたことから試掘溝ごとに番号を付すことができず、試掘溝に関係なく連番で付すこととした。

本報告書でも「遺構～」の名称で掲載することとした。なお1次から6次までの調査において、竪穴住居址に1号から73号までの遺構番号が連番で用いられている。そこで7次調査以降に検出された竪穴住居址を整理して、調査年次順に74号から連番を付すことにした。12次調査で93号から98号、13次調査で99号から102号までの番号を付した竪穴住居址については、この遺構番号と「遺構～」を併記して掲載することとした。

以下に、試掘溝ごとの竪穴住居址と「遺構～」の対応関係を記しておく。

12次調査

4号試掘溝 ― 遺構1(柱穴)・遺構2(柱穴)・遺構3(周溝)・遺構4(周溝) ― 93号住居址

6号試掘溝 ― 遺構6(住居址掘方)・遺構7(周溝) ― 94号住居址

― 遺構8(住居址掘方)・遺構9(地床炉) ・遺構10（周溝）・遺構11（柱穴）・遺構12（柱穴）― 95号住居址

― 遺構13(カマド掘方)・遺構14(カマド火床)・遺構15(土坑) ― 96号住居址（平安時代）

7号試掘溝 ― 遺構12(地床炉) ― 97号住居址

― 遺構48(周溝)・遺構49(周溝)・遺構50(柱穴)・遺構51(柱穴) ― 98号住居址

13次調査

2号試掘溝 ― 遺構1(住居址掘方) ― 99号住居址

3号試掘溝 ― 遺構2(住居址掘方) ― 100号住居址

4号試掘溝 ― 遺構3(住居址掘方) ― 101号住居址

5・7号試掘溝 ― 遺構8(住居址掘方) ― 102号住居址

遺物の取り上げ・記録

耕作土層に含まれる遺物は2m四方のグリッド単位で一括して取り上げた。それ以外の遺物は原則として取り上げないこととしたが、遺物包含層より下の層を確認する際に支障となるもの、遺物包含層および遺構に伴う遺物で埋め戻し作業時に動くおそれのあるものなどについては、位置と高さを記録した後、番号を付して取り上げている。また12次調査区の台地から扇状地扇央部にいたる西側斜面（1号～3号試掘溝、4号試掘溝西側）の調査では、遺物包含層に土器や黒曜石が多く含まれており、全点を記録しながらの掘り下げが困難であった。そこで土層断面と対比しながら層ごとに取り上げる方法を採用した。

写真による記録

試掘溝の表土層除去後の全景と調査終了時の全景、ならびに試掘溝と遺構の土層断面、遺構の検出状態、遺物の出土状態などを基本に、写真による記録を行った。撮影には35㎜のカラー・白黒・リバーサルフィルムを使用し、補助用にデジタルカメラを用いた。

埋土および土層の記録

遺構埋土および土層の記録には、財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』を用いた。硬さについ

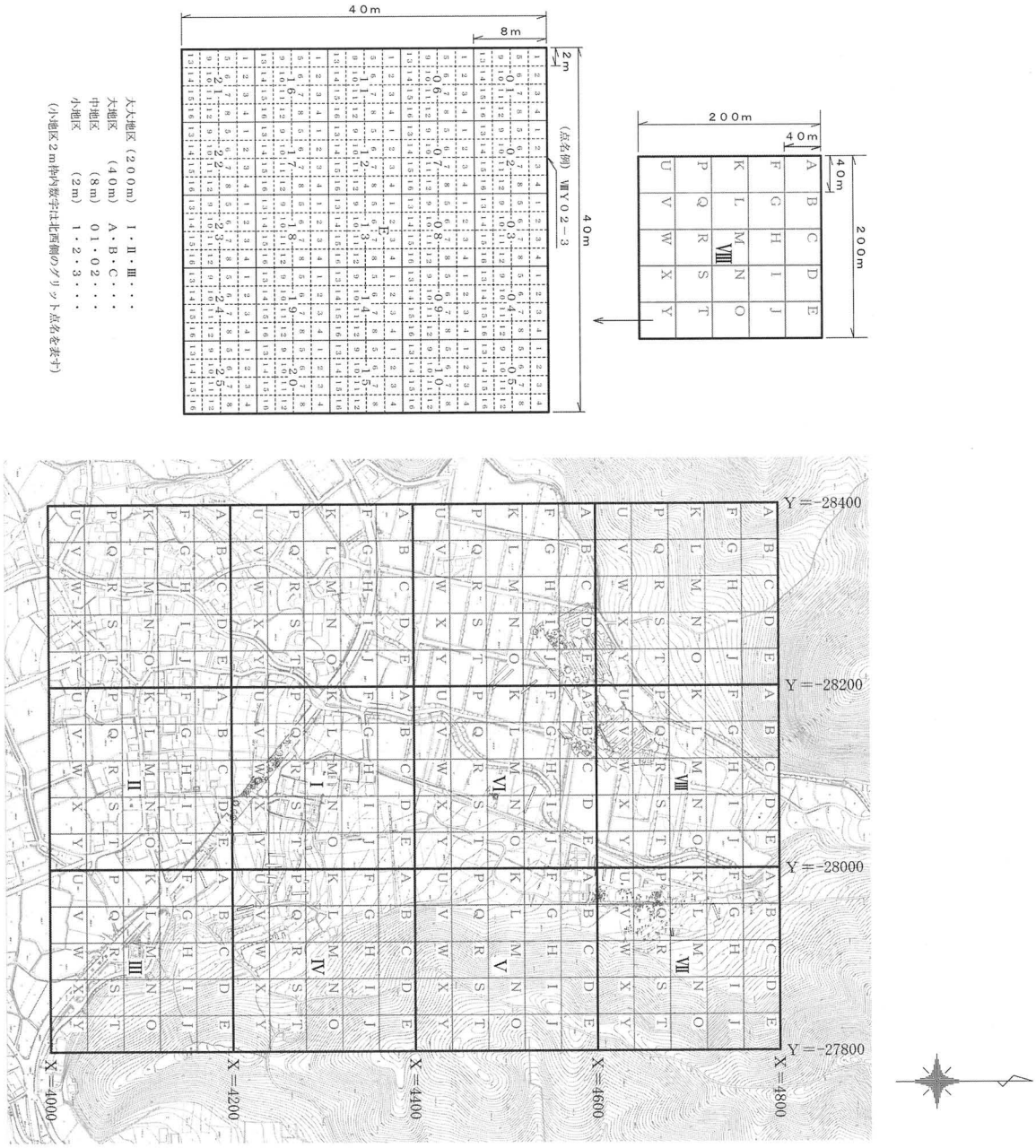
ては感覚的な所見を記録したに過ぎない。

基準点の設置

これまでの駒形遺跡の調査では、国土地理院の平面直角座標系を基準としながらも、調査が行われる位置・範囲に応じたさまざまな調査区（グリッドの単位や名称）が設定されている。確認調査を行うにあたり、遺跡全体を覆う調査区の設定が必要と考えていたが、ちょうど12次調査区にかかるように、平面直角座標系の原点第Ⅷ系を基点とする長野県埋蔵文化財センターの調査区（6次調査）が設定されていた。そのため、この調査区を北へ拡張し、グリッドの名称・呼称もこれに倣うこととした（第19図）。

埋め戻し方法

山砂での埋め戻しが望ましいが、民有地であるため、掘り上げた土を人力および重機で埋め戻している。



第19図　調査区（グリッド）の設定

第5章　調査の成果

第1節　平成23年度確認調査

調査の概要

史跡範囲の西側および南側に隣接する3筆の民有地（5063・5072・5073番地）約1,000㎡に、幅2m、長さ4mから22mの試掘溝を7箇所（1号～7号）設定した。小地形でいえば、1号試掘溝から3号試掘溝と4号試掘溝（西側）が台地の西側斜面、4号試掘溝（東側）と5号試掘溝から7号試掘溝が台地平坦面となるが、後者は縁辺に近い場所に位置している。

台地の平坦面

これまでに1次・2次・4次・10次調査が行われ、台地の幅が最大となる平坦面の南側から、前期前半と中期後半の竪穴住居址が多数検出されている。12次調査区はその地点の西側に接する場所であり、該期の竪穴住居址の埋蔵が確実視されていた。

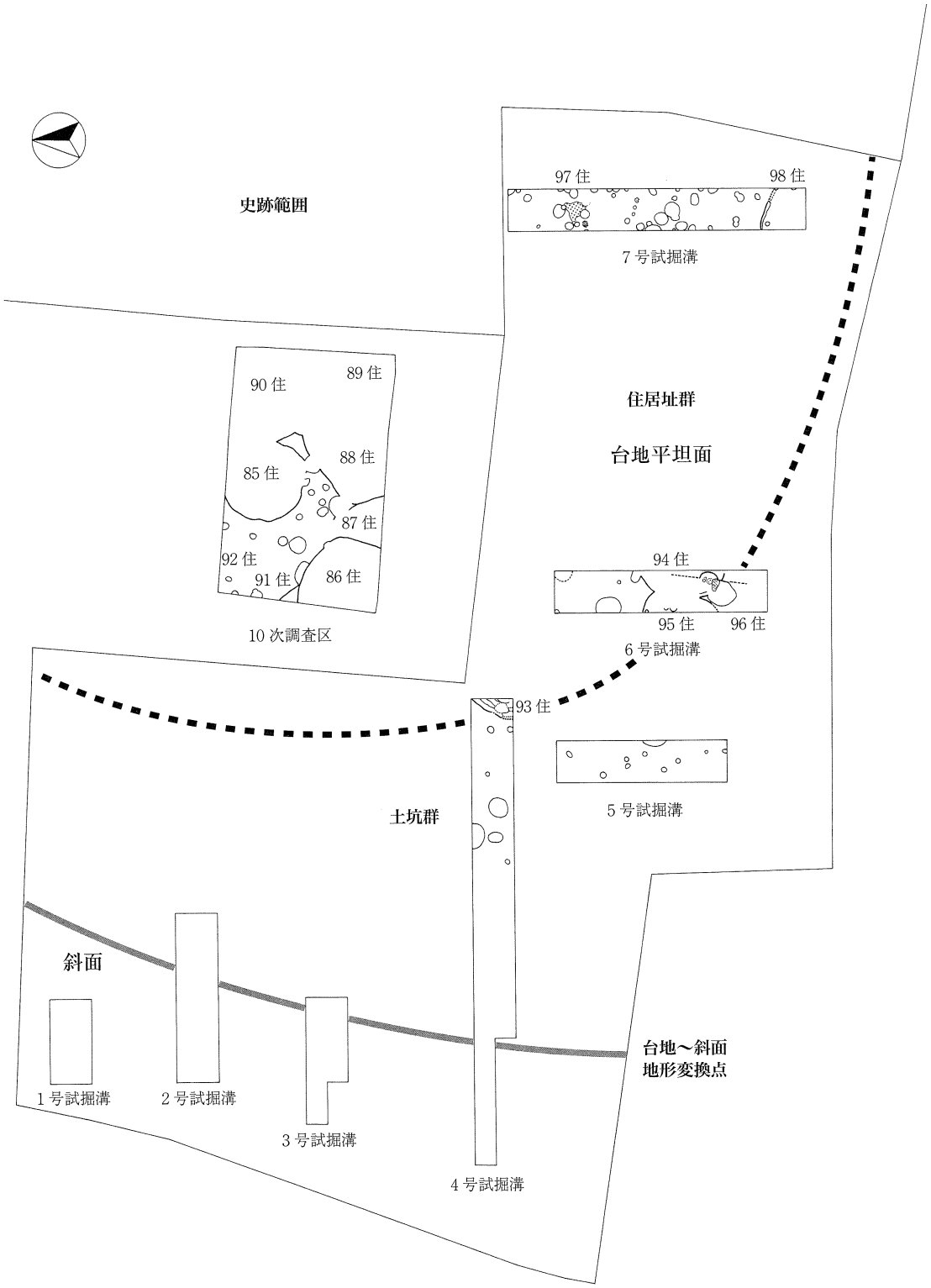
調査の対象となる台地の平坦面は、耕作時の攪乱によって地山が著しく乱されおり、耕作土層を除去すると明黄褐色土層または漸移層が露出する場合がほとんどである。このような状態にも関わらず、設定した4箇所の試掘溝のうち、3箇所から縄文時代の竪穴住居址があわせて5軒確認された。内訳は4号試掘溝から1軒（93号住居址）、6号試掘溝と7号試掘溝から各2軒（94・95・97・98号住居址）である。竪穴住居自体の掘り込み（埋土）がしっかり残り、平面プランの確認できたものは6号試掘溝の2軒（94・95号住居址）のみである。他の竪穴住居址は周溝と柱穴、あるいは埋土の広がりや炉と床とみられる硬化面の位置関係から判断している。遺構の遺存状態がよくない上に、遺構確認に留めるとする調査の制約から、竪穴住居址の時期を特定することは難しい。それでも94号・95号・97号の3軒については、確認面から出土した土器片の時期から早期後半（末葉）から前期前半（前葉）までの時期に位置づけることが可能と思われる（第4表）。

地面を掘り窪めた穴（竪穴住居自体の掘方を除く）で、平面形が円形・楕円形を呈するいわゆる「穴」を土坑とした。断面のみに残るものを含め77箇所が確認された（1箇所は平安時代）。直径が30㎝から70㎝程度のものと、100㎝前後のものに大別されるが、前者でも小さな土に柱痕とみられる変色箇所が認められた。こうした柱穴と考えられる土坑は、竪穴住居址の柱穴を含む可能性がある。なお前期前半（前葉）に特徴的な遺構とされる方形柱穴列について、土坑どうしの位置関係に注意を払い調査を進めたが、積極的に当該遺構を構成するといえる土坑は確認されなかった。一方、大きなものは（4号試掘溝：遺構8・9、5号試掘溝：遺構6、6号試掘溝：遺構3）柱痕が確認されないことから、例えば貯蔵穴や墓坑といった性格が推測される。

以上に記した竪穴住居址および土坑は、縄文時代の集落遺跡を構成する主要な遺構である。そのため、それぞれの試掘溝の遺構どうしを結んだ線付近を、調査の目的とした、台地上に営まれた縄文集落の西側限界と考えてよいであろう。

台地の西側斜面

桧沢川の谷へ向かう台地の西側斜面には、耕作土層の下に遺物を含む黒色土層が厚く堆積していた。斜面に設けられることの多い遺物の廃棄場をはじめ、その他の遺構の存在をも念頭において、まずは平面による調査を進めた。しかし遺構と考えられる痕跡は確認されなかった。そこで、この層の堆積時期や形成要因などを明らかにするため、土層観察に必要な最小限の幅のサブトレンチを断面下に設定し、地山まで掘り下げることとした。



第 20 図　平成 23 年度確認調査（12 次調査）試掘溝 配置図・遺構全体図（1/300）

耕作土層以下の土層は基本的に黒色土、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土の層序であり、黒色土層（地点によって黒褐色土層）が遺物包含層である。また暗褐色土層および黄褐色土層が地山で、後者に台地の原型をなす桧沢川起源の礫が含まれる。こうした土層の堆積状態は2号・3号試掘溝、4号試掘溝（西側）に共通して見ることができる。

1号試掘溝によると、遺物包含層は最も厚いところで90㎝を測る。その上位をなす30㎝前後の厚みをもつ黒色土層は、粒子が粉状に細かい点を特徴する。断面を鎌で削ると「サラサラ、サクサク」した感触が伝わってくる。黒みや赤みが強いもの、黒味が抜けた灰色を帯びたものなど土色が多様であり、この違いにより数層に分けることが可能であった（第21図第2層群）。そして、これらの層の最下位に砂利と大量の礫を含む層があり（第21図第2－5層）、この層を中心に縁辺の磨滅した早期前半（中葉：押型文）から後期前半（中葉）までの土器が出土した。このような土層の状態と包含される土器の時期から、第2層群は後期前半（中葉）以降に発生した桧沢川に由来する土石流によって形成された土層と思われる。この第2層群が6次調査の行われた地点に堆積する「Ⅱａ層」に相当する土層と考えられる（県埋文2007）。

第2層群の下にも遺物包含層が確認された（第21図第3～4層）。第2層群と対照的な粒子の粗い黒色土層で、50㎝から60㎝の厚さがある。粒子の粗い点で共通するが、第3層は全体が硬く締るのに対し、第4層は全体が「ボソボソ」した感じを受ける土層である。第5層は締まりのある箇所とない箇所が混在するといった特徴がある。含まれる礫の量にも多寡があり、層全体に30㎝大までの礫を満遍なく含む第4層と第5層に対し、第3層は礫を少量含むという状態であった。これらの土層から早期後半（後葉～末葉）にほぼ限定される土器片、特殊磨石（穀摺石）、黒曜石製石器などの遺物が一定量出土した。感覚的ではあるが、土器の遺存状態（第2層群ほどではないが磨滅あり）、土の色調・硬さ、礫の入り方などからみて、基本的に自然堆積した層であると思われる。そうであるならば、台地上方の平坦面または斜面から遺物・礫を巻き込みながら流れ込んだ土、あるいは第2層群のように桧沢川の土石流によって北から供給された土のどちらかとなろうが、これについては確たる考えを持ち合わせていない。

斜面の調査で注目されたのは、東上方の台地平坦面に前期前半ならびに中期後半の竪穴住居址が濃密に分布するにも関わらず、該期の土器を一定量含む遺物包含層が確認されなかった点である。この場所が遺物の廃棄場に利用されていないにしても、斜面であることを考えれば、ある程度の土器の流れ込みがあったとみるのが自然である。早期後半の遺物包含層の上に、前期前半から中期後半までの遺物包含層が形成されていたが、後期前半以降の土石流によって削平されてしまったと考えたらどうであろうか。

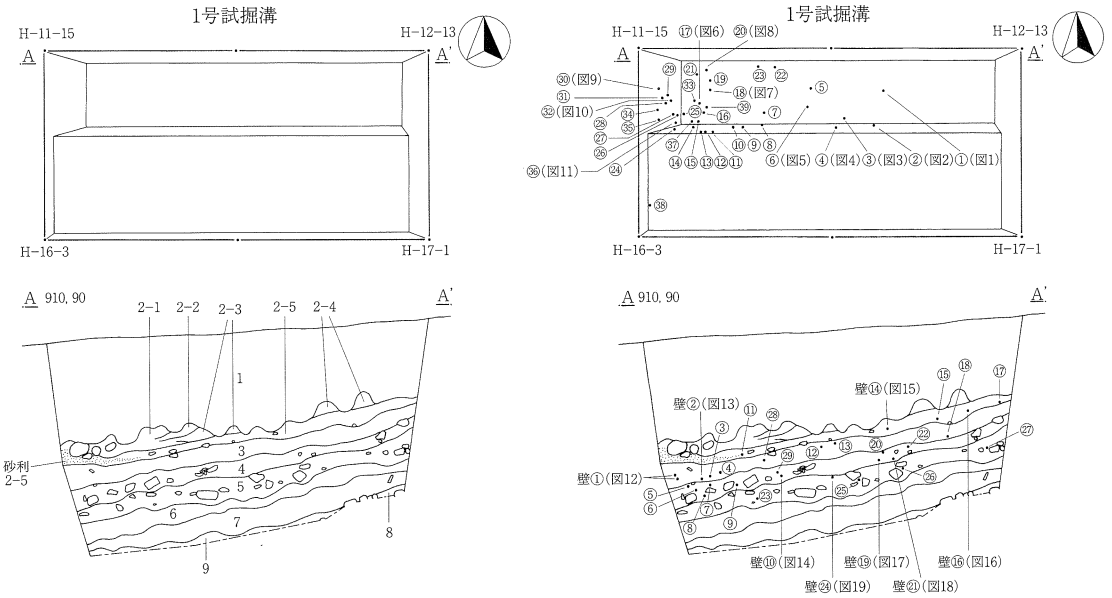
斜面に堆積した遺物包含層から一定量の出土をみた早期後半（後葉～末葉）の土器は、1号・2号試掘溝を中心に耕作土層からも出土している。また台地の平坦面で行われた1次・4次・10次調査、扇状地で行われた8次調査（12次調査区寄りの旧流路）でも、少量ではあるが確認することができている。大六殿遺跡で調査された早期前半（押型文）に続く早期後半の集落が、台地の上方に営まれていた可能性が指摘される。

調査された遺構と遺物

1号試掘溝（第21図）

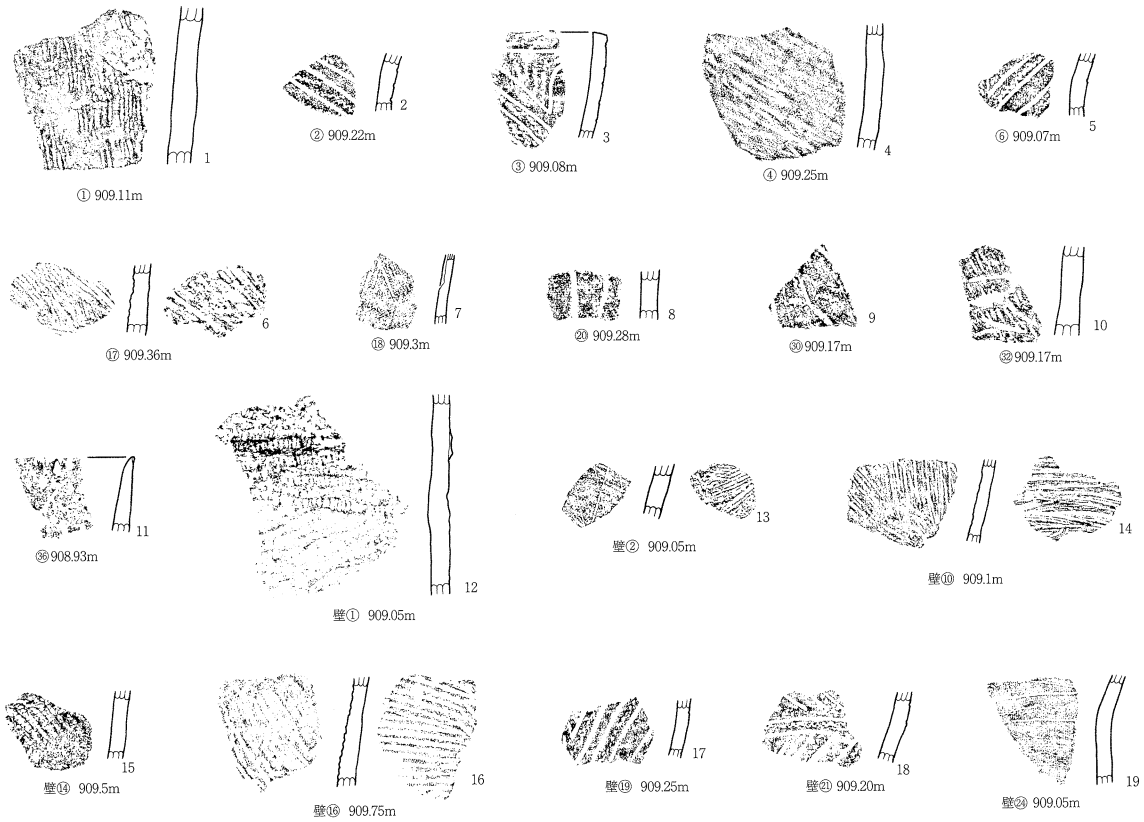
東西方向に設定した試掘溝で、幅2m、長さ4m、面積8㎡を発掘した。発掘深度は100㎝から140㎝であるが、北側断面下に設けたサブトレンチの深度は180㎝から230㎝である。

1号試掘溝のすぐ北に東西に通じる市道がある。その市道内に下水管が埋設される際に発掘調査が行われ（9次調査3区の西端）、厚く堆積した黒色土層が確認されている。こうした隣接地の土層堆積状態から、相当深く掘り下げねばならない調査となることが予想された。



A-A'

1　耕作土(畑)　一部盛土あり
2-1　黒色土7.5YR1.7/1　粒子細　遺物包含
　黒褐色粘質土塊(7.5YR3/1)50%、礫1～2mmを1%含む
2-2　黒色土10YR1.7/1（漆黒に近い）粒子細　遺物包含
2-3　黒色土5YR2/1　粒子細　　硬く締まる　遺物包含
2-4　黒色土10YR1.7/1　粒子細　遺物包含
2-5　黒色土10YR2/1　粒子細　砂利・礫を含む　土石流による堆積か　遺物包含
　明黄褐色土塊1～2mmを5%(砂利内)、礫1mm～30cmを大量に含む
3　黒色土7.5YR2/1　硬く締まる　遺物包含層
　礫1mm～5cmを含む
4　黒色土10YR1.7/1　部分的に締りなし　遺物包含
　礫1mm～10cmを含む
5　黒色土7.5YR1.7/1　部分的に締りなし　遺物包含
　黒褐色粘質土塊(10YR2/2～2/3)50%、炭化物1～2mmを1%、礫1mm～20cmを含む
6　黒褐色土10YR2/2
　黒褐色粘質土塊(10YR2/3)50%、礫1mm～1cmを含む
7　黒褐色土10YR2/2～2/3
　黄褐色土塊1～5mmを10%(下位に多い)、礫2mm～1cmを含む
8　黒褐色土10YR2/2～3/2　地山　土石流による堆積か
　礫1mm～20cmを大量に含む
9　暗褐色砂質土10YR3/3～黄褐色砂質土10YR5/6　地山



第21図　1号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

調査を進めたところ、耕作土層が予想以上の厚みをもち、さらにその土層の下に遺物を包含する黒色土層がかなりの厚さで堆積するものと思われた。そのため設定した長さ6mの試掘溝を4mに縮小した。

試掘溝の西側を第2－5層と第3層の層界付近、東側を第3層から第4層付近まで掘り下げた後、北側断面下に幅90cmのサブトレンチを設け、遺構の有無を確認するとともに、土器と礫を残しながら掘り下げる調査に切り替えた。第8層および第9層の地山まで掘り下げており、その深度は180cmから230cmを測る。

黒色土層および黒褐色土層内に掘り込まれた遺構を見落とした可能性を否定できないが、人為的な掘り込みは確認できなかった。少なくとも、地山に達する遺構は存在しない。焼土址、黒曜石の集積・集中などの遺構も確認されなかった。また第4層から第5層に含まれる礫の状態を観察したが、配石や列石といった人為的に据え置かれたと思われる礫のまとまりを見出すことはできなかった。

遺　物

土器、石器、黒曜石、石材が出土した。

土器は5cm大を中心に大きなものでも10cm程度である。そのため図上を含め器形が復元できるものはない。以下、第2層群以下から出土した土器について記述する。第2層群では早期後半（後葉：沈線文、末葉：条痕文、絡条体圧痕文）、前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系、前葉：中越式）、中期後半（曽利式）、後期前半（初頭？、前葉：堀之内式）などが出土した。その中の3点（8・9・15）を図示した。第3層から第5層では早期後半（後葉：沈線文、末葉：条痕文、絡条体圧痕文）の土器が出土した。この中の16点（1～7、10・11・12～14、16～19）を図示した。

石器は耕作土層を含め、堆積岩製の石鏃未製品1点、堆積岩製の石錐2点、堆積岩製の両極石器3点、火成岩製？の乳房状磨製石斧1点、堆積岩製または変成岩製の打製石斧2点、火成岩製の凹石類（磨面・敲打痕ありを含む）11点、火成岩製の特殊磨石5点、火成岩製および堆積岩製の不定形石器（剥離によって刃部の作り出されたもの、使用の際に生じたとみられる痕跡のあるもので、摘みをもたないもの）6点、火成岩製の石皿1点が出土した。なお現地において、出土した礫の大半を洗浄し、石器であるか否かを確認した。その結果、685点のうち31点（約4％）が石器であった（堆積岩製の石鏃未製品、石錐、両極石器を除く）。

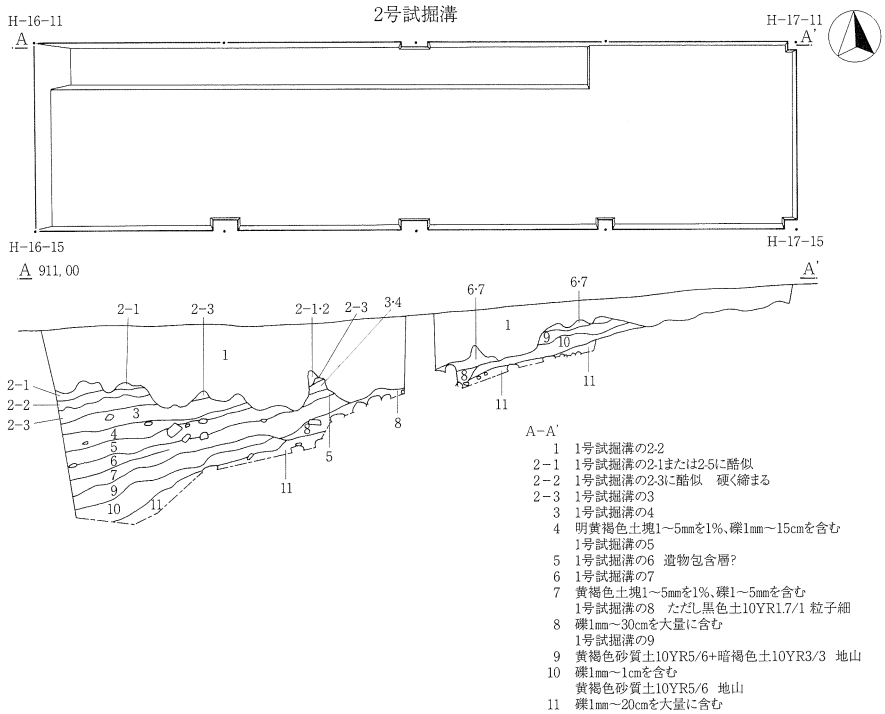
黒曜石は耕作土層を含め、847点、1610.4ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器（両極剥離痕をもつ石器）、石鏃、石鏃未製品、不定形石器（剥離によって刃部の作り出されたもの、使用の際に生じたとみられる痕跡のあるもので、石鏃、石鏃未製品、石錐、石匙以外のもの）がある。

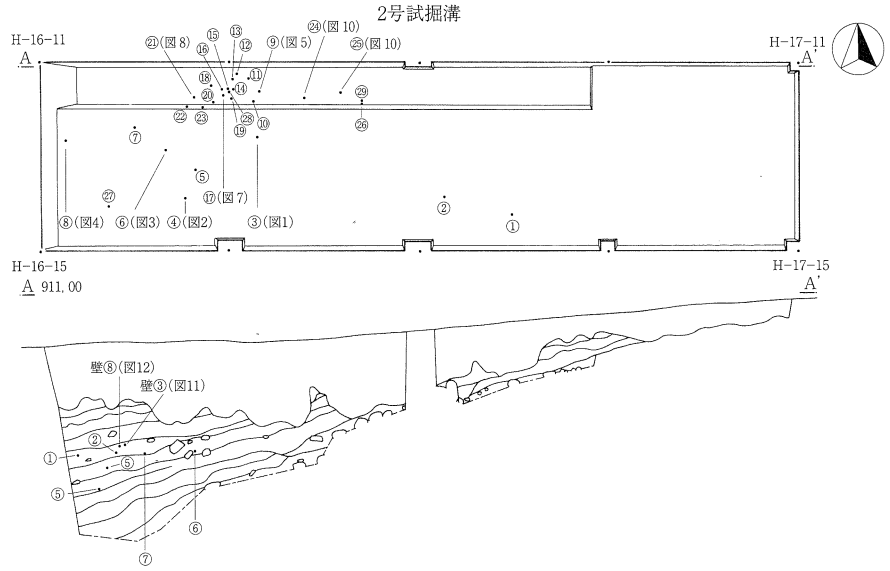
石材には火成岩、堆積岩、変成岩とその剥片などがある。

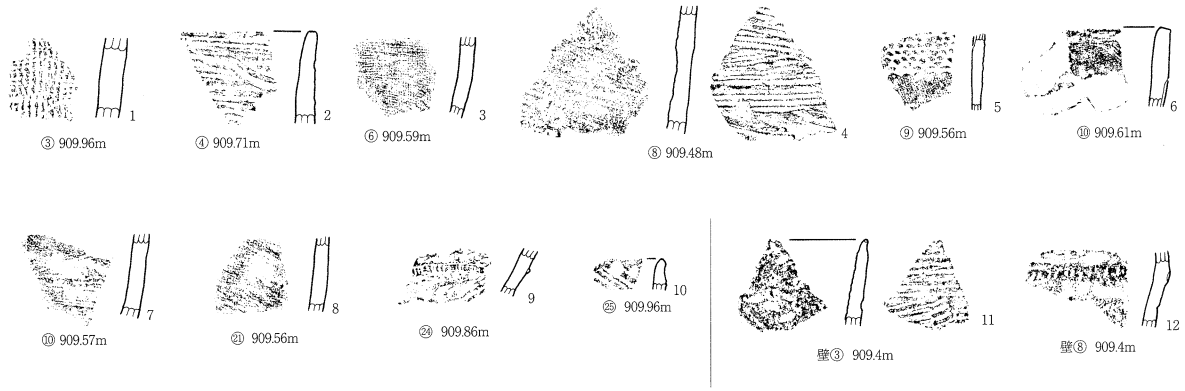
2号試掘溝（第22図）

東西方向に設定した試掘溝で、幅2m、長さ8m、面積16㎡を発掘した。発掘深度は20cmから100cmであるが、北側断面下に設けた幅50cm、長さ約6mのサブトレンチの深度は65cmから210cmである。

土層の基本的な堆積状態は1号試掘溝と同じである。ただし1号試掘溝より東方に長く、斜面のより高い地点に設定されたため、例えば東端の耕作土層を除去すると暗褐色土層から黄褐色土層の地山が露出する、第2－5層（砂利と礫を含む）が見当たらないなど、土層の遺存状態に違いがみられる。1号試掘溝と同様に、黒色土層内の平面的な調査は第3層から第4層付近までとした。サブトレンチの平面および断面を含め、遺構と思われる痕跡は確認されなかった。なおサブトレンチ西側の中ほど、第4層から第5層を中心に早期後半（後葉～末葉）の土器が10点余りまとまって出土した。中には接合するものもある。縁辺に磨滅痕が見られるものの、東側または北側から流れ込んだ土器とみるには数が揃いすぎている。台地上から投棄された遺物の可能性を考える必要もあろうか。







第22図 2号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

遺　物

土器、石器、黒曜石、石材が出土した。

土器は5㎝大が中心で、10㎝を超えるものはない。一部接合するものもあるが、図上を含め、器形復元できるものはない。以下、第2層群以下から出土した土器について記述する。第2層群では早期前半（押型文）、早期後半（後葉：沈線文、末葉：条痕文）、前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系、前葉：中越式）、前期後半（末葉）、中期後半（曽利式など）、後期前半（初頭、前葉：堀之内式）などが出土した。その中の2点を図示した（5・6）。第3層から第5層では早期後半（後葉：沈線文、末葉：条痕文など）の土器が出土した。その中の10点を図示した（1～4、6～8、10～12）を図示した。

石器は耕作土層を含め、定角式磨製石斧2点、堆積岩製または変成岩製の打製石斧2点、火成岩製の凹石類11点、火成岩製および堆積岩製の特殊磨石8点、火成岩製の不定形石器1点、火成岩製の石皿1点が出土した。なお現地において、出土した礫を洗浄し、石器であるか否かを確認している。その結果、491点のうち上記の25点（約5％）が石器として取り上げられた。

黒曜石は耕作土層を含め、735点、1,254ｇが出土した。器種は原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器、石匙である。

石材には堆積岩、変成岩とその剥片などがある。

3号試掘溝（第23図）

東西方向に設定した試掘溝で、幅1ｍまたは2ｍ、長さ6ｍ、面積10㎡を発掘した。発掘深度は30㎝から95㎝であるが、北側断面下に設けた幅40㎝、長さ約3ｍのサブトレンチの深度は35㎝から90㎝である。

土層の基本的な堆積状態は1号・2号試掘溝と同じである。第3層から第4層を早期後半（後葉～末葉）の遺物包含層と考えているが、断面から遺物が出土していないために、はっきり示すことができない。他に記すべき点としては、第2層群の残りがよいことである。平面と断面を精査したが、遺構は確認されなかった。

遺　物

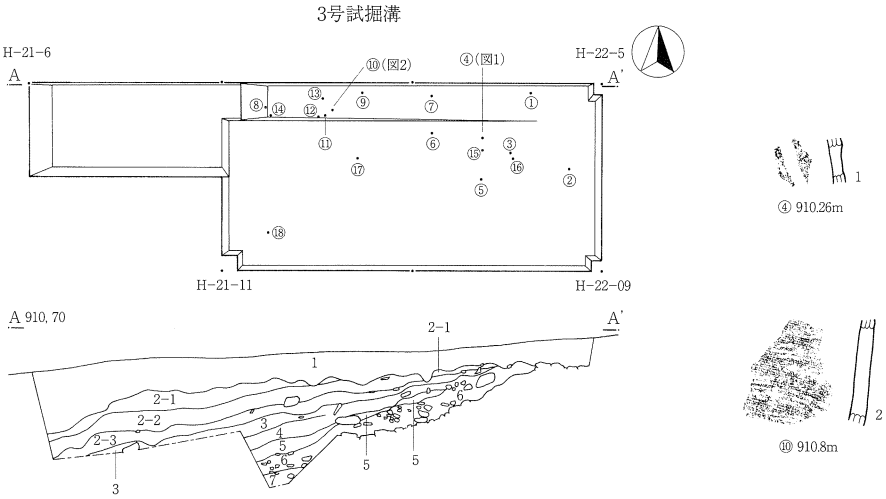
土器、石器、黒曜石、石材が出土した。

土器は5㎝大に満たないものが多い。以下、第2層群以下から出土した土器について記述する。第2層群では早期前半（押型文）、早期後半（末葉：条痕文）、前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系）、中期、後期前半（前葉：堀之内式）などが出土した。その中の1点を図示した（1）。第3層から第5層では早期後半（末葉：条痕文）が出土した。その中の1点を図示した（2）。石器は耕作土層を含め、堆積岩製の両極石器1点、変成岩製の打製石斧1点、火成岩製の凹石類1点、火成岩製の特殊磨石2点、火成岩製？と堆積岩製の不定形石器2点が出土した。黒曜石は耕作土層を含め、667点、1,038.2ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器がある。石材は堆積岩、変成岩とその剥片などが出土した。

4号試掘溝（西側）（第23図）

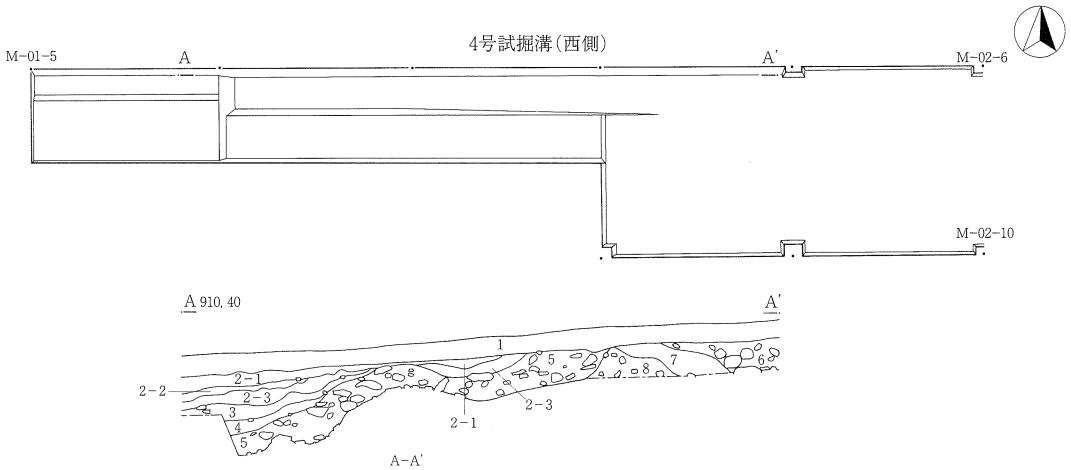
東西方向に設定した幅1ｍまたは2ｍ、長さ22ｍ、面積38㎡の試掘溝である。土層の堆積状態からみて、西端から約6ｍを「斜面」とする。発掘深度は50㎝から60㎝であるが、北側断面下に設けた幅50㎝、長さ約4ｍのサブトレンチの深度は60㎝から110㎝である。報告にあたっては、「斜面」の東約2ｍまで図化した土層断面図についてもふれることとする。

「斜面」とした地点の基本的な土層の堆積状態は、1号試掘溝から3号試掘溝と同じである。層序の上で、第3層を早期後半（後葉～末葉）の遺物包含層とすることは妥当と考えるが、土器が1点しか出土していないため断定することは難しい。土層断面で注目されるのは、斜面と逆方向の堆積を示す第6層から第8層である。



A-A'

1	1号試掘溝の1
2-1	1号試掘溝の2-1 礫1mm～1.5cmを含む
2-2	1号試掘溝の2-2 礫1mm～1.5cmを含む
2-3	1号試掘溝の2-3 礫1mm～3cmを含む
3	黒褐色土7.5YR2/2+黒色土7.5YR2/1　硬く締まる 礫1mm～5cmを含む
4	黒褐色土10YR2/2　硬く締まる 礫1mm～5cmを含む
5	黒褐色土10YR2/3 黄褐色土塊1～2mmを2%、礫1mm～5cmを含む
6	1号試掘溝の8　ただし黒褐色土10YR2/3 黄褐色土塊1～2mmを5%、礫1mm～30cmを大量に含む
7	1号試掘溝の9　ただし褐色砂質土10YR4/6または黄褐色土10YR5/6 礫1mm～30cmを大量に含む



A-A'

1	1号試掘溝の1
2-1	1号掘溝の2-1　ただし黒色土7.5YR2/1 明黄褐色土塊1mmを1%、炭化物1～2mmを1%、礫1mm～1cmを大量に含む
2-2	1号試掘溝の2-2 礫1mm～1.5cmを含む
2-3	1号試掘溝の2-3 明黄褐色土塊1mmを1%、炭化物1mm～2cmを大量に含む
3	黒褐色土10YR2/2　硬く締まる　遺物包含 礫1mm～1cmを含む
4	黒褐色土10YR2/3　硬く締まる 礫1mm～5cmを含む
5	1号試掘溝の8　ただし黒色土7.5YR2/1～暗褐色土10YR3/3 黄褐色砂質土塊1mm～3cmを25%、礫1mm～20cmを大量に含む
6	暗褐色砂質土10YR3/4～黄褐色土10YR5/6　地山 礫1mm～30cmを大量に含む
7	黄褐色砂質土10YR5/6　地山
8	暗褐色砂質土10YR3/4～褐色砂質土10YR4/4　地山 黄褐色砂質土塊1mm～2cmを30%、礫1mm～10cmを大量に含む

第23図　3号試掘溝、4号試掘溝（西側）平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

これらの層のベースとなる土が、地山に類似する暗褐色および黄褐色の砂質土であり、径の小さなものから大きなものまで大量の礫を含む層もあれば、ほとんど含まない層がある点に着目したい。つまり、第2章第1節で記した、台地の基盤をなす「自然堤防」状の高まりの形成過程を示す痕跡が、この断面に表れているのではないかということである。桧沢川の浸食作用で、台地の基盤をなす礫層とその上を覆う火山灰起源の地山層が削られ、これが下方に運ばれる際に、このような状態で堆積したと考えたい。なお斜面に逆行するこうした土層断面は、4号試掘溝（東側）の2箇所のサブトレンチ（第24図Ａ・Ｂ断面）で確認されたほか9次調査の3区西側でも確認されており、一地点に見られる現象でないことは確かである。また第6層から第8層の堆積状態を見る限り、台地がさらに西へ続いていたこととなるが、第5層によって台地の西側が大きく削り取られ、現況の西側斜面が形作られたのではないだろうか。そして、この上に早期後半の遺物包含層が堆積したものと考えられる。

遺　物

土器、黒曜石、石材が出土した。

土器は5㎝大に満たないものを中心に少量出土したが、この中に7㎝ほどの大きさの尖底土器の底部がある。以下、第2層群から出土した土器のみ記述する。早期前半（押型文）、早期後半（後葉：沈線文）、中期前半（中葉）、後期前半（前葉？）が出土した。黒曜石は耕作土層を含め、231点、323.4ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器がある。石材には堆積岩、変成岩とその剥片などがある。

4号試掘溝（東側）（第24図）

東西方向に設定した試掘溝で、幅1ｍまたは2ｍ、長さ22ｍ、面積38㎡を発掘した。ここでは西端の約6ｍを除く範囲を台地の「平坦面」とする。発掘深度は20㎝から60㎝であるが、北側断面下に設けた幅30㎝から40㎝、長さ70㎝から2ｍのサブトレンチの深度は50㎝から130㎝である。

調査区全体が耕作に伴う攪乱によって、明黄褐色土層まで削平されている。また遺構11の西側は明黄褐色土層も削り取られ、台地の基盤をなす礫が一面に露出した。これらの礫を含む黄褐色（砂質）土層が、遺構11付近から東側に潜り込み（Ａ断面）、これ続く土層が93号住居址北のサブトレンチで確認された（Ｂ断面）。これが4号試掘溝（西側）で記した斜面に逆行する土層である。

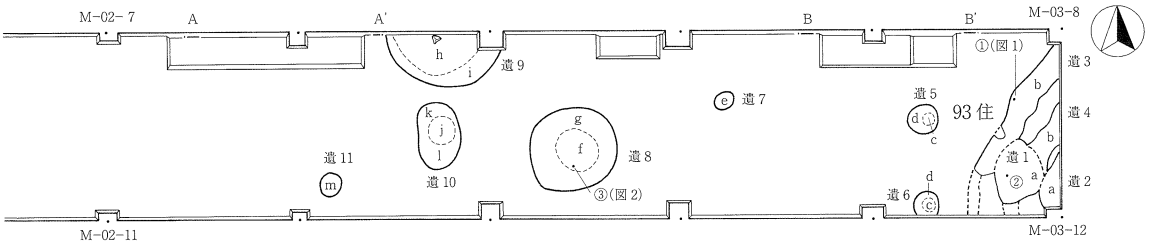
調査の結果、遺構1から遺構11が確認された。その中で遺構1から遺構4が竪穴住居址と考えられるため、これを93号住居址とした。

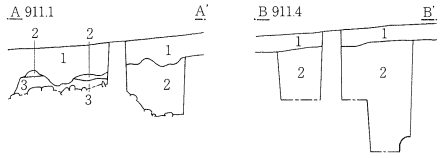
遺　構・遺　物

93号住居址（遺構1～4）　埋土はもとより、床までも削り取られた状態で確認された。埋土の形状から、遺構1と遺構2を柱穴、遺構3と遺構4を周溝とし、それぞれの位置関係から遺構2と遺構4を竪穴住居拡張前の古い柱穴と周溝、遺構1と遺構3を拡張後の新しい柱穴と周溝と考えた。これにより竪穴住居址と認定した。平面規模は不明である。遺構1は不整楕円形を呈し、規模は68㎝×50㎝とみられる。埋土は1層である。ここから早期後半（末葉）から前期前半（初頭）の可能性がある土器が1点出土した。遺構2の規模は推測が不可能である。遺構3は幅20㎝から25㎝で、南側が失われている。早期後半（末葉：絡条体圧痕文）の土器が1点出土し、これを図示した（1）。遺構4は幅20㎝から25㎝で南側が失われている。

確認面から出土した土器の時期によれば、早期後半（末葉）から前期前半（初頭）の竪穴住居址となる。しかし周溝と柱穴の位置関係からみた住居構造からは、中期後半の竪穴住居址と考えたくなる。そのため時期は不明としておく。

4号試掘溝（東側）



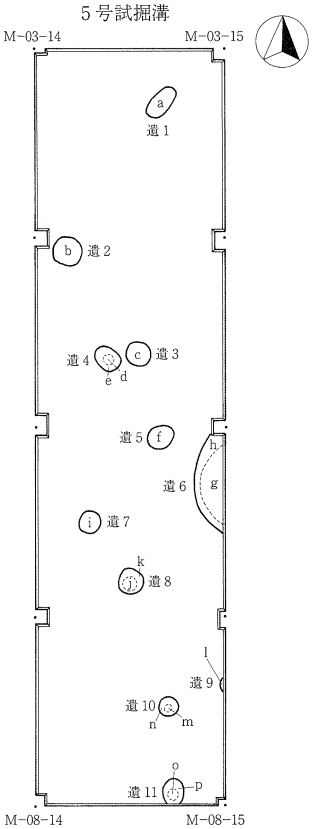


A-A'・B-B'

1　耕作土(畑)
2　黄褐色土10YR5/8　地山
3　黄褐色土10YR5/8+暗褐色土10YR3/4 地山
　　礫1～30cmを大量に含む

93住柱穴（遺構1・2）
　a　黒褐色土10YR2/2 硬い
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
93住周溝（遺構3・4）
　b　黒褐色土10YR2/3 硬い
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを20%、炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
遺構5・6
　c　黒褐色土10YR3/2　柱痕
　　明黄褐色土塊1～5mmを7%、礫1～2mmを含む
　d　暗褐色土10YR3/3～褐色土10YR3/4
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを20%、礫1～2mmを含む
遺構7
　e　暗褐色土10YR3/4
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを20%含む
遺構8
　f　黒色土10YR2/1
　　明黄褐色土塊1～5mmを5%、炭化物1～2mmを3%、礫1～5mmを含む
　g　黒褐色土10YR2/2～2/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～5mmを3%、礫1～5mmを含む
遺構9
　h　黒色土10YR2/1
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～5mmを1%、礫1～5mmを含む
　i　黒褐色土10YR2/2～2/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～5mmを2%、礫1～2mmを含む
遺構10
　j　黒色土10YR2/1　柱痕
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、礫1～5mmを含む
　k　黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを20%、礫1～5mmを含む
　l　黒褐色土10YR3/2～暗褐色土10YR3/3
　　明黄褐色土塊1～2cmを25%、礫1～5mmを含む
遺構11
　m　暗褐色土10YR3/3～3/4
　　明黄褐色土塊1mm～1.5cmを25%、礫1～5mmを含む

5号試掘溝



遺構1
　a　黒褐色土10YR3/2
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを15%含む
遺構2
　b　黒褐色土10YR2/2
　　明黄褐色土塊1～7mmを10%、炭化物1～2mmを1%、礫1mm～1cmを含む
遺構3
　c　黒褐色土7.5YR2/2
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、礫1mm～1cmを含む
遺構4
　d　黒褐色土7.5YR2/2　柱痕
　　明黄褐色土塊1～2mmを1%
　e　黒褐色土10YR2/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～7mmを3%、礫1mm～1cmを含む
遺構5
　f　黒褐色土10YR2/2
　　明黄褐色土塊1～7mmを10%、炭化物1～2mmを5%、礫1～5mmを含む
遺構6
　g　黒褐色土10YR2/2
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～2mmを3%、礫1～5mmを含む
　h　黒褐色土10YR2/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構7
　m　黒褐色土10YR3/2
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを15%、礫1～5mmを含む
遺構8
　j　黒褐色土10YR2/3　柱痕か
　　明黄褐色土塊1～5mmを10%、炭化物1mmを1%含む
　k　黒褐色土10YR3/2
　　明黄褐色土塊1mm～1.5cmを25%、礫1～5mmを含む
遺構9
　l　暗褐色土10YR3/4
　　明黄褐色土塊1～7mmを10%含む
遺構10
　m　黒色土7.5YR2/1　柱痕
　　明黄褐色土塊1～7mmを10%含む
　n　黒褐色土10YR2/3
　　明黄褐色土塊1～7mmを10%、炭化物1～2mmを2%、礫1～5mmを含む
遺構11
　o　黒褐色土10YR2/3　柱痕
　　明黄褐色土塊1～3mmを7%、礫1～2mmを含む
　p　暗褐色土10YR3/3
　　明黄褐色土塊1mm～1cmを15%、礫1～5mmを含む

第24図　4号試掘溝（東側）・5号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

遺構5　平面形は円形、規模は32cm×30cmを測る。埋土は2層に分層され、c層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構6　平面形は円形とみられ、規模は（30)cm×28cmを測る。埋土は2層に分層され、c層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構7　平面形は楕円形、規模は22cm×18cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構8　平面形は円形、規模は100cm×90cmを測る。2層に分層されたが、f層は柱痕と考え難い。形状と規模からも貯蔵穴、墓坑など柱穴以外の土坑と考えられる。確認面から早期後半（末葉）から前期前半（初頭）とみられる土器が1点出土し、これを図示した（2）。

遺構9　平面形は円形、規模は110cmほどと推測される。2層に分層されたが、h層は柱痕と考え難い。形状と規模からも貯蔵穴、墓坑など柱穴以外の土坑と考えられる。

遺構10　平面形は楕円形、規模は70cm×44cmを測る。3層に分層され、j層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構11　平面形は楕円形、規模は22cm×18cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器、黒曜石、石材が出土した。すべて耕作土層からの出土である。

土器は早期後半？（末葉：絡条体圧痕文？）、前期前半（前葉：中越式）、中期前半（中葉）がある。黒曜石は320点、591.9gが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器がある。石材には堆積岩、変成岩とその剥片などがある。

5号試掘溝（第24図）

南北方向に設定した試掘溝で、幅2m、長さ8m、面積16㎡を発掘した。発掘深度は15cmから30cmである。調査区全体が耕作に伴う攪乱によって、明黄褐色土層まで削平されている。

調査の結果、遺構1から遺構11が確認された。

遺　構・遺　物

遺構1　平面形は楕円形、規模は40cm×20cmを測る。埋土は1層である。規模から柱穴と考えられる。

遺構2　平面形は円形、規模は31cm×29cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構3　平面形は円形、規模は25cm×25cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構4　平面形は楕円形、規模は30cm×22cmを測る。埋土は2層に分層され、d層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構5　平面形は円形、規模は28cm×24cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構6　平面形は円形、規模は120cm程度と推測される。埋土は2層に分層された。形状と規模から貯蔵穴、墓坑など柱穴以外の土坑と考えられる。

遺構7　平面形は円形、規模は22cm×22cmを測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構8　平面形は円形、規模は27cm×25cmを測る。埋土は2層に分層され、j層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構9　平面形は円形もしくは楕円形とみられるが、規模は推測不可能である。埋土は1層である。推測される形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構10　平面形は円形、規模は21㎝×19㎝を測る。埋土は2層に分層され、m層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

遺構11　平面形は楕円形、規模は（30）㎝×21㎝を測る。埋土は2層に分層され、ｏ層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から石器、黒曜石、石材が少量出土した。

石器は変成岩製？の磨製石斧の破損品とみられるものが1点出土した。黒曜石は125点、167ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器がある。石材には堆積岩とその剥片がある。

6号試掘溝（第25図）

南北方向に設定した試掘溝で、幅2m、長さ10m、面積20㎡を発掘した。発掘深度は15㎝から40㎝である。調査区全体が耕作に伴う攪乱によって、明黄褐色土層まで削平されている。

調査の結果、遺構1から遺構15が確認された。遺構6と遺構7、遺構8から遺構12、遺構13から遺構15がそれぞれ竪穴住居址と考えられる。これらを94号住居址から96号住居址とした。

遺　構・遺　物

94号住居址（遺構6・7）　地表面を15㎝前後掘り下げた面から確認された。耕作によって明黄褐色土層面まで削られているにも関わらず、埋土（遺構6）がしっかり残っていた。そのため躊躇なく竪穴住居址と認定することができた。なお遺存状態は12次調査で確認された竪穴住居址の中で最もよい。

西側が平安時代の竪穴住居址（96号住居址）と重複し、南西の一部がカマド（遺構13）およびその脇にある土坑（遺構15）に乱されている。また西側にある縄文時代の竪穴住居址（95号住居址）と僅かに重複するが、重なる範囲が狭い上、埋土が類似することもあり、切り合い関係をつかむことができなかった。さらに遺構5が北側に重複するが、これとの新旧関係も不明である。

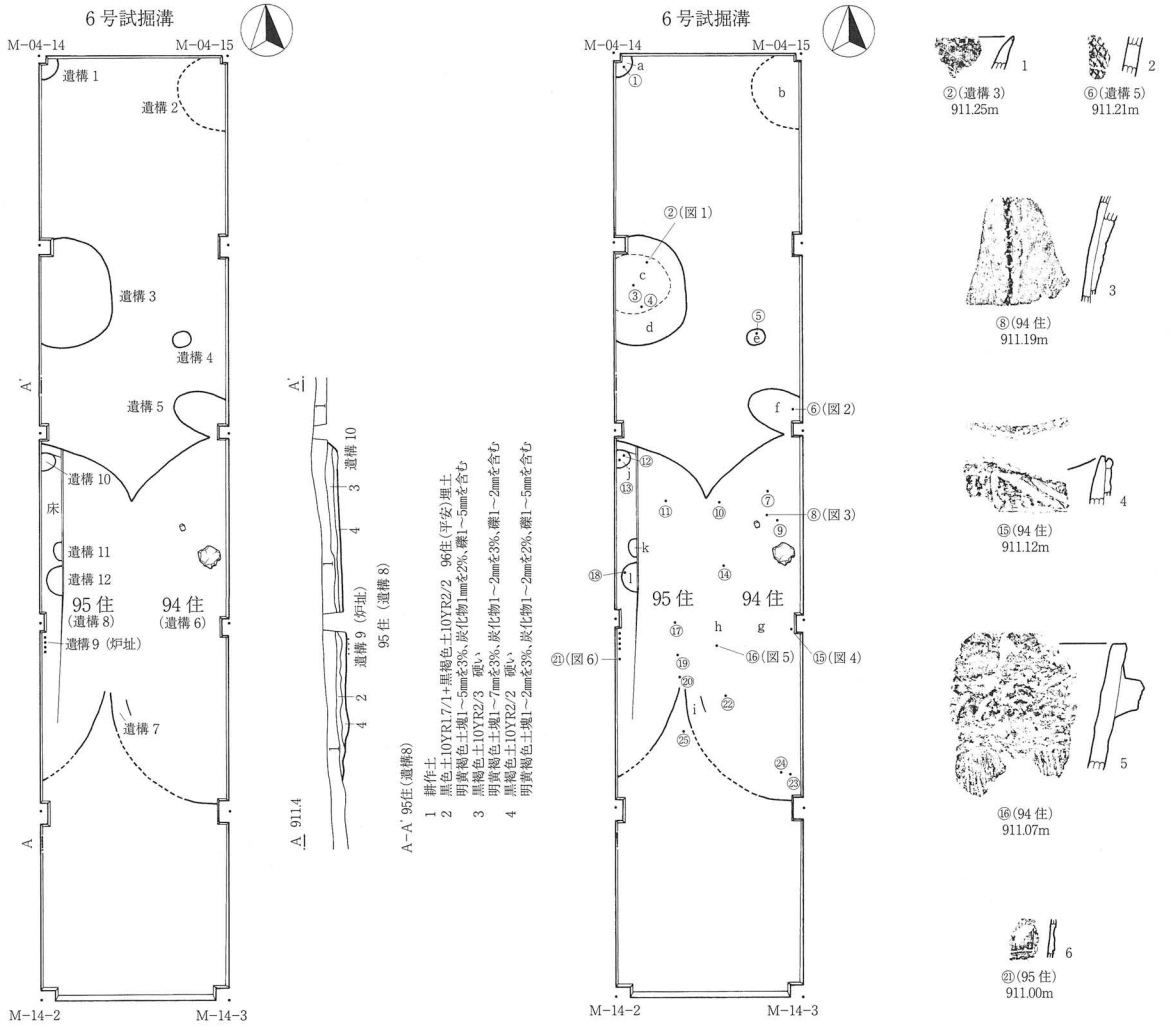
埋土の輪郭のまま東側に丸くなるのであれば、直径4mほどの円形プランの竪穴住居址となろう。しかし東西方向に長軸をもつ隅丸長方形の可能性も考えられるため、平面規模は不明とせざるを得ない。埋土は2層に分層された。内側（ｇ層）が外側（ｈ層）よりも黒みが強いが、境界がはっきりしなかった。遺構7とした周溝は、耕作の深耕が及んだ箇所から確認されたものである。あわせてその脇に床が露出した。床の露出範囲は狭いが、硬さからはっきり床と認識できる状態であった。最寄りの確認面から床までの深さは20㎝を測る。

本址の範囲から出土し、位置を記録して取り上げた土器が10点ほどある。中には10㎝を超える大きなものもある。時期のわかるものとして早期後半（末葉：条痕文）、前期前半（前葉：中越式）などがある。時期不明なものを含め、3点を図示した（3～5）。

出土した土器の中で時期の最も新しいものは、前期前半（前葉：中越式）である。図示しなかった土器も前期前半（前葉：中越式）のものが多いため、本址をこの時期の竪穴住居址と考えたい。

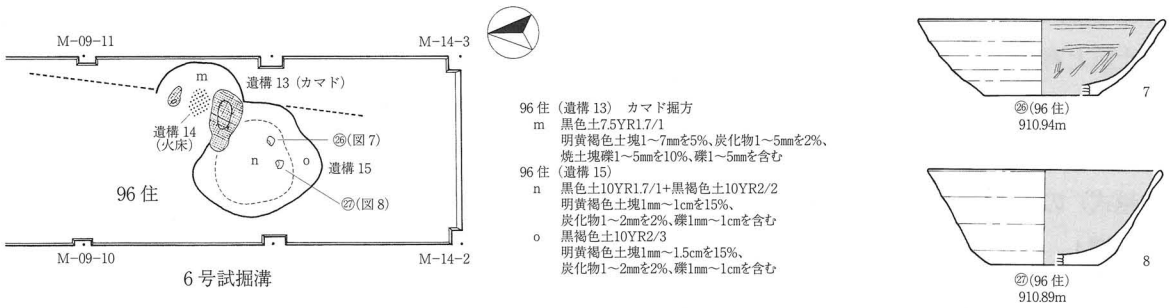
95号住居址（遺構8～12）　地表面を15㎝から20㎝ほど掘り下げた面から確認された。94号住居址と同様に、埋土（遺構8）が良い状態で残っており、躊躇なく竪穴住居址と認定できた。

埋土の輪郭によれば、平面形は隅丸方形ないし隅丸長方形と推測される。平面規模は不明である。本址を確認した当初、その面に96号住居址の埋土がかすかに残存していた。埋土の範囲や厚さを明らかにするとともに、本址の遺存状態を確認する目的で、西側断面下に幅20㎝前後、長さ約3mのサブトレンチを設定し床



遺構1
a　黒褐色土10YR3/2　硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、礫1～2mmを含む
遺構2
b　黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1mm～1cmを5%、礫1～2mmを含む
遺構3
c　黒色土10YR2/1　硬い
明黄褐色土塊1～2mmを2%、炭化物1～5mmを5%、礫1～5mmを含む
d　黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～2mmを3%、礫1～2mmを含む
遺構4
e　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1～5mmを7%、礫1～2mmを含む
遺構5
f　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、礫1～2mmを含む

94住（遺構6）
g　黒色土7.5YR2/1　硬い
明黄褐色土塊1～2mmを2%、炭化物1～5mmを5%、礫1～20mmを含む
h　黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～2mmを1%、礫1mm～5cmを含む
94住周溝（遺構7）
i　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1mmを1%含む
95住周溝（遺構10）
j　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構11
k　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1～7mmを7%、礫1～2mmを含む
遺構12
l　黒褐色土10YR2/3　硬い
明黄褐色土塊1～7mmを5%、炭化物1mmを2%、礫1～2mmを含む



96住（遺構13）カマド掘方
m　黒色土7.5YR1.7/1
明黄褐色土塊1～7mmを5%、炭化物1～5mmを2%、
焼土塊礫1～5mmを10%、礫1～5mmを含む
96住（遺構15）
n　黒色土10YR1.7/1+黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1mm～1cmを15%、
炭化物1～2mmを2%、礫1mm～1cmを含む
o　黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1mm～1.5cmを15%、
炭化物1～2mmを2%、礫1mm～1cmを含む

第25図　6号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

まで掘り下げた。その土層断面によると、本址の南壁が僅かに96号住居址に削り取られていることが判明した。それでも、北側の埋土は観察が可能な十分な厚みがあり、観察の結果、2層に分層された。また床から緩やかに立ち上がる壁（北壁）が12cmの高さで確認された。床は硬く締った平らな面で、検出は容易であった。床面の中央やや南寄りから地床炉とみられる焼土址（遺構9）、西側から3箇所の土坑（遺構10～12）が検出された。地床炉の中心は調査区域外にあり、東側外縁を南北に15cmほど確認したに過ぎない。保存のために断ち割っていないが、焼け具合は地山がうっすらと赤化する程度であった。遺構10は楕円形の柱穴とも考えられるが、周溝の可能性が高いように思われる。遺構11は直径20cm、遺構12は直径30cmの柱穴と推測される。炉との距離が近いようにも思えるが、本址の柱穴である可能性を指摘したい。

本址の範囲（遺構10～12を含む）から出土し、位置を記録して取り上げた土器が5点ある。その中に前期前半（初頭？：木島式？、前葉：中越式）などがあり、1点を図示した（6）。黒曜石は7点、8ｇが出土した。器種に剥片、砕片、両極石器がある。

出土した土器の中で時期の最も新しいものは、前期前半（前葉：中越式）である。しかし時期を決定するには余りにも数が少ないため、この時期の可能性がある竪穴住居址という程度にとどめておく。

96号住居址（遺構13～15）　地表面を15cm程度掘り下げた面から確認された。耕作で床付近まで削り取られているが、カマド掘方（遺構13）、火床（遺構14）、カマド脇の土坑（遺構15）が辛うじて残っている。

本址の埋土は黒みの強い黒色土である。かすかに残る程度であったが、一定の範囲にまとまっていたために、遺構の存在が確認された。確認直後の所見によると、竪穴住居址の南北長は3.5m以上あったように思われる。その埋土の広がりとカマドの位置関係から、壁に直交する軸方向はＳ－82°－Ｅと推測される。断面に床（掘方底面？）とみられる部分が僅かに認められるが、平面では面として捉えることができていない。カマドの遺存状態からうかがえるように、床は調査以前に削り取られてしまった可能性が高い。カマドは30cm×20cmの範囲が焼けた火床、火床の両側にある粘土混じりの袖の下部、カマドの掘方埋土である東への張り出しが残る程度である。カマドの南脇にある120cm×110cmの不整形の土坑は貯蔵穴であろうか。確認面からであるが、2個体の黒色土器坏が出土した（7・8）。また黒曜石が2点、1.9ｇが出土した。器種は剥片、両極石器である。

カマドの南脇にある土坑から出土した黒色土器坏から、平安時代の竪穴住居址と考えられる。

遺構1　平面形、規模ともに推測不可能である。埋土は1層である。黒曜石が1点、8.2ｇが出土した。器種は不定形石器である。

遺構2　埋土の下位が僅かに残り、これと合う立ち上がりが断面で確認された。そのため土坑と認定した。平面形は円形または楕円形と推測される。埋土は1層である。形状と規模から貯蔵穴、墓坑などの柱穴以外の土坑と考えておく

遺構3　平面形は円形、規模は直径115cm前後と推測される。埋土は2層に分層されたが、柱痕とは考え難い。形状・規模・埋土から貯蔵穴、墓坑などの柱穴以外の土坑と考えられる。確認面から前期前半（前葉：中越式）の土器ほか2点が出土した。その中の1点を図示した（1）。

遺構4　平面形は楕円形、規模は20cm×16cmを測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。確認面から時期不明の土器が1点出土した。

遺構5　平面形は楕円形、規模は短辺が20cmを測るが、長辺は推測不可能である。埋土は1層である。全形がイメージできないため遺構の性格に言及できない。確認面から早期前半（中葉：押型文）の土器が1点出

土し、これを図示した（2）。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器、石器、黒曜石、石材が少量出土した。土器は前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系、前葉：中越式）、中期後半（加曽利Ｅ式）などがある。石器は堆積岩製の不定形石器が2点出土した。黒曜石は189点、363.3ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器、石錐がある。石材には堆積岩とその剥片がある。

7号試掘溝（第26・27図）

南北方向に設定した試掘溝で、幅2m、長さ14m、面積28㎡を発掘した。発掘深度は20㎝から80㎝である。耕作に伴う攪乱によって、試掘溝の東側が黒褐色土層から暗褐色土層、南側が明黄褐色土層まで乱されている。さらに試掘溝の南端に、斜面崩落？に伴う埋土がなされていた。

調査の結果、遺存状態はよくないものの、遺構1から遺構51の遺構が確認された。なお遺構12と、遺構48から遺構51が竪穴住居址（遺構12は炉）と考えられる。前者を97号住居址、後者を98号住居址とした。

遺　構・遺　物

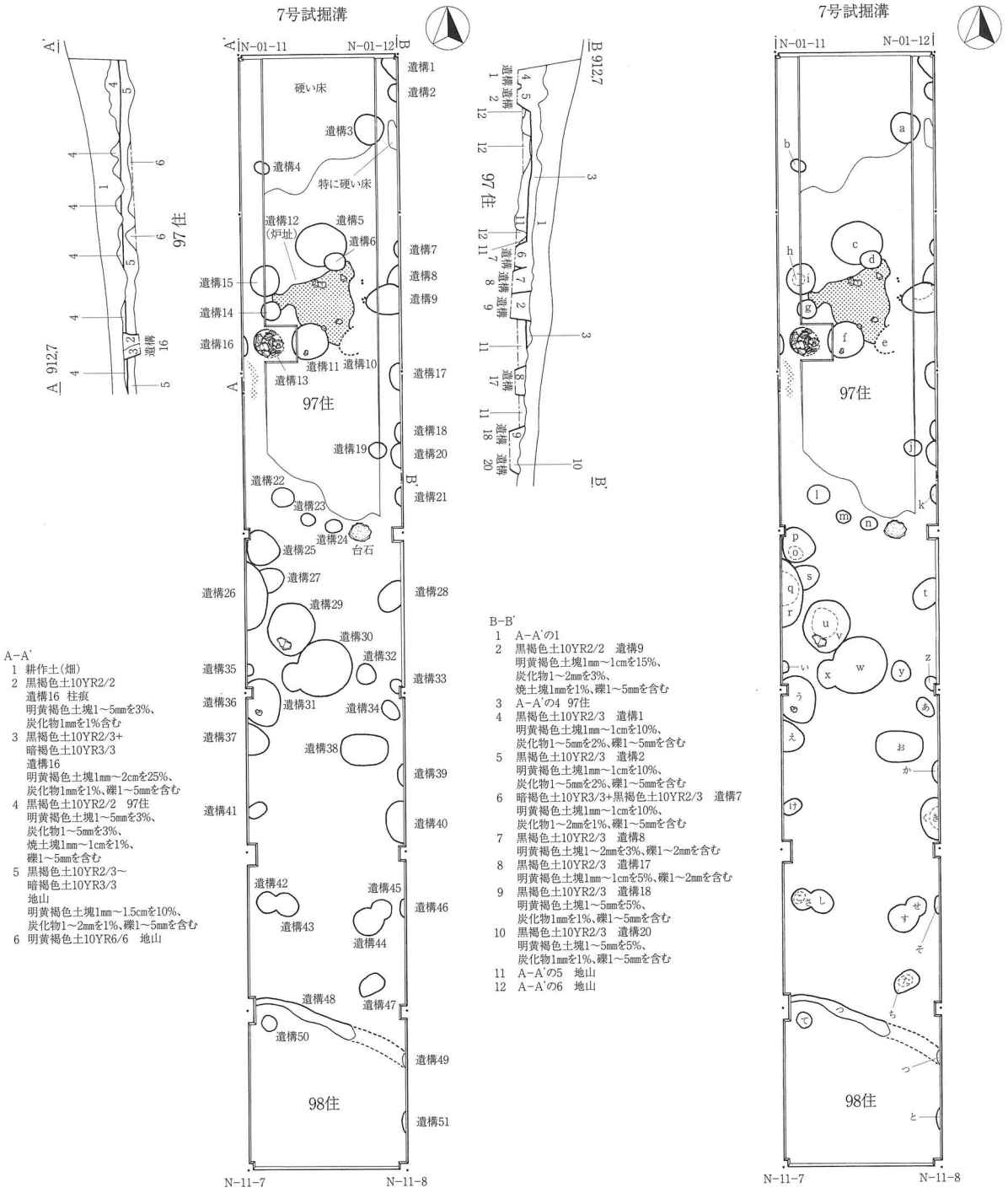
97号住居址（遺構12）　試掘溝の東側、地表面を20㎝から50㎝ほど掘り下げた面から確認された。調査を初めて間もなく、土器や黒曜石が一定量出土し、やがて一部に床とみられる硬い面が確認された。しかし耕作による深耕のため、特に西側ではその面がしっかり捉えられずにいた。そこで東西両断面下に幅30㎝のサブトレンチを設け、周溝や壁の検出を試みたが、事態は変わらなかった。調査最終日となり、再度硬い面を精査したところ、明黄褐色土塊・焼土粒子・炭化物の集中する箇所が検出された。ここを掘り下げた結果、焼土址となった。焼土址の検出面が床とみていた硬い面に続くことから、竪穴住居址と認定するに至った。

本址の範囲は、埋土や硬い面の範囲、地床炉ならびに床に据えられたとみられる台石の位置から、地床炉を中心に南北6m以上と考えられる。埋土は1層である。床は西へ緩やかに傾き、炉の特に北側が硬い。しかし炉の南側は、北側のような硬い面が最後まで確認できなかった。炉は地床炉である。南北80㎝、東西100㎝の不整形を呈し、5㎝ほど掘り窪められている。掘方全体が激しく焼けている。炉から3mほど南の地点に、火成岩製の台石が据え置かれている。上面に磨面はなかったが、敲打により生じたとも思えるアバタ状の窪みが多数認められた。炉の周囲に柱穴とみられる多くの遺構があるが、本址との関係ははっきりしない。

本址とみる範囲から多数の土器が出土し、位置を記録して取り上げたものでも100点余りある。その中で本址との関係が不明な、地床炉（遺構12）以外の遺構から出土した土器を除き、時期の明らかなものを以下に記す。早期後半（末葉：条痕文）、前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系、前葉：中越式）、前期後半（末葉：下島式）、中期後半（曽利式、加曽利Ｅ式）、後期前半（前葉：堀之内式、中葉：加曽利Ｂ式）。この中から17点の土器を図示した（5～9、12～17、19～24）。

土器とともに大量の黒曜石が出土した。そのため地床炉（遺構12）以外の遺構を含め、位置を記録して取り上げることができなかった。ここでは地床炉出土の黒曜石について記述し、他の黒曜石は「その他の遺物」で報告する。地床炉から16点、91.9ｇが出土した。器種は原石、石核、剥片、砕片、両極石器である。

上記のとおり、推測される本址の範囲から、さまざまな時期の土器が出土している。この中で圧倒的多数を占めるものは前期前半である。また本址の炉である遺構12から、早期後半（末葉：条痕文）から前期前半（初頭）に位置づけの可能な土器が主体となり出土している。そのため本址の時期を、早期後半（末葉：条痕文）から前期前半（初頭）と考えることとしたい。



A-A'
1 耕作土(畑)
2 黒褐色土10YR2/2
遺構16 柱痕
明黄褐色土塊1～5mmを3%、
炭化物1mmを1%含む
3 黒褐色土10YR2/3+
暗褐色土10YR3/3
遺構16
明黄褐色土塊1mm～2cmを25%、
炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
4 黒褐色土10YR2/2 97住
明黄褐色土塊1～5mmを3%、
炭化物1～5mmを3%、
焼土塊1mm～1cmを1%、
礫1～5mmを含む
5 黒褐色土10YR2/3～
暗褐色土10YR3/3
地山
明黄褐色土塊1mm～1.5cmを10%、
炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
6 明黄褐色土10YR6/6 地山

B-B'
1 A-A'の1
2 黒褐色土10YR2/2 遺構9
明黄褐色土塊1mm～1cmを15%、
炭化物1～2mmを3%、
焼土塊1mmを1%、礫1～5mmを含む
3 A-A'の4 97住
4 黒褐色土10YR2/3 遺構1
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、
炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
5 黒褐色土10YR2/3 遺構2
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、
炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
6 暗褐色土10YR3/3+黒褐色土10YR2/3 遺構7
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、
炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
7 黒褐色土10YR2/3 遺構8
明黄褐色土塊1～2mmを3%、礫1～2mmを含む
8 黒褐色土10YR2/3 遺構17
明黄褐色土塊1mm～1cmを5%、礫1～2mmを含む
9 黒褐色土10YR2/3 遺構18
明黄褐色土塊1～5mmを5%、
炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
10 黒褐色土10YR2/3 遺構20
明黄褐色土塊1～5mmを5%、
炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
11 A-A'の5 地山
12 A-A'の6 地山

第26図 7号試掘溝 平面図・断面図 (1/80)

遺構3
a 黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1～5mmを5%、炭化物1～2mmを3%、礫1～2mmを含む
遺構4
b 黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1～5mmを3%、炭化物1mmを1%、礫1mm～1cmを含む
遺構5
c 黒色土10YR2/1～黒褐色土10YR2/2 硬い 上面に貼床あり
明黄褐色土塊1mm～1cmを3%、炭化物1～5mmを5%、焼土塊1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
遺構6
d 黒褐色土10YR2/2 軟らかい
明黄褐色土塊1～5mmを2%、炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構10
e 黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1mm～5mmを3%、炭化物1～5mmを5%、焼土塊1～5mmを3%、礫1～5mmを含む
遺構11
f 黒褐色土10YR2/2+黒色土10YR2/1 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを3%、炭化物1～5mmを2%、焼土塊1～5mmを5%、礫1～5mmを含む
遺構14
g 黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1～5mmを3%、炭化物1～5mmを1%、焼土塊1～5mmを5%、礫1～5mmを含む
遺構15
h 黒褐色土10YR2/2 柱痕
明黄褐色土塊1～2mmを2%、炭化物1～5mmを2%、焼土塊1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
i 黒褐色土10YR2/2～2/3
明黄褐色土塊1～7mmを7%、炭化物1～5mmを2%、焼土塊1～5mmを3%、礫1～5mmを含む
遺構19
j 黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1～5mmを7%、炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構21
k 黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1～5mmを7%、炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構22
l 黒褐色土10YR2/2
明黄褐色土塊1～5mmを7%、礫1～2mmを含む
遺構23
m 黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1～5mmを7%、炭化物1～5mmを2%、礫1～2mmを含む
遺構24
n 黒褐色土10YR2/3
明黄褐色土塊1～7mmを7%、炭化物1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構25
o 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを3%、礫1mmを含む
p 暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを15%、炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構26
q 黒褐色土7.5YR2/1 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを3%、炭化物1～5mmを7%、礫1～2mmを含む
r 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを7%、炭化物1～2mmを2%、礫1～5mmを含む
遺構27
s 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、炭化物1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構28
t 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、炭化物1～2mmを5%、礫1mm～1cmを含む
遺構29
u 黒色土7.5YR2/1 硬い
明黄褐色土塊1～7mmを2%、炭化物1～2mmを5%、礫1～2mmを含む
v 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～2mmを3%、礫1～5mmを含む
遺構30
w 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～5mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構31
x 暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1.5cmを10%、炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構32
y 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～7mmを10%、炭化物1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構33
z 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構34
あ 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを10%、礫1～2mmを含む
遺構35
い 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、礫1～2mmを含む
遺構36
う 黒褐色土10YR2/3+暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構37
え 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～2cmを7%、炭化物1～5mmを5%、礫1mm～2cmを含む
遺構38
お 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1～2mmを7%、礫1mm～2cmを含む
遺構39
か 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構40
き 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを3%、礫1～2mmを含む
く 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1.5cmを10%、炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構41
け 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを7%、礫1mm～2cmを含む
遺構42
こ 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを2%含む
さ 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～7mmを10%、炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構43
し 暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、礫1～5mmを含む
遺構44
す 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを7%、炭化物1mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構45
せ 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを7%、礫1mm～1cmを含む
遺構46
そ 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～5mmを5%、礫1～2mmを含む
遺構47
た 黒褐色土10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1～2mmを5%、礫1～2mmを含む
ち 黒褐色土10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1～7mmを7%、炭化物1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
98住周溝(遺構48·49)
つ 暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1.5cmを25%、炭化物1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
遺構50 98住柱穴
て 暗褐色土10YR3/4 硬い
明黄褐色土塊1～7mmを15%、炭化物1～2mmを1%、礫1～2mmを含む
遺構51 98住柱穴
と 暗褐色土10YR3/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを25%、炭化物1～2mmを2%、礫1～2mmを含む

7号試掘溝　土層観察

98号住居址（遺構48～51）　試掘溝の西端、地表面を20cmから80cmほど掘り下げて確認された竪穴住居址である。

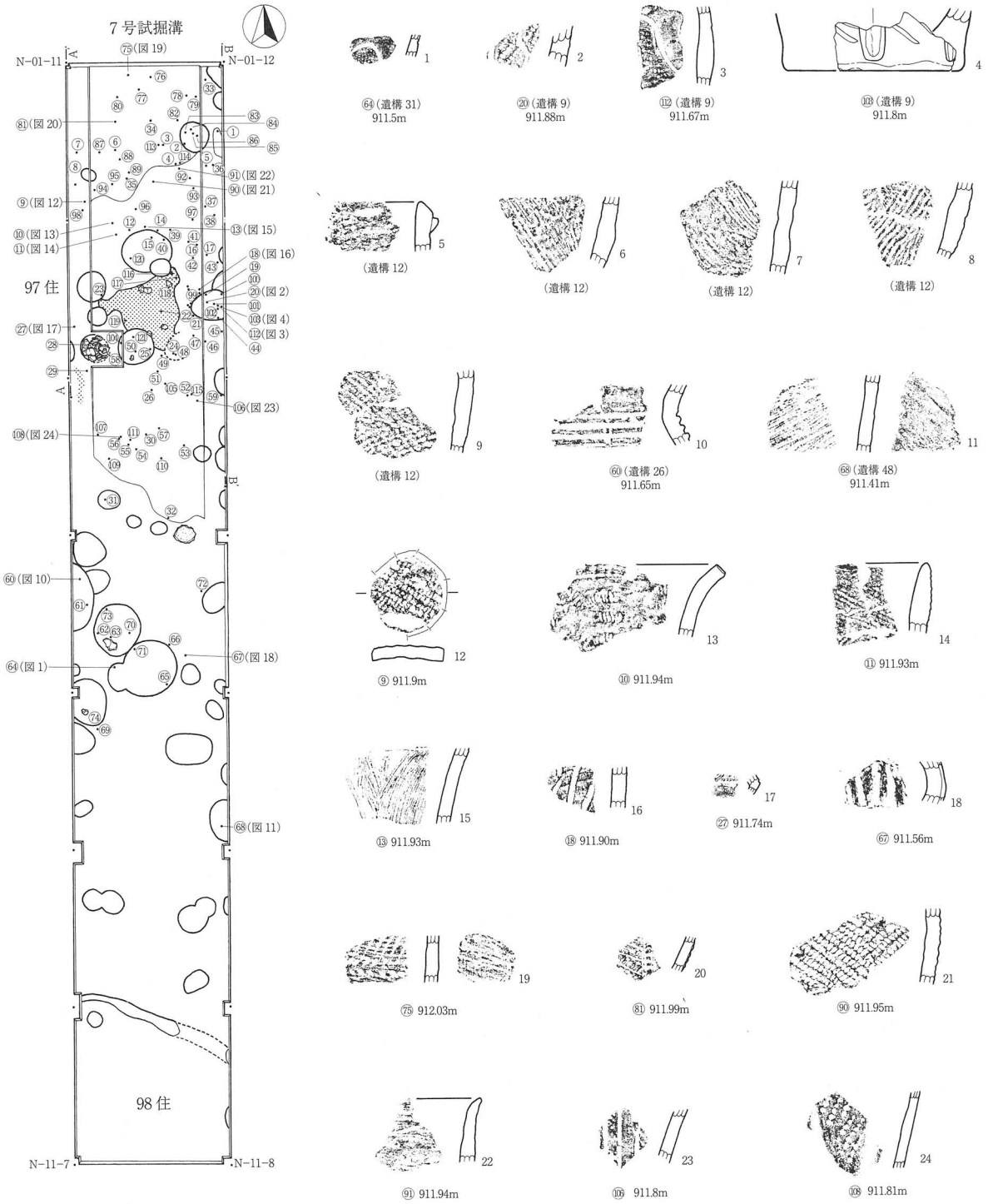
先に記したように、この地点は斜面の崩落に伴って埋土がなされた場所である。その土をすべて取り除いたところ、周溝とみられる遺構48が確認された。その南側を精査すると、形状と規模から柱穴とみられる遺構50が確認された。これが組み合わさり竪穴住居址となる可能性が示唆され、周辺を念入りに調査した。その結果、東側断面に遺構48の一部と思われる遺構49、その南側から柱穴の可能性がある遺構51が確認された。これら4つの遺構が組み合わさる竪穴住居址がこの地点にあったと考えられたため、98号住居址と認定した。

遺構48は、幅が8cmから18cmを測る。遺構50は20cm×18cmの円形を呈す。

土器が出土していないため、本址の時期は不明といわざるを得ない。

遺構1　平面形、規模、性格ともに推測不可能である。

遺構2　平面形は円形、規模は直径20cmほどと推測される。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。



第27図　7号試掘溝 平面図（1/80）、出土土器（1/4）

遺構3　平面形は円形、規模は40㎝×37㎝を測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系）、後期前半？（前葉？）など5点の土器が出土した。

遺構4　平面形は楕円形、規模は20㎝×15㎝を測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。

遺構5　平面形は円形、規模は65㎝×55㎝を測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。前期前半（初頭～前葉：羽状縄文系）、前期後半（末葉：下島式）など3点の土器が出土した。遺構6に切られている。

遺構6　平面形は円形、規模は25㎝×23㎝を測る。埋土は1層である。形状と規模から柱穴と考えられる。遺構5と遺構12を切っている。

遺構7　平面形、規模は推測不可能である。柱穴と思われる。

遺構8　平面形、規模、性格は推測不可能である。遺構9に切られている。

遺構9　平面形は楕円形、規模は（50）㎝×38㎝と推測される。埋土は2層に分層され、内側の土層が柱痕と考えられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。中期後半（曽利式、加曽利Ｅ式）、後期前半（初頭：称名寺式）など土器が5点出土し、3点を図示した（2～4）。遺構8を切っている。

遺構10　平面形がはっきりしないが、遺構と考えて番号を付した。規模も推測不可能である。埋土は1層である。早期後半（末葉）から前期前半（初頭）とみられる2点の土器が出土した。

遺構11　平面形は円形、直径45㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。後期前半とみられる土器片など3点が出土した。地床炉（遺構12）を切っている。

遺構13　平面形は円形、規模は37㎝×35㎝を測る。埋土は不明。15点余りの角礫・円礫などが集積する。2点が石器、1点が石材である。石器は火成岩製の凹石類1点、堆積岩製の砥石1点である。石材は堆積岩である。早期後半（末葉）から前期前半（初頭）と思われる2点の土器が出土した。

遺構14　平面形は円形、直径25㎝を測る。埋土は1層である。地床炉（遺構12）を切る。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構15　平面形は円形、規模は39㎝×36㎝を測る。埋土は2層に分層され、ｈ層が柱痕とみられる。形状・規模・埋土から柱穴と考えられる。早期後半（末葉）から前期前半（初頭）と思われる土器が1点出土した。

遺構16　平面形、規模は推測不可能である。埋土は2層に分層され、第2層が柱痕とみられる。埋土から柱穴と考えられる。97号住居址の埋土を切っている。

遺構17　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。

遺構18　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。遺構20と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構19　平面形は円形、規模は23㎝×22㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構20　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。遺構18と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構21　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。

遺構22　平面形は円形、規模は27㎝×23㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。前期前半（前葉：中越式）とみられる土器が1点出土した。

遺構23　平面形は円形、規模は18㎝×17㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構24　平面形は円形、規模は21㎝×17㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構25　平面形は不整円形、45㎝×39㎝を測る。埋土は2層に分層されたが、ｏ層は柱痕と言い難い状態である。しかし形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構26　平面形、規模は推測不可能であるが、大形の遺構である。埋土は2層に分層された。中期後半（曽利式）の土器など2点が出土し、1点を図示した（10）。遺構27を切っている。

遺構27　平面形は楕円形、規模は（40）㎝×30㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。遺構26に切られている。

遺構28　平面形は楕円形、規模は（45）㎝×30㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構29　平面形は円形、規模は61㎝×56㎝を測る。埋土は2層に分層された。柱穴以外の性格も考えられる。中期後半（曽利式）の土器など4 点が出土した。

遺構30　平面形は円形、規模は（75）㎝×70㎝を測る。埋土は1層である。柱穴以外の性格も考えられる。時期不明の土器片が2点出土した。遺構31と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構31　平面形は楕円形、規模は35㎝×（25）㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。遺構30と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構32　平面形は円形、規模は27㎝×25㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構33　平面形は円形、規模は（20）㎝×18㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構34 平面形は楕円形、規模は25㎝×17㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構35 平面形は円形、規模は直径15㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構36　平面形は楕円形、規模は60㎝×（50）㎝と推測される。埋土は1層である。柱穴以外の性格も考えられる。堆積岩または火成岩の石材が1点出土した。

遺構37　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。

遺構38　平面形は楕円形、規模は60㎝×40㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と思われる。

遺構39　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。

遺構40　平面形、規模は推測不可能である。埋土は2層に分層されたが、柱穴と言い難い状態である。早期後半（末葉：条痕文）の土器が1点出土し、これを図示した（11）。

遺構41　平面形は楕円形、規模は25㎝×17㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構42　平面形は円形、規模は直径27㎝と推測される。埋土は2層に分層されが、こ層は柱痕と言い難い状態である。しかし形状・規模から柱穴と考えられる。遺構43と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構43　平面形は円形、規模は直径30㎝と推測される。埋土は1層である。遺構42と重複するが、切り合い関係は不明である。形状・規模から柱穴と考えられる。

遺構44　平面形は円形、規模は38㎝×36㎝を測る。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。遺構45と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構45　平面形は円形、規模は（26）㎝×24㎝と推測される。埋土は1層である。形状・規模から柱穴と考えられる。遺構44と重複するが、切り合い関係は不明である。

遺構46　平面形、規模は推測不可能である。埋土は1層である。柱穴と思われる。

遺構47　平面形は楕円形、規模は31㎝×22㎝を測る。埋土は2層に分層されたが、た層は柱痕と言い難い状態である。しかし形状・規模から柱穴と考えられる。

その他の遺物

遺構内から出土したが、遺構に戻すことのできなかった土器、石器、黒曜石、石材（石器の材料となる堆積岩とその剥片など）が少なからずある。ここでは遺構外（耕作土層を含む）から出土した遺物とともに、石器と黒曜石について記述する。

石器は堆積岩製の石錐？1点、磨製石斧が1点（先端に敲打痕あり）、変成岩製の打製石斧2点、火成岩性の凹石類1点が出土した。黒曜石は402点、861.6ｇが出土した。器種に原石、石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、石鏃未製品、不定形石器がある。なお黒曜石の原石はすべての試掘溝から出土しているが、7号試掘溝から出土した原石は他の試掘溝にくらべて大きなものが多い傾向にある。また7号試掘溝の中でも97号住居址の範囲に集中する様子がうかがえる。12次調査で出土した最も大きな原石（145.3ｇ）も97号住居址の範囲から出土している。

第2節　平成24年度確認調査

調査の概要

史跡範囲の北側に近接する2筆の民有地（5137・5172番地）、約1,600㎡が調査の対象範囲である。ここは扇状地形の中でも奥まった場所であり、大六殿遺跡から南へ伸びる尾根状の台地と、桧沢川に直交する「U」字状に抉れた斜面、および扇状地の一部から地形が構成されている。尾根状の台地は、調査地点の南端付近（国史跡範囲北端）から平坦面の幅を広げ、前期前半と中期後半の竪穴住居址が密集する地点へ続いていく。

台地の平坦面にある畑（5137番地）を「前期調査区」と呼称し、長さ18mから26mの試掘溝を4箇所（1号～4号）設定して、7月から9月に調査を行った。また台地の西側斜面から扇状地扇頂部の一部に広がる畑（5172番地）を「後期調査区」と呼称し、長さ13mから30m（直線距離）の試掘溝を4箇所（5号～8号）設定して、9月から12月に調査を行った。

台地の平坦面

南に4次調査の行われた国史跡範囲が近接し、北に平成11年に調査された大六殿遺跡の調査区が農道を挟んで接している。前者の北端から4軒の中期前半（中葉：藤内式）の竪穴住居址（26号～29号住居址）が、後者の南端から前期後半（末葉）の竪穴住居址と該期の土坑群が検出されている。そのため両調査区に挟まれた台地の平坦面に、前期後半および中期前半の竪穴住居址や土坑の埋蔵が予想された。これらの遺構の有無を明らかにすることが確認調査の目的である。

調査の結果、中期前半（中葉）とみられる3軒の竪穴住居址と4箇所の土坑が確認された。竪穴住居址は平坦面の頂部、またはこれに近い地点に一定の間隔を置き南北に並んでいるが、確認面および埋土出土の土器

を見る限り、1軒が新道式期（99号住居址）、2軒が藤内式期（100号・101号住居址）と考えられる。

新道式期の竪穴住居址は、駒形遺跡において初見となる住居址である。1軒のみであるが、前期から後期まで断続的に集落が営まれた当遺跡の中で、空白となる時期を埋める竪穴住居址として重要な発見となった。

4次調査で確認された藤内式期の竪穴住居址と今回確認された該期の竪穴住居址は、それぞれ至近の位置関係にある。さらに駒形遺跡では、この地点を除き藤内式期の竪穴住居址は確認されていない。したがって該期の集落（住居域）は13次調査区から国史跡範囲北端にかけて、台地平坦面の頂部付近を中心に形成されたとみてよいと思われる。

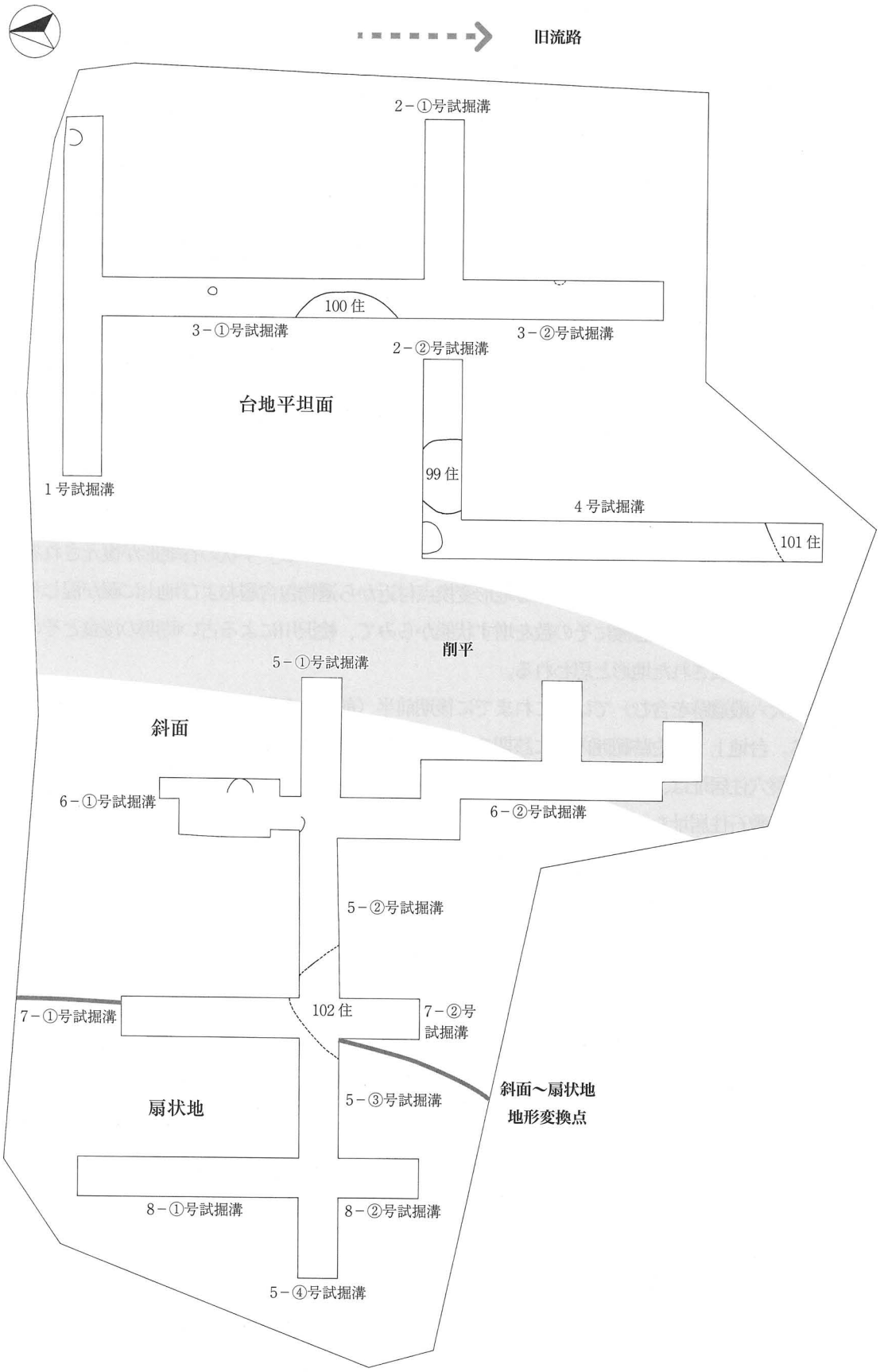
大六殿遺跡の調査において、この遺跡が駒形遺跡の一部であるとの指摘がなされ、本報告書でもこの見解を支持する記述を行ってきたが、こうした点を明らかにすることも調査の目的とした。検出の予想された前期後半の竪穴住居址は確認されなかったが、仮に該期の竪穴住居址が前期調査区内につくられていないとしても、集落が時期によって場所を変えながら営まれるとする駒形遺跡の集落の特徴の中で理解することが可能である。あるいは前期後半の集落範囲が、両遺跡の境界とたまたま一致するだけのことなのかもしれない。

調査対象となった畑は、南北に細長い形状をなし、南へ緩やかに傾斜している。北端部で明黄褐色土層まで削平した小規模な造成が確認されたが、その南側には元の地形を復元するのに十分な土層が保たれていた。その土層断面によれば、大六殿遺跡から駒形遺跡へ元の地形がスムーズにつながっていくとの所見であり、両遺跡の境界付近に地形上の大きな違いを見出すことはできなかった。この点も大六殿遺跡を駒形遺跡の一部とみる根拠である。

最後に発掘地点の標準的な土層についてふれておく。前期調査区の北端から南に下るに従って、黒色土が急激に厚みを増していく。地形の高い北側には耕作による撹乱が地山まで及んでいる箇所もある。しかしながら、ここから外れた地点の土層は台地にしては非常に残りの良い状態にある。前期調査で「標準的な土層」とした地点が、3－②号試掘溝南端のＡ－24－14グリッドの東壁である。これを図化したものが第31図のＢ断面である。以下に概略を記すが、詳細は断面図を参照されたい。

第1層　黒色土層　耕作土層（埋土を含む）
第2層　黒色土層　粒子の細かい「漆黒」の黒色土　縄文時代の地表面を覆う土層
第3層　黒色土層　粒子の細かい褐色を帯びた黒色土　縄文時代後期の遺物包含層？
第4層　黒色土層　縄文時代の遺物包含層
第5層　黒色土層 ～黒褐色土層
第6層　黒褐色土層 ～ 暗褐色土層
第7層　明黄褐色土層（ローム層）

上記の標準的な土層は、国史跡範囲に続くことはもちろんである。さらに後期調査によって、台地の西側斜面から扇状地にかかる付近まで続くことが確認されている。そのために後期調査でも標準的な土層の区分により調査を行った。



第 28 図　平成 24 年度確認調査（13 次調査）試掘溝 配置図・遺構全体図（1/300）

台地の西側斜面から扇状地扇頂部

前期調査時の試掘によって、後期調査区の東側（前期調査と接する土手の下）は明黄褐色土層まで削平されていることが確認されていた。そのため、後期調査区全体が斜面を大きく削る工事によって造成され、その際に遺跡そのものが削り取られたことが考えられた。ところが調査を進めていくと、明黄褐色土層まで削平された範囲が前期調査区に接する土手の下だけであることが確認された。さらに、桧沢川寄りの斜面一帯に、昭和50年代に施工された最大80cmの厚さの盛土（造成土）が確認され、この土の下に縄文時代の遺物を含む黒色土層がよい状態のまま残されていることが判明した。そして、慎重に掘り下げを進めた結果、後期前半（前葉：堀之内式）の敷石住居址（102号住居址）と、該期の可能性がある数箇所の土坑が検出された。

このように遺跡そのものが残っていないと考えられた後期調査区から、縄文時代の遺構および遺物包含層が確認された点が後期調査における最大の成果である。

後期調査でも地形の改変状態を確認するとともに、旧地形の復元を目指して、それぞれの試掘溝において土層断面を詳細に調査・記録してきた。東西方向に設定した5号試掘溝の調査の結果、元の地形は現況地形にみられるような単純な斜面ではなく、台地から調査区の中ほどまで急激に落ち込み、そこから扇状地の扇頂部である緩やかな斜面へ移行することが確認された。また南北方向に設定した6号試掘溝では、地山層および遺物包含層が厚みを増し北へ向かって落ち込む様子が捉えられた。こうした土層の堆積状態を踏まえ、後期調査区とその周辺の旧地形を考えるならば、桧沢川に直交する「U」字状の谷地形が復元される。この谷地形は、台地の斜面から扇状地へ移行する地形変換点付近から遺物包含層および地山に礫が混じり始め、西を流れる桧沢川に向かって急激にその数を増す状態からみて、桧沢川による古い時期の浸食とその後の土砂の堆積によって形成された地形と思われる。

駒形遺跡（大六殿遺跡を含む）では、これまでに後期前半（前葉）の竪穴住居址（敷石住居址）が6軒確認されている。台地上（国史跡範囲内）に該期の可能性のある竪穴住居址が確認されているが、現在知られている該期の竪穴住居址は、いずれも桧沢川に面した台地の西側斜面から扇状地にかけて確認されている。今回確認された敷石住居址も、やはり桧沢川に面した谷地形につくられており、該期の竪穴住居址が西側斜面から扇状地に集中してつくられているとする見解を補強することとなった。

1号試掘溝（第29図）

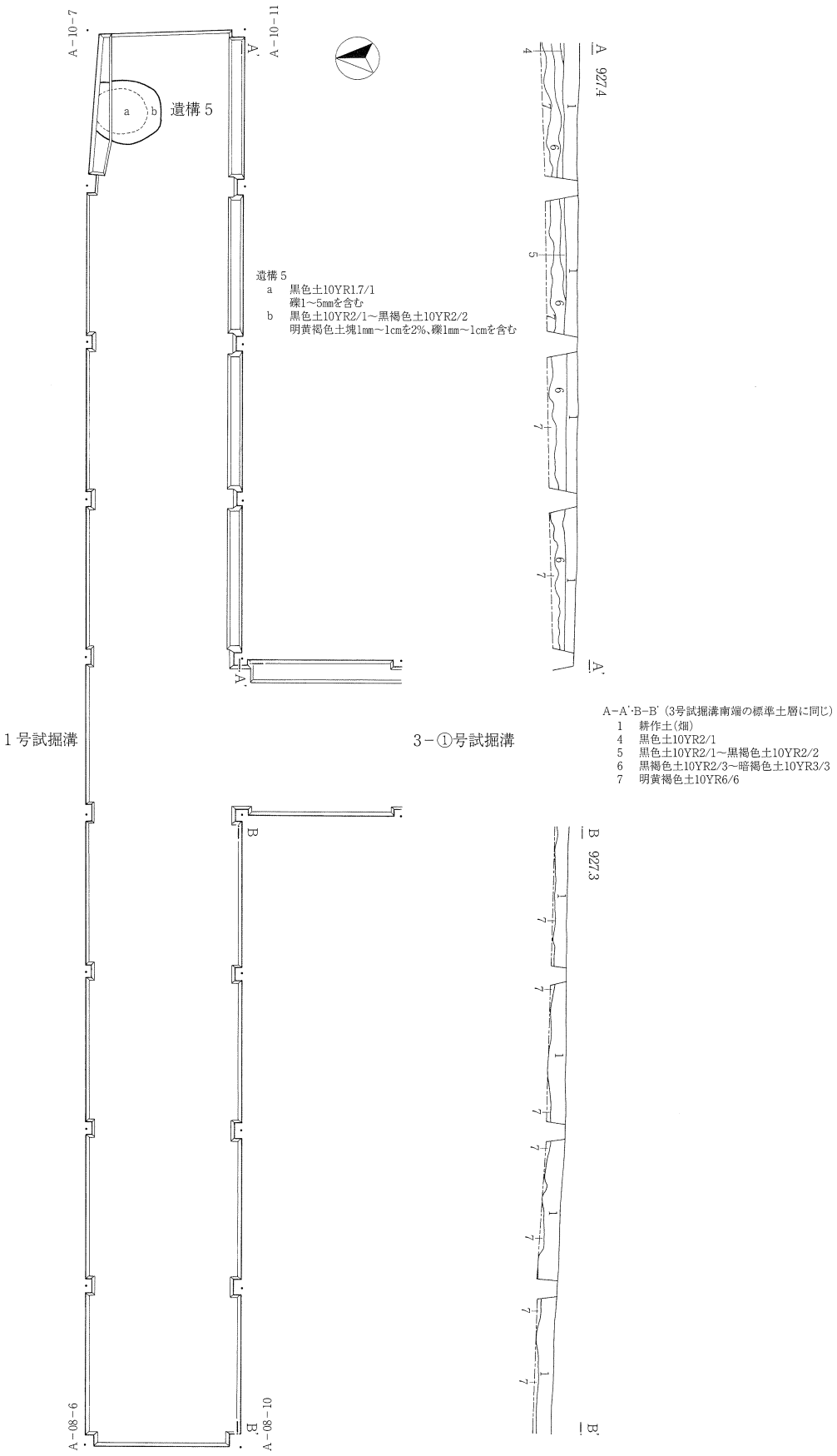
前期調査区の北端に東西に設定した試掘溝で、幅2m、長さ18m、面積36㎡を発掘した。なお南側断面下に幅20cm、長さ8mのサブトレンチを設けている。発掘深度は最も浅い場所で20cm、最も深い場所で45cmとなる。

調査区のほぼ全体が、耕作に伴う攪乱で明黄褐色土層まで削平されているが、東端に耕作土層と異なる黒色土が残されていた。この土はさらに東へ続き、厚さを増していく様子がうかがえた。これに対して西端は明黄褐色土層が露出したまま、後期調査区との境界をなす土手へ続いていきそうであった。こうした土層の状態から、元の台地は今よりも幅の広い、当試掘溝の中ほどを平坦面の頂部とする「馬の背」状の台地であることが確認された。また東へ斜度を増す落ち込みは、台地と明神尾根の裾との間に浅い谷地形が埋没することを示唆した。このような谷地形は4次調査のＥトレンチ東端で確認されたほか、地形図の等高線に見ることができる。この谷地形が第2章第1節で記した、桧沢川の旧流路の名残と考えたものである（第3図）。

調査の結果、東端の北側断面にかかり土坑が確認された。これを遺構5とした。

遺　構・遺　物

遺構5　全体が確認できていないが、（100）cm×80cmの楕円形を呈する土坑である。北側断面下に入る



第29図　1号試掘溝 平面図・断面図 (1/80)

攪乱を除去した結果、埋土が15㎝以上あることが確認された。平面において埋土は2層に分層された。ａ層を柱痕とみることもできるが、その広がりを見る限り柱痕とは考え難い。柱穴以外の、貯蔵穴や墓坑といった性格を考えたい。

なお北に隣接する大六殿遺跡の調査では、円形を基調とする直径100㎝前後の土坑が多数検出されており、その中に墓坑と考えられるものも含まれている。出土した土器の大半が前期後半（末葉）で占められるため、該期の土坑群と捉えられている。

遺構5から時期を示す遺物は出土しなかったが、こうした隣接地での調査結果を踏まえるならば、前期後期（末葉）の土坑群に伴う土坑と考えてよいと思われる。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から黒曜石と石材が出土した。

黒曜石は13点、25.1gが出土した。器種は剥片、砕片、不定形石器である。石材は変成岩の剥片である。

2号試掘溝（第30図）

前期調査区のほぼ中央に東西に設定した試掘溝である。設定にあたっては、移動のための通路を確保する必要から、幅2m、長さ22mの試掘溝の中間を2m開けることとした。そのため東側を2－①号試掘溝、西側を2－②号試掘溝と呼び分けた、長さ10mの試掘溝が2条設定されることとなった。調査では、必要に応じてサブトレンチとグリッド単位の掘り下げを併用した。発掘深度は最も浅い場所で35㎝、最も深い場所で75㎝である。発掘面積は40㎡である。

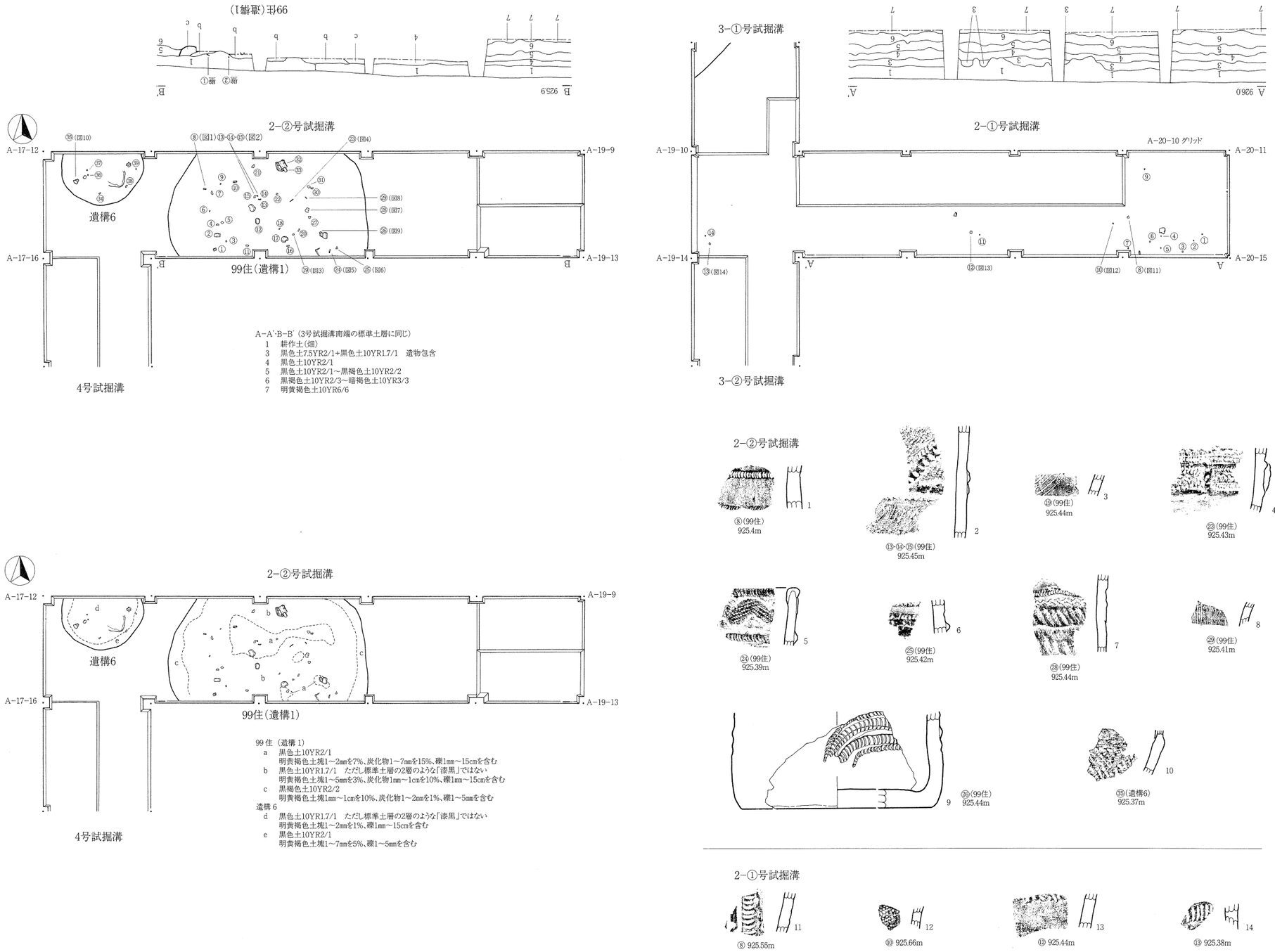
1号試掘溝の調査によって台地の旧地形がおおよそ把握されたが、遺構の有無を確認しながら、台地を横断する微地形の把握を目的として調査を進めることになった。

両試掘溝の耕作土層を除去すると、東側に向かって土層が黒みを増していく様子がとらえられた。これ自体は予想したとおりであったが、台地平坦面の頂部が1号試掘溝の中ほどから3号試掘溝に沿って南下するという予測は外れ、調査区内を北東から南西に向かうことが明らかとなった。さらに東側に落ち込むはずの地形も予想以上に緩やか傾斜を示していた。

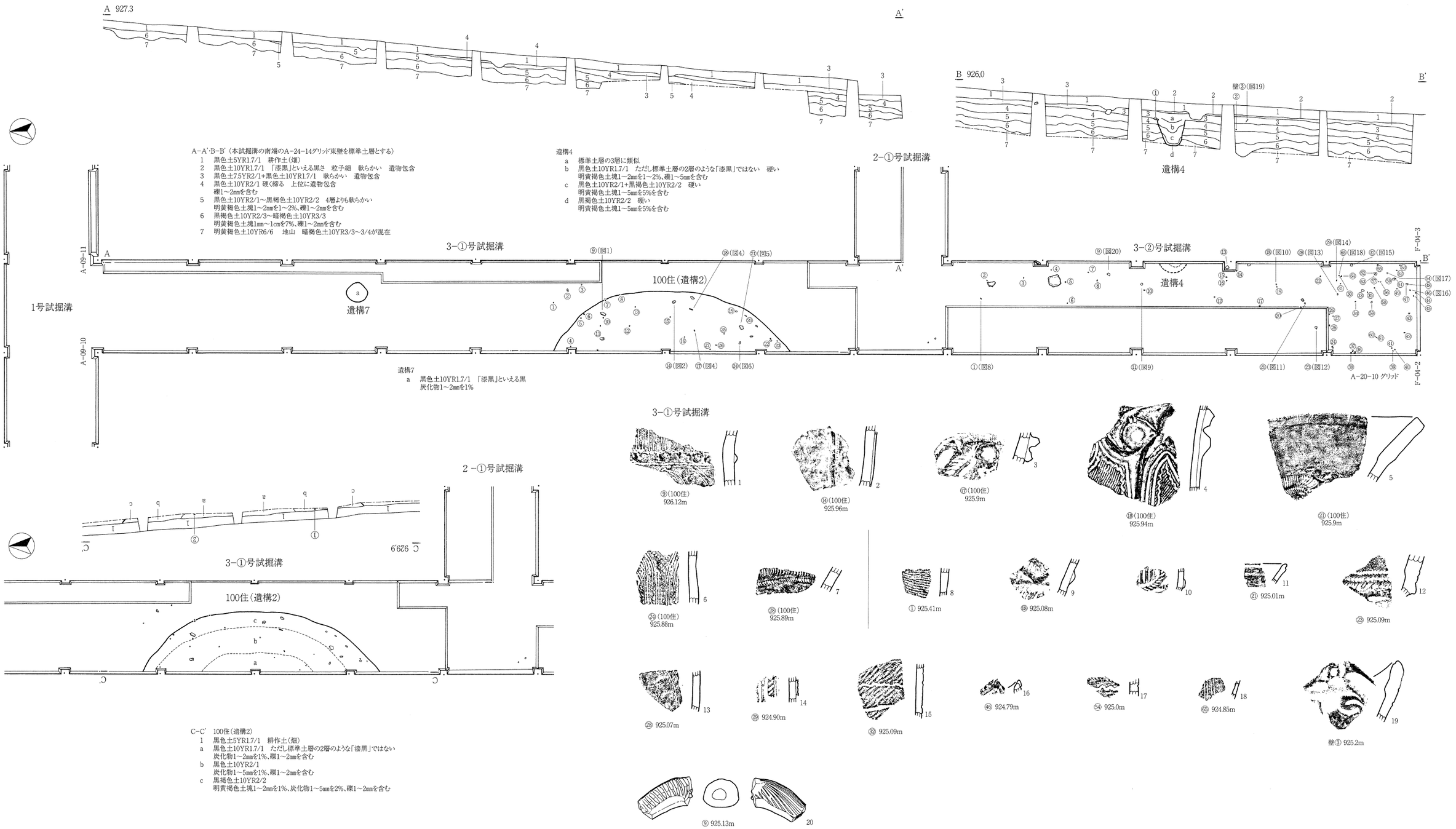
こうして把握された微地形の、台地平坦面の頂部付近から、99号住居址（遺構1）とした竪穴住居址が1軒、縄文時代とみられる遺構6とした土坑が1箇所確認された。これらの遺構は耕作土層の直下、第4層から第5層面で確認された。それ以外の地点は耕作土層の除去の際に第3層の堆積が確認されており、遺構の確認に相当な掘り下げが必要と思われた。そこで南側断面下に幅1mのサブトレンチ、長さ8m（総延長）を設け、Ａ－19－10・Ａ－20－10の2グリッドとともに掘り下げて地下の様子を見ることとした。地山まで掘り下げた結果、第3層および第4層から10数点の土器が出土しただけで、平面と断面にも遺構は確認されなかった。こうした調査結果から、耕作土層の除去に留めていた他の箇所の掘り下げは必要ないと判断した。

遺　構・遺　物

99号住居址（遺構1）　2－②号試掘溝の西側で、台地平坦面の頂部付近から確認された。東西の長さが3.7mの竪穴住居址で、埋土の輪郭から平面形が円形と考えられる。床？から緩やかに立ち上がる18㎝の壁が、土層断面の西端で確認された（Ｂ断面）。この地点の埋土の遺存状態からみて、竪穴住居址全体に30㎝から40㎝ほどの埋土が残っていると考えられる。土層断面で埋土が3層に分層され、これに対応するような線を平面で引くことができている。埋土の主体をなすａ層とｂ層は、大量の炭化物を含んでいる。ａ層は中央付近とその周辺に僅かに残るに過ぎないが、耕作土層に類似する黒色土層であったために、検出作業の際にかなり除去してしまっている。こうしたこともあり、ｂ層を中心に一定量の遺物が出土する結果となった。



第 30 図　2 号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）



第31図 3号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

遺物の中心は30点余りの出土をみた土器である。この中に一辺が20㎝大の大形土器が含まれている。藤内式期まで時期の上がりそうな土器片もみられるが、中心となる時期は新道式である。その中の9点を図示した（1～9）。石器は変成岩製と思われる打製石斧が1点、火成岩製の凹石類が2点出土した。黒曜石は1点、8.2ｇが出土した。器種は石核である。そのほかに変成岩の石材が2点出土した。

主体をなす土器の時期から中期前半新道式期の竪穴住居址と考えられる。

遺構6　2－②号試掘溝の西端、台地平坦面の頂部付近から確認された。99号住居址が東に近接する。約1/2が調査区外となるが、埋土の輪郭から直径150㎝ほどの円形土坑と推測される。耕作土層の直下から30㎝を優に超す板状礫が検出され、本址の存在が確認された。埋土は2層に分層されたが、ｄ層はその広がりから柱痕とは思われない。貯蔵穴または墓坑など柱穴以外の成果を考えるべきであろう。

確認面から土器と黒曜石が少量出土し、位置を記録して取り上げた。文様のある土器が1点あり、これを図化した（10）。黒曜石は2点、5.5ｇが出土した。器種は剥片と両極石器である。

土器の時期がはっきりしないため、時期不明の土坑といわざるを得ない。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器、石器、黒曜石、石材が出土した。

位置を記録して取り上げた土器が10点余りある。中期前半（中葉：新道式・藤内式）を主体とし、早期前半（押型文）がある。その中から4点を図示した（11～14）。石器は堆積岩製または変成岩製の打製石斧2点が出土した。黒曜石は77点、169.6gが出土した。器種は原石、石核、剥片、砕片、両極、石鏃未製品、不定形石器である。石材には堆積岩、変成岩の剥片がある。

3号試掘溝（第31図）

前期調査区のほぼ中央に南北に設定した試掘溝である。2－①号試掘溝と接するグリッドを境とし、北へ16mの範囲を3－①号試掘溝、南へ10mの範囲を3－②号試掘溝と呼び分けた。必要に応じて、サブトレンチとグリッド単位の掘り下げを併用した。発掘深度は最も浅い場所で20㎝、最も深い場所で110㎝となる。発掘面積は32㎡である。

試掘溝の北端が台地平坦面の頂部に位置するが、南下するに従って頂部から東へ外れていく。そのために南下とともに地山の傾斜がきつくなり、同時に黒色土が厚みを増していく。耕作土層の直下に黒色土が残り始める3－①号試掘溝の中ほどから遺構7とした土坑が、そこから南へ下った地点から100号住居址（遺構2）が確認された。さらに南へ下り、標準土層がすべて揃うようになる3－②号試掘溝の東側断面に遺構4とした土坑が確認された。

耕作土層まで掘り下げた後、平面的な調査に先立って、東側断面下に幅30㎝・50㎝・100㎝、長さ約23ｍ（総延長）のサブトレンチを設け、地下の様子を見ることにした。あわせて3－②号試掘溝の南端となるＡ－24－14グリッドも掘り下げることとした。地山を目指して掘り進めた結果、先に記した遺構4が確認された。また3－②号試掘溝の北側に25㎝大の板状の礫、その南約1ｍから土偶の腕の可能性のある遺物が確認され、新たな遺構の存在が示唆された。そこで土器や礫を残した土柱の周囲、および土層断面を慎重に精査したが、積極的に遺構といえるものは確認されなかった。この調査結果により、耕作土層の除去に留めていた他の箇所の掘り下げは必要ないと判断した。

遺　構・遺　物

100号住居址（遺構2）　3－①号試掘溝の西側断面にかかり、第4層面から確認された。南北の長さが5ｍ以上ある竪穴住居址で、埋土の輪郭から円形か楕円形の平面形が推測される。土層断面で緩やかに立ち上

がる10㎝前後の壁が、それぞれ南と北で確認された。土層断面で埋土が3層に分層されたが、これに対応するような線を平面で引くことができている。その状態は同心円状である。

確認面から土器、黒曜石が出土し、位置を記録して取り上げた。その数は20点余りある。遺物の中心は土器であり、藤内式期（併行期）が大半を占める。その中の7点を図示した（1～7）。黒曜石は6点、35.4ｇが出土した。器種は原石、剥片、砕片、両極石器である。

中心となる土器の時期から中期前半藤内式期の竪穴住居址と考えられる。

遺構4　3－②号試掘溝のほぼ中央、東側断面にかかり確認された。断面にみられる立ち上がりと、平面に残る僅かな埋土から土坑と認定した。断面で第4層を切り、第3層との層界まで立ち上がることが確認されている。その高さ（深さ）は55㎝である。断面形が筒状で、上面形が60㎝、底面形が30㎝である。柱穴を思わせる形状であるが、柱痕は確認されていない。埋土はレンズ状に4層に分層された。

埋土の最上位から、胎土から後期とも考えられる無文の土器が出土した。

時期の特定はできないが、埋土の土色や締まり具合などからみて、縄文時代の土坑でよいと思われる。

遺構7　3－①号試掘溝の中央やや北寄り、第6層面から検出された。直径45㎝の不整な円形である。土色が「漆黒」といえる黒色土であり、確認当初は撹乱を疑ったが、締まりのある埋土であるため土坑と認定した。

遺物が出土していないため時期は不明である。

その他の遺物

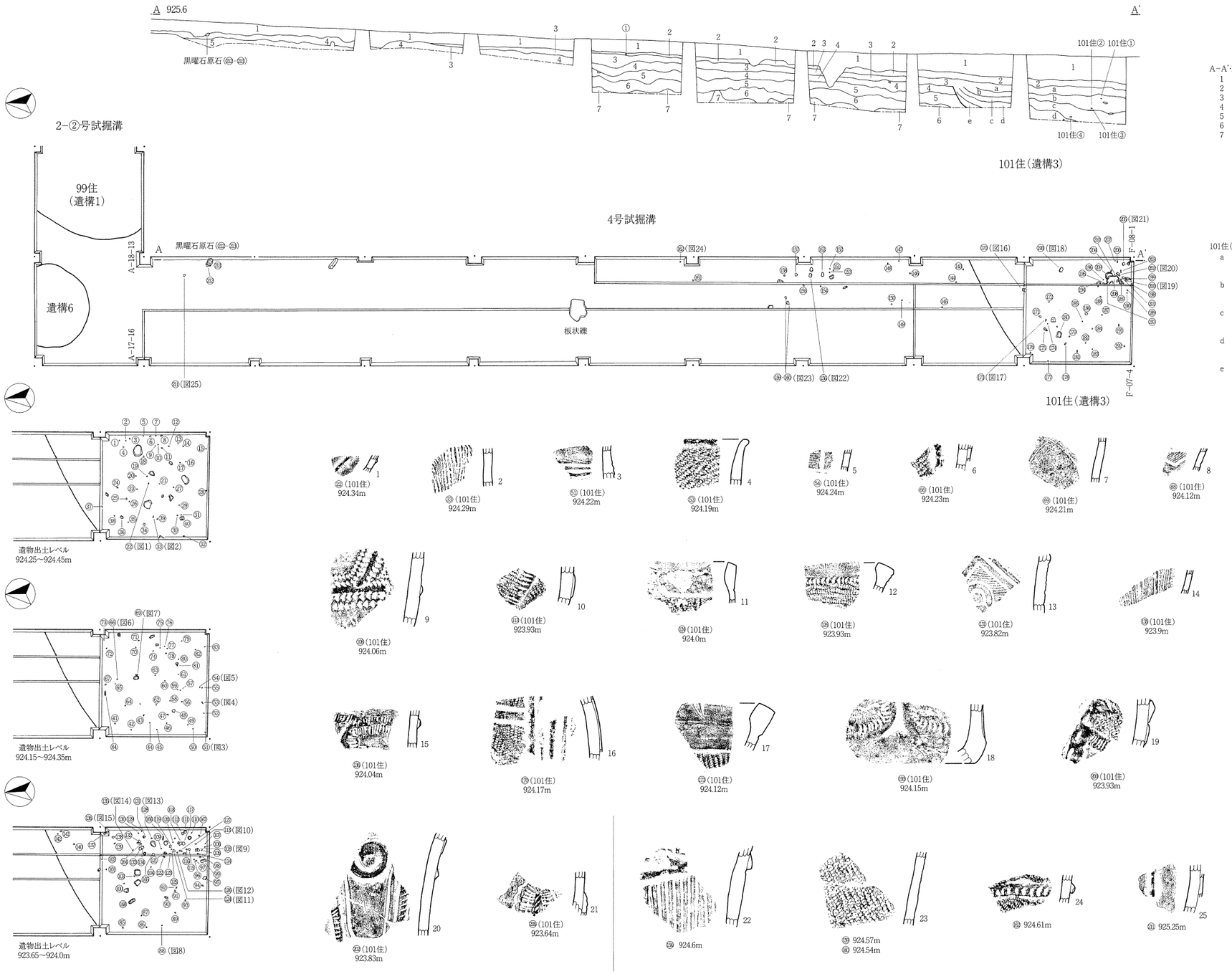
遺構外（耕作土層を含む）から土器、石器、黒曜石、石材が出土した。

3－②号試掘溝を中心に60点余りの遺物が出土し、位置を記録して取り上げた。その大半を占めるのが土器である。中期前半（中葉：新道式・藤内式）を主体とし、早期後半（末葉）から前期前半（初頭）、後期前半（前葉：堀之内式）が少量出土した。その中の12点を図示した（8～19）。土偶の腕とみられる遺物（20）は、他の遺物より低い第5層に相当する位置から出土した。標準土層において第5層は無遺物層とされ、他の地点でもこの層から遺物の出土は報告されていない。第5層付近で止まる浅い穴を見落とした可能性も否定できない。石器は堆積岩製または変成岩製の打製石斧が2点出土した。黒曜石は49点、70.6gが出土した。器種は石核、剥片、両極石器、石鏃未製品がある。石材には堆積岩の剥片がある。

4号試掘溝（第32図）

前期調査区の南側に南北に設定した試掘溝である。北端が2－②号試掘溝の西端と連結する。幅2m、長さ18m、発掘面積は36㎡である。必要に応じてサブトレンチとグリッド単位の掘り下げを併用した。発掘深度は最も浅い場所で15㎝、最も深い場所で120㎝となる。

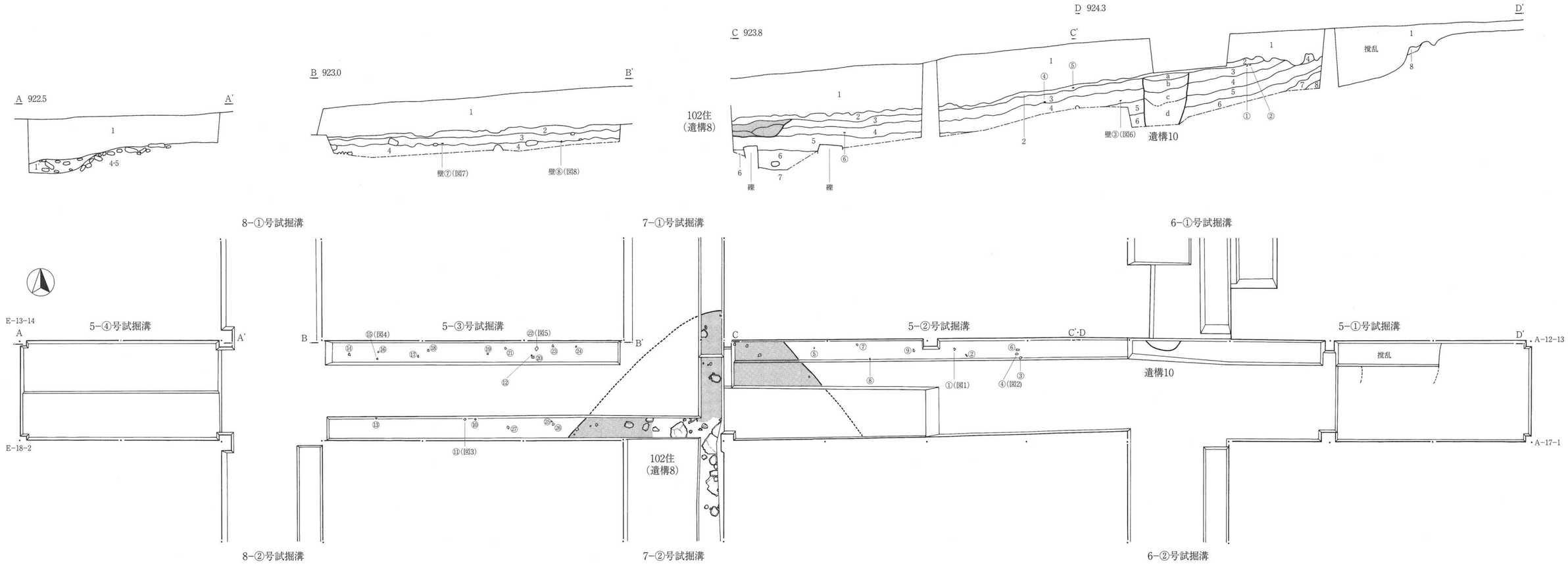
試掘溝の北端が台地平坦面の頂部に位置しており、耕作土層を除去すると直ちに第4層もしくは第5層が露出する状態である。ここから南下するに従い地山が斜度を増し、黒色土層の堆積も厚くなっていく。黒色土層の残りが最もよい試掘溝の南端では、耕作土層の除去段階から他の地点より多くの遺物が出土していた。このため試掘溝南端のＦ－02－16グリッドを平面的に掘り下げるとともに、これにつながる幅100㎝のサブトレンチを東側断面下に設定して、地下の様子をみることにした。その結果、同グリッドから竪穴住居址を確認した。これを101号住居址とした。グリッド内に埋土の切れ目がなさそうなことから、グリッドが遺構内にすっぽり入ることが考えられた。そこで北側への広がりを把握するために、サブトレンチの幅を50㎝に狭め、平面ではっきり確認できる面まで掘り下げた。その結果、北に接するＦ－02－12グリッドの中ほどに北東－南西の立ち上がりを確認した。その確認面と同じ深さで北に向かって掘り進めたが、土器・黒曜石な

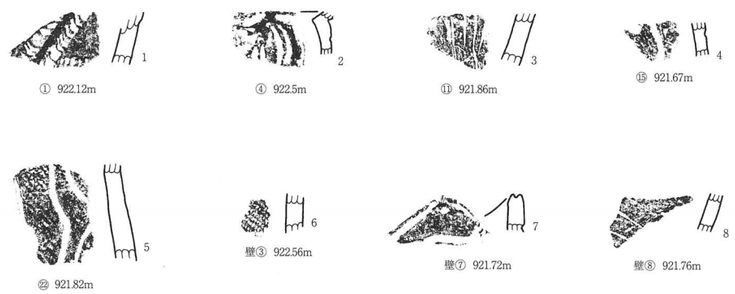


A-A'・B-B'(3号試掘溝南端の標準土層に同じ)
1 黒色±5YR1.7/1 耕作土(畑)
2 黒色±10YR1.7/1 「漆黒」といえる黒さ 粒子細 軟らかい 遺物包含
3 黒色±7.5YR2/1+黒色±10YR1.7/1 軟らかい 遺物包含
4 黒色±10YR2/1 硬く締る 上位に遺物包含
5 黒色±10YR2/1～黒褐色±10YR2/2 4層よりも軟らかい
6 黒褐色±10YR2/3～暗褐色±10YR3/3
7 明黄褐色±10YR6/6 暗褐色±10YR3/3～3/4が混在

101住(遺構3)
a 黒色±7.5YR1.7/1+黒褐色±10YR2/2
標準土層の3層に類似 住居址埋土
炭化物1～5mmを1%、礫1～5mmを含む
b 黒色±10YR2/1～黒褐色±10YR2/2
明黄褐色土塊1～2mmを1%、炭化物1mm～1cmを10%(材・種子)、
骨片1mm、礫1mm～10cmを含む
c 黒褐色±10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10%、炭化物1mm～1cmを5%(材・種子)、
焼土塊1～5mmを3%、礫1mm～10cmを含む (いずれも南側に多い)
d 黒褐色±10YR2/2 硬い
明黄褐色土塊1mm～1cmを10～15%、炭化物1～5mmを3%、
焼土塊1mm～1cmを10%、礫1mm～15cmを含む (いずれも南側に多い)
e 黒褐色±10YR2/3 硬い
明黄褐色土塊1mm～5cmを25%、礫1mm～5cmを含む

第32図 4号試掘溝 平面図・断面図(1/80)、出土土器(1/4)





A-A'(5-④)　3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1　耕作土(畑)+造成土
1'　砂礫（S50年代の水路に伴う堆積物）
4·5　黒色(砂質)土10YR1.7/1　本層の下に6層が薄く堆積
明黄褐色土塊1～2mmを2%、礫1mm～30cmを大量に含む

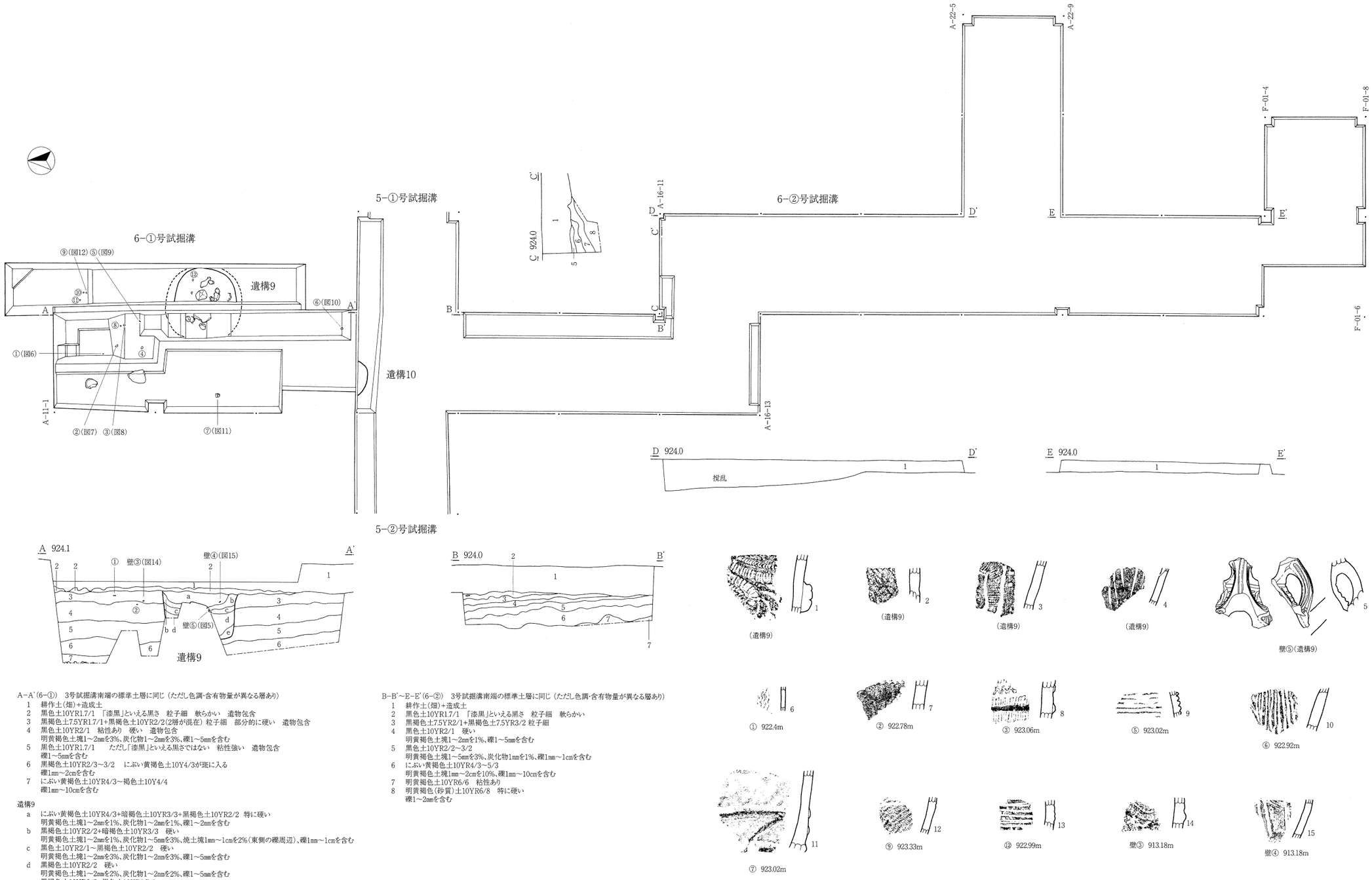
B-B'(5-③)　3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1　耕作土(畑)+造成土
2　黒色土10YR1.7/1　「漆黒」といえる黒さをさらに増す　粒子細　軟らかい　遺物包含
礫1mm～5cmを含む（南側ほど多い）
3　黒褐色土10YR2/2+黒色土10YR1.7/1　粒子細　部分的に硬い　南側ほど層厚が薄い　遺物包含
礫1mm～10cmを含む（南側ほど多い）
4　黒色(砂質)土10YR1.7/1　上位に遺物包含
礫1mm～20cmを大量に含む

C-C'(5-②)　3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1　耕作土(畑)+造成土
2　黒色土10YR1.7/1　「漆黒」といえる黒さ　粒子細　軟らかい　遺物包含
3　黒褐色土7.5YR2/1+黒褐色土10YR3/1(2層も混在) 粒子細　部分的に硬い　遺物包含
4　黒色土10YR2/1　特に硬い　遺物包含
明黄褐色土塊1～2mmを2%、礫1mm～2cmを含む
5　黒色土10YR2/1　4層より軟らかい　下位に暗褐色土10Y3/3～3/4の塊あり
6　黒褐色土10YR2/3～3/2　にぶい黄褐色土10Y4/3が斑に入る
礫1mm～40cmを含む
7　にぶい黄褐色土10YR4/3

D-D'(5-①)　3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1　耕作土(畑)+造成土
2　黒色土10YR1.7/1　「漆黒」といえる黒さ　粒子細　軟らかい　遺物包含
3　黒褐色土7.5YR2/1+黒褐色土7.5YR3/2 粒子細
4　黒色土10YR2/1　硬い　遺物包含
明黄褐色土塊1～2mmを1%、礫1～5mmを含む
5　黒色土10YR2/2～3/2
明黄褐色土塊1～5mmを3%、礫1mm～1cmを含む
6　にぶい黄褐色土10YR4/3～5/3
明黄褐色土塊1mm～2cmを10%
7　明黄褐色土10YR6/6　粘性あり
8　明黄褐色(砂質)土10YR6/8　特に硬い

遺構10
a　黒色土10YR1.7/1
b　黒色土7.5YR1.7/1+黒褐色土10YR2/2　硬い
炭化物1mmを1%、礫1～2mmを含む
c　黒色土10YR2/1　粘性あり　硬い
明黄褐色土塊1～2mmを2%、炭化物1～2mmを2%、礫1～5mmを含む
d　黒色土10YR1.7/1　軟らかい
明黄褐色土塊1～5mmを3%、炭化物1～2mmを2%、礫1～2mmを含む

第33図　5号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）



第34図　6号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

どの遺物が第3層および第4層から10点ほど出土しただけであった。平面および断面で遺構のないことが確認されたため、試掘溝の中ほどで掘り下げを止めた。一方、2－②号試掘溝まで通した幅100㎝（一部50㎝）のサブトレンチは、北側で第5層、南側で第3層まで掘り下げが進んでいた。F－02－16グリッド（101号住居址）のような遺物の集中地点は確認されず、竪穴住居址規模の遺構は存在しないと考えられた。そのため耕作土層の除去に留めておいた西側の幅100㎝の面は、これ以上掘り下げる必要がないと判断した。なお試掘溝北端の東側断面にかかり、重さが1043.2ｇある直方体に近い黒曜石の原石が、長辺を上にして立てたような状態で出土した。耕作土層の直下にあったため、上端部に耕作による破損の痕跡がみられる。原石の下端は、層位でいえば第4層にあるが、耕作土層内に含まれていた可能性もある。また第4層に密着もしくは食い込んでいたのか、あるいは浅い掘り込みを伴ったのかなどについての調査も進めたが、どれも明らかにできなかった。遺存状態に着目するならば、耕作によって動かされた可能性は低いように思われる。

101号住居址（遺構3）　埋土の輪郭からみて、平面形は円形もしくは楕円形のどちらかと考えられる。規模は推測不可能である。土層断面によると、壁は第5層を切るように緩やかに立ち上がった後、不明瞭ではあるが第3層付近まで立ち上がるようである。遺構確認のために深く掘り下げたため、埋土は厚さが最大で65㎝を測る。5層に分層され、各層はレンズ状に堆積する。ａ層は土色が第5層に類似し、最後まで分層してよいものか判断に迷った土層である。またｂ層には炭化物、ｃ層にはローム塊・焼土塊が多数含まれている。ｂ層およびｃ層には拳大までの礫が含まれており、礫の集中する地点から土器の底部や土器片が折り重なって出土した。

埋土を深く掘り下げたこともあり、土器、石器、黒曜石、石材の遺物が多数出土した。土器を中心に、位置を記録して取り上げた遺物は約180点を超える。時期のわかる土器に、中期前半（中葉：新道式・藤内式）、後期前半（前葉）があり、前者が圧倒的多数を占める。この中の21点を図示した（1～21）。F－02－16グリッドでは、第3層付近から4回に分けて垂直方向に遺物を取り上げている。上位にある土器ほど小さく、磨滅の顕著なものが多いことが確認されている。石器は堆積岩製の磨製石斧が1点、変成岩製の打製石斧が1点、凹石類が2点、堆積岩製の不定形石器が2点出土した。黒曜石は94点、268.6ｇが出土した。器種は原石、剥片、砕片、両極石器、石鏃未製品、不定形石器である。石材には変成岩または堆積岩の剥片がある。

出土した土器の時期からみて、中期前半藤内式期の竪穴住居址と考えられる。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器、黒曜石、石材が出土した。位置を記録して取り上げた遺物が20点余りある。土器が大半を占め、中期前半（中葉：藤内式）と後期とみられるものがある。その中の4点を図示した（22～25）。黒曜石は87点、159gが出土した。器種は石核、剥片、砕片、両極石器、石鏃、不定形石器である。石材には火成岩、変成岩の剥片がある。

5号試掘溝（第33図）

後期調査区のほぼ中央、斜面に対し東西（直交）に設定した試掘溝である。幅2m、長さ30m、発掘面積は60㎡である。6号・7号・8号試掘溝との交点を境に、東から5－①号、5－②号、5－③号、5－④号試掘溝と呼び分けた。最も浅い場所で20㎝、最も深い場所（サブトレンチ）で190㎝を発掘した。

昭和50年代に行われた桧沢川の河川改修工事に伴い、後期調査区とした畑の西側約2/3には最大で80㎝の盛土（埋土？）が施されていた。5－②号試掘溝の一部と5－④号試掘溝を除き、埋土をバックホーで除去後、人力による調査に切り替えた。5－①号試掘溝の東端（前期調査区との境となる土手下）は明黄褐色土層または黄褐色土層までしっかり削られているが、西へ向かうとすぐに黒色土層が現れた。5－②号試掘溝の一

部には造成前の耕作土層が残っていたが、他の地点には存在しなかった。どうやら先の造成工事の際に除去された模様である。このような状態にも関わらず、台地上の調査で第2層とした「漆黒」の黒色土層がよい状態で残されていた。そこで幅50㎝から100㎝、長さ31m（総延長）のサブトレンチを北側および南側断面下に設け、遺構の有無、土層の堆積状態を確認した。その結果、6号試掘溝との交点から遺構10とした土坑が、7号試掘溝との交点から102号住居址が確認された。この時点で、サブレンチの全体が第4層とした遺物包含層まで掘り下げられていたが、遺構を除いて土器がまとまって出土した箇所は確認されていない。また部分的に地山まで掘り下げた箇所でも異常は認められなかった。こうした遺物の出土状態と、土層の状態、確認された遺構の立ち上がる位置から、他の地点に竪穴住居址規模の大きな遺構があると考えられなかった。このため、さらなる掘り下げは必要ないと判断した。

もう一つの調査成果として、東西方向の旧地形とそれを形成する土層の堆積状態の把握された点が挙げられる。旧地形の西側斜面が、現況地形にみられるような緩やかな斜面でなく、台地の平坦面から102号住居址付近まで急激に落ち込んだ後、扇状地の扇頂部とした緩やかな斜面へ移行することが確認された。つまり102号住居址付近が台地と扇状地の地形変換点と捉えられたのである。こうした傾斜の違いにあわせて、土層の厚みや礫の入り方にも違いのあることが明らかとなった。台地から地形変換点にかけて、基本的に礫を含まない土層がそれぞれ厚みを増しながら堆積する。一方、地形変換点から西側に向かい各土層が厚みを減じながら礫の数を増していく様子が確認されている。

遺構10　サブトレンチの部分的な深掘りによって確認された。確認面は第6層である。この面に残る埋土の輪郭からみて、平面形は円形となるように思われる。平面規模は80㎝から90㎝といったところであろうか。断面形は壁が直立する「筒形」である。その立ち上がりは第3層を切って第2層に覆われる。埋土は4層に分層された。レンズ状の堆積を示している。

土色および土質を見る限り縄文時代の土坑と考えられる。しかし土器の出土がないために、いつの時期であるかは不明である。

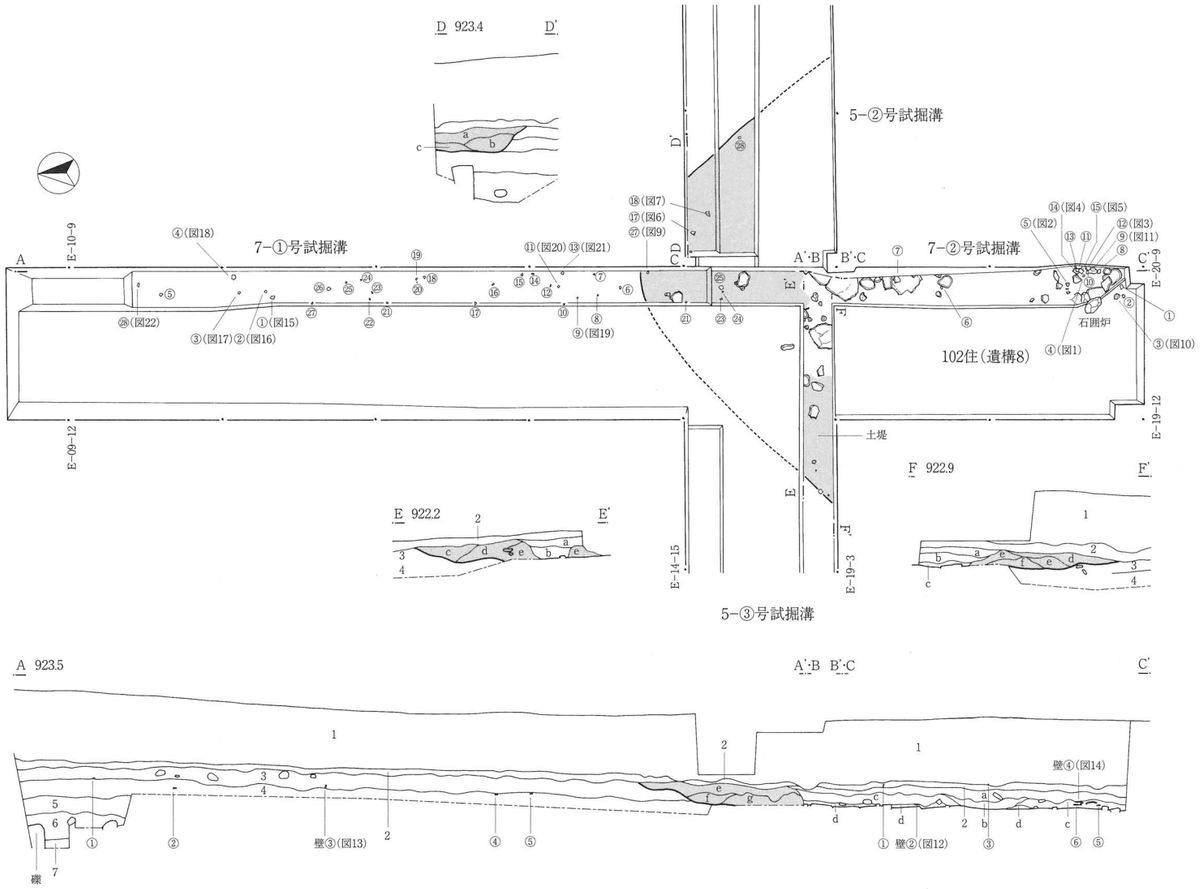
その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器と黒曜石が出土した。これらの遺物は地形変換点付近から5－③号試掘溝にまとまる傾向がある。位置を記録して取り上げた遺物が30点余りあり、その大半が土器である。時期は早期後半（末葉）から前期前半（初頭）、中期前半（中葉：新道式・藤内式）、後期前半（初頭：称名寺式、前葉：堀之内式）などであり、その中の8点を図示した（1～8）。これらの土器はいずれも第3層から第4層に含まれていた。黒曜石は5点、20.6ｇが出土した。器種は原石、砕片、両極石器、石鏃である。

6号試掘溝（第34図）

後期調査区の中ほどで、斜面に沿うように南北に設定した試掘溝である。幅2mから3m、長さ27m（直線距離）、発掘面積は67㎡である。5号試掘溝の交点を境に、北を6－①号試掘溝、南を6－②号試掘溝と呼び分けた。幅が20㎝から100㎝のサブトレンチを併用したほか、6－①号試掘溝の東壁に沿って長さ6m、幅1mを拡張した。平面的な調査範囲を含め、最も浅い場所で20㎝、最も深い場所210㎝を発掘した。

前期調査区との境となる南北方向の土手の下（西側）は、後世の造成で大きく削られ、平坦面となっている。そのこともあって、南に向かう単純な斜面がイメージされた。6－②号試掘溝の南端を掘り下げると、予想どおり耕作土層の下が明黄褐色土層となったが、移植ごてをはね返すくらいの硬さがあり、相当深く削り込まれている様子がうかがわれた。試掘溝の向きが斜面よりやや西に振れているものの、しばらく明黄褐色土層まで削られた面が耕作土層直下に露出するものと予想された。ところが、6－②号試掘溝の中ほどか



A-A'～C-C' 3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1 耕作土(畑)＋造成土
2 黒色土10YR1.7/1 「漆黒」といえる黒さ 粒子細 軟らかい 遺物包含
3 黒褐色土7.5YR2/1+黒褐色土10YR3/1(2層が混在) 粒子細 部分的に硬い 遺物包含
4 黒色土10YR2/1 特に硬い 遺物包含
明黄褐色土塊1～2mmを2%、礫1mm～2cmを含む
5 黒色土10YR2/1 4層より軟らかい 下位に暗褐色土10Y3/3～3/4の塊あり
6 黒褐色土10YR2/3～3/2 にぶい黄褐色土10Y4/3が斑に入る
礫1mm～40cmを含む
7 にぶい黄褐色土10YR4/3

102住(遺構8)
a 黒色土10YR1.7/1+2/1 埋土
b 黒色土10YR2/1 埋土
c 黒色土10YR2/1+黒褐色土10YR2/2 粘性あり 埋土
d 黒色土10YR1.7/1～2/1
炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
e 黒色土10YR1.7/1 硬い 土堤?
礫1mm～1cmを含む
f 黒色土10YR2/1 硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む
g 黒褐色土7.5YR2/1～3/1 粘性あり 特に硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む

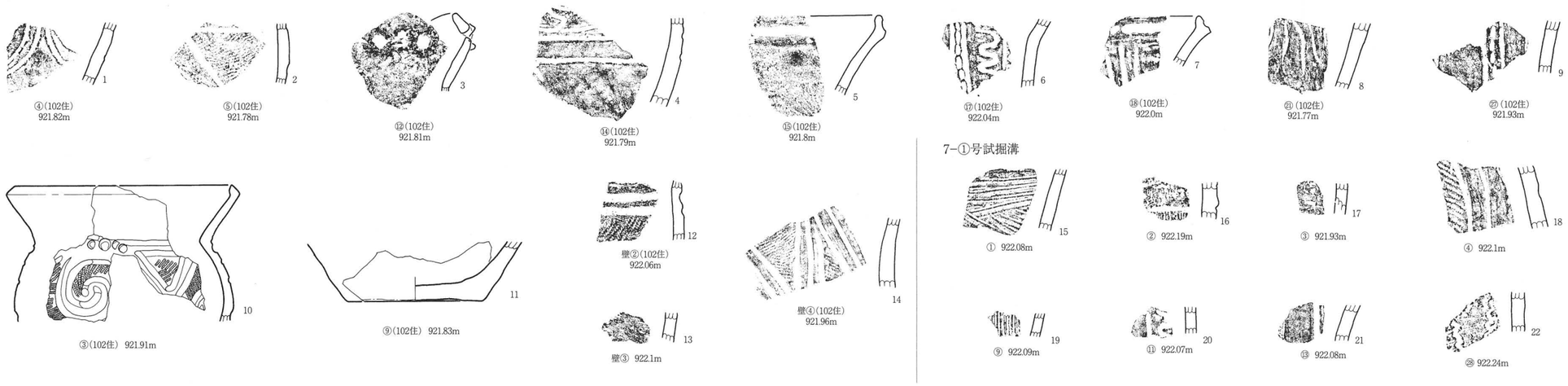
D-D' 102住(遺構8)
a 黒色土10YR1.7/1「漆黒」といえる黒さではない 軟らかい 土堤
b 黒色土10YR2/1 硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む
c 黒褐色土7.5YR2/1～3/1 粘性あり 特に硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む

E-E' 3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
2 黒色土10YR1.7/1 「漆黒」といえる黒さ 粒子細 軟らかい 遺物包含

102住(遺構8)
a 黒色土10YR1.7/1+2/1 埋土
b 黒色土10YR2/1 埋土
c 黒色土10YR1.7/1「漆黒」といえる黒さではない 硬い 土堤?
礫1～3mmを含む
d 黒色土10YR2/1 硬く締まりあり 土堤
礫1～5mmを含む
e 黒褐色土7.5YR2/1～3/1 粘性あり 特に硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む

F-F' 3号試掘溝南端の標準土層に同じ（ただし色調・含有物量が異なる層あり）
1 耕作土(畑)＋造成土
2 黒色土10YR1.7/1 「漆黒」といえる黒さをさらに増す 粒子細 軟らかい 遺物包含
礫1mm～5cmを含む（南側ほど多い）
3 黒褐色土10YR2/2+黒色土10YR1.7/1 粒子細 部分的に硬い 南側ほど層厚が薄い 遺物包含
礫1mm～10cmを含む（南側ほど多い）
4 黒色(砂質)土10YR1.7/1 上位に遺物包含
礫1mm～20cmを大量に含む

102住(遺構8)
a 黒色土10YR1.7/1+2/1 埋土
b 黒色土10YR2/1 埋土
c 黒色土10YR1.7/1～2/1 粘性あり 埋土
炭化物1～5mmを2%、礫1～5mmを含む
d 黒色土10YR1.7/1 「漆黒」といえる黒さではない 軟らかい 土堤?
礫1mm～1cmを含む
e 黒色土10YR2/1 硬い 土堤
礫1～5mmを含む
f 黒褐色土7.5YR2/1～3/1 粘性あり 特に硬い 土堤
礫1mm～1cmを含む



第35図 7号試掘溝 平面図・断面図（1/80）、出土土器（1/4）

ら黒色土が出始め、そこから北側および西側へ急激に厚みを増す状態が確認された。土手下が平らに見えたのは、5号試掘溝との交点付近から厚さを増す昭和50年代の埋土によるものであり、この埋土の下に桧沢川に直交する「U」字状の谷地形の埋没が確認された。試掘溝の中で最も深い谷地形となるのが6－①号試掘溝の北端である。第2層から第7層までの厚さは150㎝を測る。この地点から遺構9とした土坑が確認された。

遺構9　サブトレンチの掘削時に、第3層の下位に相当する位置から板状礫や円礫からなる集石が確認され、遺構の存在が確認された。ただしこの時点では、礫の上面レベルが揃うことから、斜面につくられることの多い敷石住居址の敷石の一部ではないかと考えていた。礫は拳大から人頭大を優に超す大きさのものがある。集石を覆う、また集石が食い込む土層は第3層と似ているものの、にぶい黄褐色土、暗褐色土、黒褐色土が混在するとても硬く締まった土であり、これまで見てきた第3層と同じとするには違和感があった。トレンチの北側を拡張し、サブトレンチを掘り下げるなどして、周囲の平面と断面を念入りに調査した結果、第34図に示した掘方を捉えることができた。これにより第3層に類似する土は土坑の埋土となり、本址が第3層を切る遺構であることが判明した。平面形は円形で、規模は直径150㎝ほどと推測される。断面形は「筒形」で深さが90㎝を測る。埋土は5層に分層され、層全体が硬いこと、下の層ほど黒みが強いなどの特徴が把握された。

埋土から中期前半（中葉：新道式）、中期後半？、後期前半（初頭：称名寺式、前葉：堀之内式）などの10点余りの土器が出土した。位置の記録が有る無しを問わず、5点を図示した（1～5）。その中にある注口土器の把手は板状礫の下から出土した。

出土した土器の時期から、後期前半堀之内式期の土坑と考えられる。

なお遺構9の南西から、第2層に覆われ、第3層に据えられた可能性がある20㎝大と30㎝大の礫が2つ検出された。

その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器と黒曜石が出土した。大半は6－①号試掘溝からの出土である。位置を記録して取り上げた遺物が10点余りあり、その多くが土器である。早期前半（押型文）、中期前半（中葉・新道式）、後期前半（前葉：堀之内式）などがあり、その中の10点を図示した（6～15）。なお早期前半（押型文）の土器は、これまで無遺物層としていた第5層から出土している。黒曜石は5点、17.7ｇが出土した。器種は剥片、砕片、両極石器である。

7号試掘溝（第35図）

後期調査区の西側に南北に設定した試掘溝である。幅2m、長さ15m、発掘面積は30㎡である。5号試掘溝の交点を境に、北を7－①号試掘溝、南を7－②号試掘溝と呼び分けた。必要に応じて、サブトレンチを併用し調査を進めた。発掘深度は最も浅い場所で60㎝、最も深い場所で210㎝となる。

102号住居址　102号住居址とした敷石住居址は、斜面と扇状地扇頂部の地形変換点となる、7号試掘溝と5号試掘溝の交点付近から確認された。発見のきっかけとなったのは、地元米沢小学校の6年生による体験発掘であった。7－②号試掘溝の東側断面下に設けた幅50㎝のサブトレンチの南端を発掘していた女子児童が、後期前半（前葉：堀之内式）の土器片を発見、このことを担当者に報告したことに始まる。翌日担当者が土器の出土地点を掘り下げると礫のまとまりが確認され、その上に折り重なるように遺存する後期前半の土器を確認した。この時点で後期前半の遺構であることを確信し、慎重に北へ向かって掘り下げを進めていった。やがて板状節理の火成岩の平石が発見され、敷石住居址であることが確認された。

敷石住居址は遺構確認面とした第2層面を30㎝から40㎝ほど掘り込み、第3層から第4層内につくられてい

る。確認された掘り込みの位置、敷石と炉の位置関係などから、円形であれば掘方の直径が約9mと推測される。この時期の敷石住居址は斜面の低い側に入口を設ける事例が多いため、炉の南西に入口があると考えられる。敷石は板状節理の火成岩の平石が多用され、中には30cmを超える大きなものがある。敷石のない部分もみられるが、部分的に敷かれたものであろう。おそらく柱穴の内側をめぐるように敷かれるタイプと思われる。南端にある礫のまとまりが炉で、石囲炉と考えられる。敷石の外縁から掘方までの範囲に、敷石や炉を覆う埋土と異なる黒褐色土または暗褐色土が現れた。この土は粘りがあり、硬く締るという特徴があり、明確な高まり（土堤）としてとらえることができた（第35図平面図・断面図の網かけ）。確認された位置が敷石の外縁をめぐるであろう柱穴と重なるため、柱と一体化した壁の下部を補強する構造物である可能性を指摘したい。

本址から土器と黒曜石が出土した。位置を記録して取り上げた遺物が30点余りあるが、その大半は土器である。中期前半（中葉：新道式）、中期後半（曽利式）、後期前半（前葉：堀之内式）などがあり、後期前半が圧倒的多数を占める。その中の14点を図示した（1～14）。黒曜石は2点、5.2ｇが出土した。器種は砕片と両極石器である。

主体をなす土器の時期から、後期前半堀之内式期の敷石住居址と考えられる。

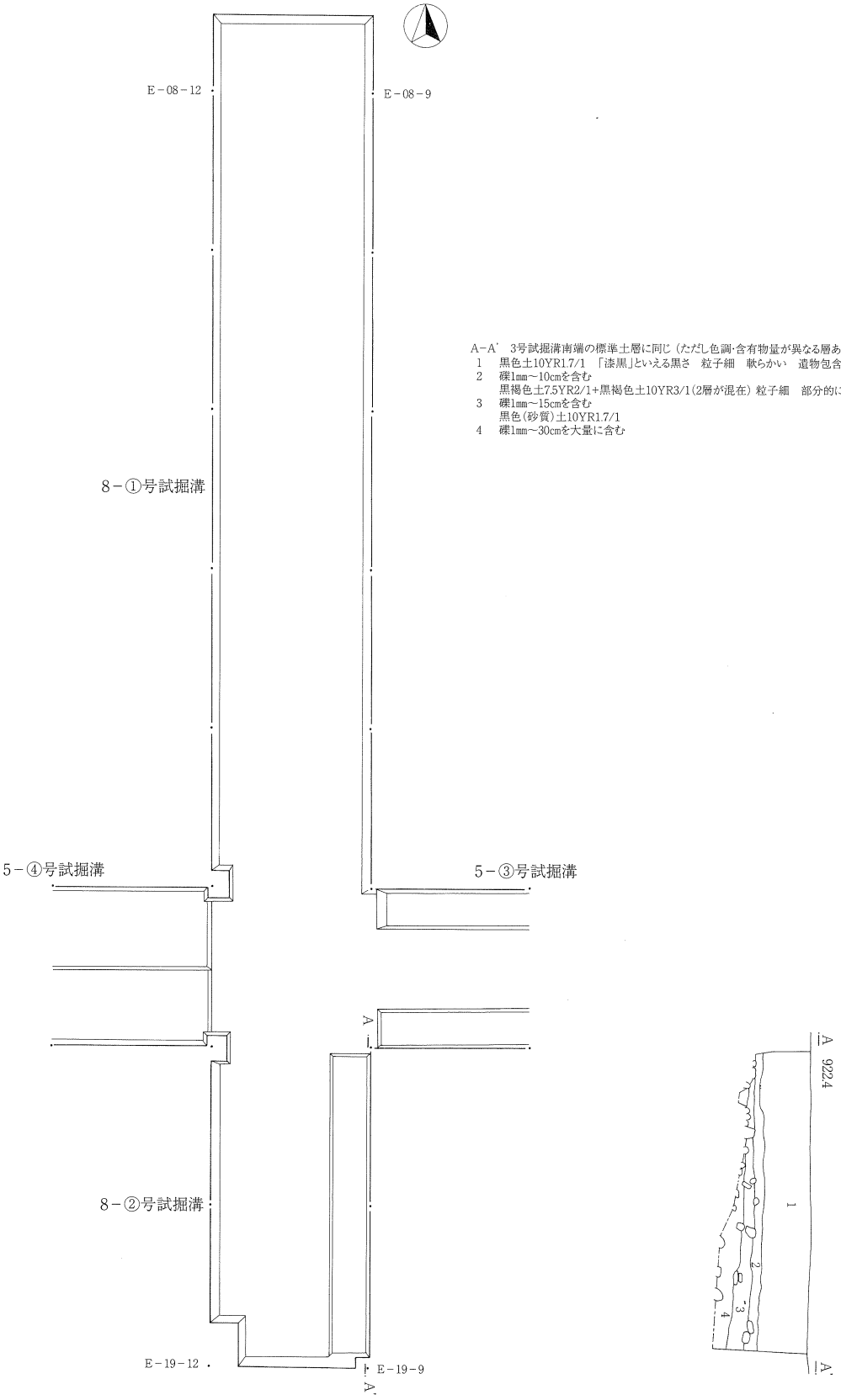
その他の遺物

遺構外（耕作土層を含む）から土器と黒曜石が出土した。その多くが7－①号試掘溝の第3層および第4層から出土している。位置を記録して取り上げた遺物が20点余りあり、その多くが土器である。早期後半（末葉）から前期前半（初頭）、前期後半（末葉：下島式）、中期前半（中葉：新道式・藤内式）、中期後半（曽利式）、後期前半（初頭：称名寺式、前葉：堀之内式）とみられるものがある。その中の8点を図示した（15～22）。黒曜石は1点、0.1ｇが出土した。器種は剥片である。

8号試掘溝（第36図）

後期調査区の西側に南北に設定した試掘溝である。幅2m、長さ15m、発掘面積は30㎡である。必要に応じて、サブトレンチを併用し調査を進めた。発掘深度は最も浅い場所で40cm、最も深い場所で120cmとなる。5号試掘溝の交点を境に、北を8－①号試掘溝、南を8－②号試掘溝と呼び分けた。ただし、8－①号試掘溝を重機で掘り下げたところ、昭和50年代の造成時の掘削が遺物包含層以下に及んでいると考えられたため、人力による掘り下げは行わないこととした。

平面的な調査に先立ち、東側断面下に幅50cm、長さ4mのサブトレンチを設け、地下の様子を確認した。造成土の下に第2層が残るが、この層に拳大までの礫が散見された。第3層になると礫の量が一気に増え、第4層では容易に掘削できないほど多くの礫を含むようになる。これらの層から遺物は出土しなかった。以上から8－②号試掘溝に遺構があるとは考え難い。



第36図 8号試掘溝 平面図・断面図（1/80）

第6章　調査の総括

第1節　桧沢川扇状地の縄文時代遺跡

桧沢川扇状地には左岸に駒形をはじめ、大六殿と大六殿上、右岸に大田苅、菖蒲沢、出ノ脇の各遺跡が所在する。遺跡の範囲・時期・内容、さらに立地する小地形に違いはあるが、これらの各遺跡は桧沢川扇状地という他と画された空間の中で、有機的な関係にあったことは容易に想像される。例えば集落遺跡であるならば、同時に存在した時期もあれば、場所を変えて移り住むような時期もあったであろう。こうしたことが繰り返されて、遺跡群が形成されたのではないかと思われる。

大六殿上遺跡を除く各遺跡では、これまでにほ場整備事業等による発掘調査が行われており、遺跡の概要が把握されている。駒形遺跡は昭和36年の1次調査から平成24年の13次調査まで、時期の不明なものまで含めると、前期前半から後期前半の100軒もの竪穴住居址が確認されたことになる(25号住居址が欠番)。遺跡の立地、集落の範囲および内容から、遺跡群の中で核となる集落遺跡と評価されていることは周知のとおりである。駒形遺跡の北に接する大六殿遺跡は、平成11年の調査において、早期前半から後期前半の竪穴住居址8軒が確認され、その際に駒形遺跡の一部であるとの指摘がなされている。13次調査の結果、地形および縄文集落が切れ目なく続くことが確認されたため、本報告書の中で同じ遺跡と結論づけたところである。また平成11年に調査され、前期後半から後期前半の竪穴住居址13軒が発見された大田苅遺跡は、地形的に分断された場所にあるものの、駒形遺跡および大六殿遺跡から150m余りの位置にあることから、一体となる集落遺跡とみることが可能である。

3つの遺跡で調査または確認された竪穴住居址の位置を、本報告書の時期区分に従って地形図上に記し、その分布範囲（住居域）を括ったものが第37図である。駒形遺跡の集落については、4次調査をまとめた報告書の中で、「時期により場所や構成を変えながら継続して営まれる」とする見解が示されているが（県教委1997）、それ以降、13次調査までに発見された竪穴住居址を加えることで、その様子がより鮮明になったといえるだろう。また現状をみる限り、核となる駒形遺跡に集落が営まれていない時期があることも読み取れる。

あくまで見かけの上での集落範囲および変遷であるが、ここでは3つの遺跡を桧沢川扇状地に営まれた広い意味での縄文集落と捉え、集落の変遷と構造の概略を記すこととする。

第2節　集落の変遷と構造

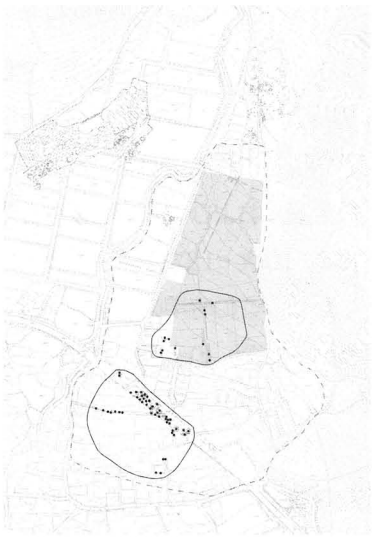
早期前半

草創期の有茎尖頭器が大田苅遺跡から出土しているが、竪穴住居址は確認されていない。

桧沢川扇状地に営まれた集落は、大六殿遺跡から発見された早期前半（中葉：押型文）の1軒の竪穴住居址に始まる。この竪穴住居址は桧沢川扇状地左岸の最も奥まった台地上につくられている。この時期の集落は、山裾に張り付くような立地が推測される。

本報告書をまとめるにあたり、6次調査を除く駒形遺跡出土の土器の多くを実見している。その結果、目にとまった早期前半（押型文）の土器は10点に満たない状態であった。この時期の土器は大田苅遺跡でも出土しているが、点数は少ないようである。

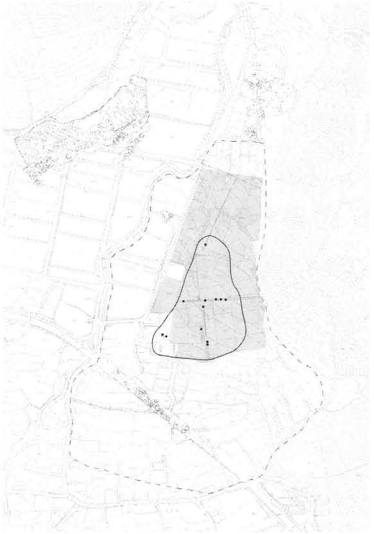
早期前半・後半



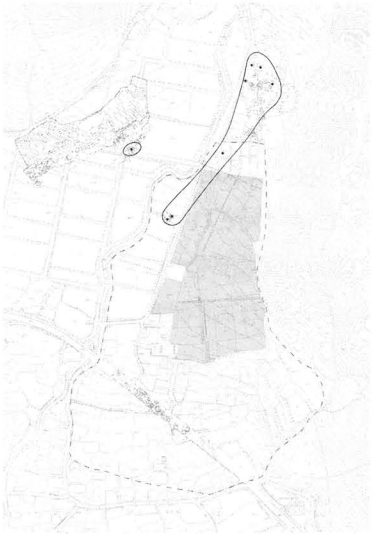
前期前半

前期後半

中期前半



中期後半



後期前半

第 37 図　桧沢川扇状地の時期別集落変遷図

早期後半

12次調査区の1号試掘溝から4号試掘溝（西側）において、後葉とした沈線文土器の破片が20点ほど出土した。この時期の土器は9次調査区（1区）からも数点が出土している。また早期に特徴的な石器とされる特殊磨石が、12次調査区の1号試掘溝と2号試掘溝から14点出土している。以上、12次調査で出土した早期後半の後葉とした土器、および特殊磨石がまとまって出土した試掘溝の範囲を破線で示している。

4次・6次・8次・10次・12次調査で出土した土器の中に、末葉とした条痕文・絡条体圧痕文土器が一定量認められる。しかし、この時期の土器が主体となる竪穴住居址は今のところ確認されていない。

早期後半（後葉～末葉）の土器は、他の2遺跡から出土していないため、駒形遺跡のみに集落が営まれていた可能性がある。台地上ならびに扇状地扇端部に出現する前期前半集落への胎動がうかがわれる。

前期前半

この時期は駒形遺跡のみに竪穴住居址が認められる。集落の最初の繁栄期である。

調査または確認された竪穴住居址数は、全体の約6割となる62軒を数える。国史跡範囲南側の台地の先端に近い平坦面から14軒、台地の先端部から南に約70m、比高約10mの斜面を下った扇状地扇端部から48軒の竪穴住居址が発見されている。立地する小地形に違いはあるが、それぞれの地形の中でより幅の広い平坦面の頂部付近を中心に集落が営まれている。その範囲は台地が140m×100m、扇状地が150m×110mとなる。同等の集落規模に対し、竪穴住居址の密度は扇状地扇端部で濃い状況にある。しかし扇状地扇端部の竪穴住居址数に対する台地上での軒数の少なさは、1次調査を除いて、小規模かつ確認に留める調査（4次・10次調査）であることが大きく影響している可能性がある。加えて12次調査で明らかとなった著しい耕作時の削平により、失われたものも少なからずあるように思われる。したがって両地点の集落は同程度の竪穴住居址数から形成されたと考えておきたい。面積の上で調査が進んでいる扇状地扇端部には、前期前葉の象徴的な遺構である方形柱穴列が竪穴住居址と重複して複数発見されているが、先に記した理由から、この遺構が台地上に存在するかは不明である。こうした集落の構造が同等であるかの解明は、今後の課題である。

扇状地の扇端部で6次調査が行われるまでは、駒形遺跡は「中期（後半）を中心とする縄文集落」であり、前期前半の集落は中期集落の陰に隠れたかの感があった。しかし、6次調査によって、前期前半にほぼ限られる集落が発見され、市内最大の前期前半集落として一躍脚光を浴びることとなった。その際に、台地上の前期集落が扇状地扇端部と別の集落であるのか、あるいは南側斜面に該期の遺構が切れ目なく続き、一体の集落となるかが話題となった。斜面での本格的な調査は行われていないが、3次調査および9次調査（1区）によると、斜面の上位に台地上の集落に伴う可能性のある土坑が発見されたが、竪穴住居址は発見されなかった。また6次調査で扇状地扇端部と台地南側斜面との間を部分的（県道本線への取り付け道路）に調査したが、竪穴住居址は発見されなかった。以上の調査結果と12次調査の結果を考え合せるならば、西側斜面に台地平坦面と扇状地扇端部をつなぐ竪穴住居址がつくられていた可能性は低いと言わざるを得ない。したがって西側斜面を挟む異なる小地形に、2つの前期前半の集落が同時に存在していたと考えられる。

前期後半

前期末葉（下島式期、諸磯C式期）の竪穴住居址が、大六殿遺跡から3軒、大田苅遺跡から10軒発見されている。

大六殿遺跡では「馬の背」状を呈する台地平坦面の頂部付近に、南北に連なるように竪穴住居址がつくられており、前期前半の集落と全く異なる集落の立地をみせる。後葉（諸磯A・B式期）の集落が発見されていないため、どのような経過をたどって桧沢川扇状地の奥まった場所に集落がつくられたかは不明である。

もし断絶期があるのならば、別の集団が新たな場所を切り開いたとの感をも抱かせる。

周辺に平坦面がありながら、このような狭い場所で集落を営む理由とはいかなるものなのだろうか。一つに考えられるのが、集落をつくる上で広い平らな土地が必要とされなかったことである。例えば、前期前半の方形柱穴列のような大きな構造物をつくるには、竪穴住居とある程度の距離を置く必要がある。また平坦部の方が安全かつ作業がしやすくい上、構造物自体も安定するであろう。こうした集落を営む上で必要とされる（考えられる）、最小限の土地が確保できるか否かによって、集落の位置が決められたとする見方は自然なことと思われる。

大田苅遺跡が位置する地形は、遺跡の北にある「丸山」が崩落を繰り返して形成した、山裾にある小さな舌状を呈する台地である。遺跡範囲の一部に埋土による保存地区があり、集落全体の様子は不明であるが、竪穴住居址が舌状台地の平坦面に密集する様子がうかがえる。

大六殿遺跡と大田苅遺跡の前期後半の集落は、上記のとおり異なる小地形に立地している。しかし、見通しのきく小高い場所に立地する共通点があるほか、この2つ集落は桧沢川を挟み東西に相対する位置関係にある。こうした遺跡の立地と位置関係からみて、2つの集落が有機的な関係にあったことが推測される。

中期前半

中期初頭に位置づけられる竪穴住居址は、桧沢川扇状地から発見されていない。僅かに大六殿遺跡から中期初頭の竪穴状遺構が1箇所と該期の土器を含む土坑が2箇所、大田苅遺跡から中期初頭の土器を少量含む前期末葉の竪穴住居址が2軒発見されているだけである。

これに対し中期中葉の竪穴住居址は、駒形遺跡から8軒と大田苅遺跡から2軒のあわせて10軒が発見されている。時期の内訳は、駒形遺跡が新道式期1軒、藤内式期6軒、井戸尻式期1軒、大田苅遺跡が狢沢式期と新道式期がそれぞれ1軒である。駒形遺跡の井戸尻式期の竪穴住居址を除けば、前期後半の集落と同じ場所、または近接する場所から発見されていることとなる。したがって駒形遺跡が藤内式期、大田苅遺跡が新道式期の段階まで、中期初頭の集落（駒形が12次調査区から国史跡範囲北端部の未発掘範囲、大田苅遺跡が埋土保存範囲を想定）を介して集落立地が踏襲されたと考えられる。

前期後半の集落は、桧沢川を挟み東西に向かい合う位置関係にあるが、中期前半になり駒形遺跡の集落が南に下がったことで、2つの集落の距離が縮まることとなる。そして時間の経過とともに竪穴住居址の数が増え、やがて藤内式期の段階となり駒形遺跡内で集落がひとつにまとまり、国史跡の北端部まで集落が南下することとなる。現在、中期後半を含め、大六殿遺跡と大田苅遺跡に藤内式期以降の竪穴住居址は認められない。そのため桧沢川扇状地に営まれた縄文中期集落の一つの画期を藤内式期と考えたい。その時期の竪穴住居址が確認され、不明であった北側への集落の広がりを捉えられた点が、13次調査における中期集落に関するの最大の成果であろう。

井戸尻式期の竪穴住居址は1軒のみである。藤内式期の段階まで台地上方に営まれた集落が、台地の先端部に近い平坦面に大きく移動する。ところで、中期後半の集落は、台地の南側に大規模な集落を形成するが、その構造は環状集落（馬蹄形集落）が推測されている。しばしば環状集落に伴う出現期の竪穴住居址が、あらかじめ住居域の中央に広場を設けることを念頭に置き、構築位置を決めたとも思える事例が報告されている。井戸尻式期の竪穴住居址は、ちょうど12次調査で確認された中期後半集落の西側外縁部に位置するため、中期後半集落と関係があったか否を含めて興味が持たれる。中期後半の集落が環状集落であり、先に記した事例に当てはまるのであれば、環状集落の形成は井戸尻式期の段階に始まったこととなる。

中期後半

駒形遺跡のみ竪穴住居址が確認され、その数は15軒を数える。

この時期は駒形遺跡における2回目の繁栄期であり、台地上に営まれた集落の中で最も広範囲に竪穴住居址がつくられている。集落の南側が前期前半集落の範囲とほぼ重なるが、さらに範囲を北側に広げ、台地南側の平坦面を最大限利用しようとする感じを受ける。その範囲は東西170m、南北130mとなる。

試掘トレンチの関係で北側の様子がはっきりしていないが、竪穴住居址の分布をみる限り、それなりの密度で竪穴住居址がつくられていたとみてよいと思われる。ただし集落の中心部（中央広場？）は台地の幅が最も広い南側に設けられていた可能性が極めて高い。おそらく、ここに直径100mほどの環状集落がつくられていたものと推測される。これが正しいとするならば、棚畑遺跡、中ッ原遺跡、聖石遺跡、長峯遺跡、尖石遺跡などと並ぶ、市内最大級の環状集落となる。また、これまでの発掘調査の積み重ねによれば、中期後半の環状集落に伴う墓坑からは、例外なくヒスイ製またはコハク製の装身具が出土する。こうした遠隔地との交流を示す貴重な遺物が、台地南側の平坦面に眠っている可能性は十分に考えられる。仮に環状集落でないにしても、集落の広がりおよび推測される竪穴住居址数は、市内屈指であることに変わりはない。

後期前半

桧沢川扇状地における縄文集落の最後の時期である。3つの遺跡から、後期前半（前葉：堀之内式、中葉：加曽利Ｂ式）の竪穴住居址があわせて8軒発見されている。その内訳は、駒形遺跡が堀之内式期2軒、堀之内式期から加曽利Ｂ式期1軒、大六殿遺跡が堀之内式期4軒、大田苅遺跡が堀之内式期1軒となる。

竪穴住居址数は早期前半に次いで2番目に少ないが、遺構と遺物の内容、推測される集落の範囲から、3回目の繁栄期に位置づけられる。

後期初頭の称名寺式期とみられる竪穴住居址は、今のところ発見されていない。あわせてこの時期の遺物も他の時期にくらべれば希薄である。そのため台地平坦面の南側に営まれた中期後半の集落は、おそらく称名寺式期へ移行するあたりで解体を迎えたと思われる。その後、堀之内式期に入り3つの遺跡に竪穴住居址がつくられるようになる。

3つの集落は、駒形遺跡が西側斜面に直交する谷地形と桧沢川に沿った扇状地扇央部、大六殿遺跡が西側緩斜面に直交する谷地形、大田苅遺跡が舌状台地の先端部というように、それぞれ異なる微地形に立地する。共通することは、台地上に営まれるにしても、台地上の窪んだ地点、斜面などのより低い場所に立地する点である。このような集落の「低地化」は、後期以降の集落に普遍的にみられ、後期以降に増加する水場遺構との関わりの中で論じられることが多い。桧沢川扇状地の場合、水場遺構やその存在をうかがわせる遺物は見つかっていないが、桧沢川を「水場」とするさまざまな活動が行われ、これと連動して集落の立地が低地化したとみることは可能である。なお駒形遺跡（13次調査）と大六殿遺跡では、西側斜面に直交する谷地形の中に竪穴住居址を設ける事例があり注目される。13次調査での経験談であるが、上川沖積地から吹き上げてくる強い南風は、谷地形の中にいると台地上ほど強風に感じられず、谷地形が風を遮る役目を果すように思われた。こうした現地での経験から、中期末葉以降に進行する気候の寒冷化・湿潤化に対処するために、集落の立地が低下化したと考える視点も必要と思われる。

第3章で記したが、扇状地扇央部で行われた5次調査で、敷石住居跡に近接する20基余りの墓坑が発見され、この中の3基に堀之内式期から加曽利Ｂ式期の「鉢被葬」が認められた（第11・12図）。この時期の墓坑（群）は特定の竪穴住居に付随する現象が知られているが、5次調査の敷石住居址と墓坑のあり方はその好事例である。また8次調査において、5次調査地点の北約50mから堀之内式期の「鉢被葬」のある墓坑が発見され、

付近にこの墓坑を伴う竪穴住居址の存在が考えられた（第14図）。13次調査で発見された敷石住居跡は、この墓坑と約60m離れており、5次調査の事例と同一に扱うことは難しいと思われる。しかし狭い範囲の調査にも関わらず、桧沢川扇状地の左岸において7軒目となる後期前半の敷石住居址が発見された13次調査の結果から、8次調査で発見された墓坑とセットとなる敷石住居址が13次調査区周辺に存在するものと推測される。つまり13次調査によって、敷石住居址と墓坑（＋配石）が組み合わさったこの時期に特有の遺構が、西側斜面から扇状地先端部・扇央部一帯にかけて複数存在する可能性が高まったといえよう。このように後期前半集落の範囲や構造を明らかにする上で、13次調査で確認された敷石住居址は重要な意味をもつ。

なお4次調査において、中期後半の集落に重なり、堀之内式期の配石とこの時期の可能性がある竪穴住居址が発見されている。将来的に後期前半の集落は、中期後半の集落範囲を凌ぐ広がりをみせる可能性がある。

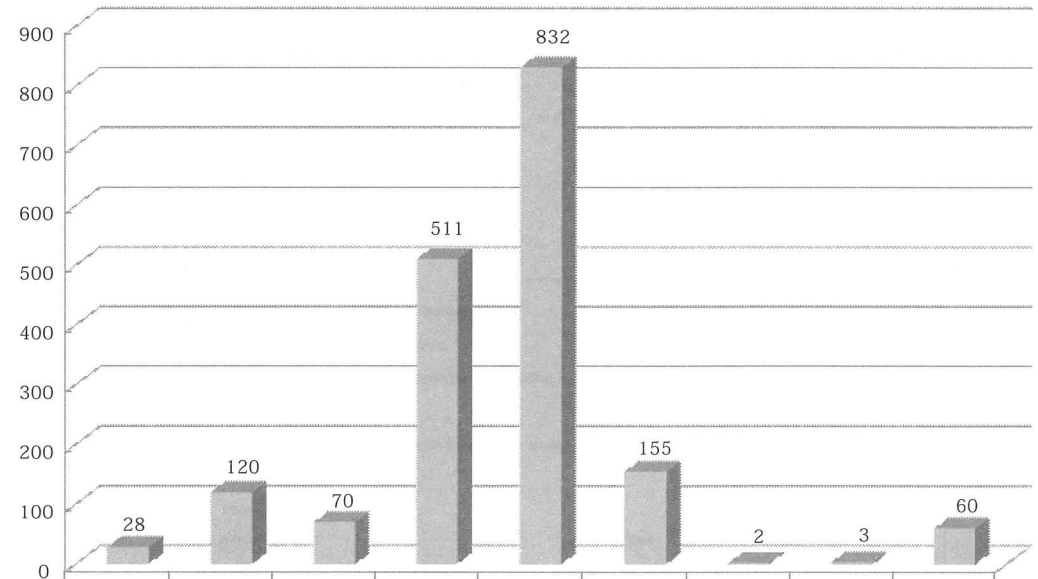
第3節　市域の中での駒形遺跡

駒形遺跡では13次に及ぶ発掘調査等で時期の不明なものを含めて100軒の竪穴住居址が発見されている。駒形遺跡と、遺跡群を形成する大六殿遺跡および大田苅遺跡の竪穴住居址を含めるならば、桧沢川扇状地全体で121軒の竪穴住居址が発見されたこととなる。集落の期間は早期前半から後期前半となる。

まず駒形遺跡の集落には3つの繁栄期を認めることができる。改めてこの概略を記す。

第1の繁栄期は前期前半である。地形の異なる台地平坦部と扇状地扇端部から、あわせて62軒もの竪穴住居址が発見されている。この数は霧ヶ峰南麓・蓼科山麓・八ヶ岳西麓から発見された竪穴住居址数の約1/2にあたる（第5表）。それぞれ100m規模の2つの集落が同時に存在したと考えられるが、未検出の竪穴住居址を合わせるならばその数は2倍を下ることはないと思われる。

第5表　霧ヶ峰南麓・蓼科山麓・八ヶ岳西麓の縄文時代竪穴住居址数



	早期後半	前期前半	前期後半	中期前半	中期後半	後期前半	後期後半	晩期前半	時期不明
軒数	28	120	70	511	832	155	2	3	60

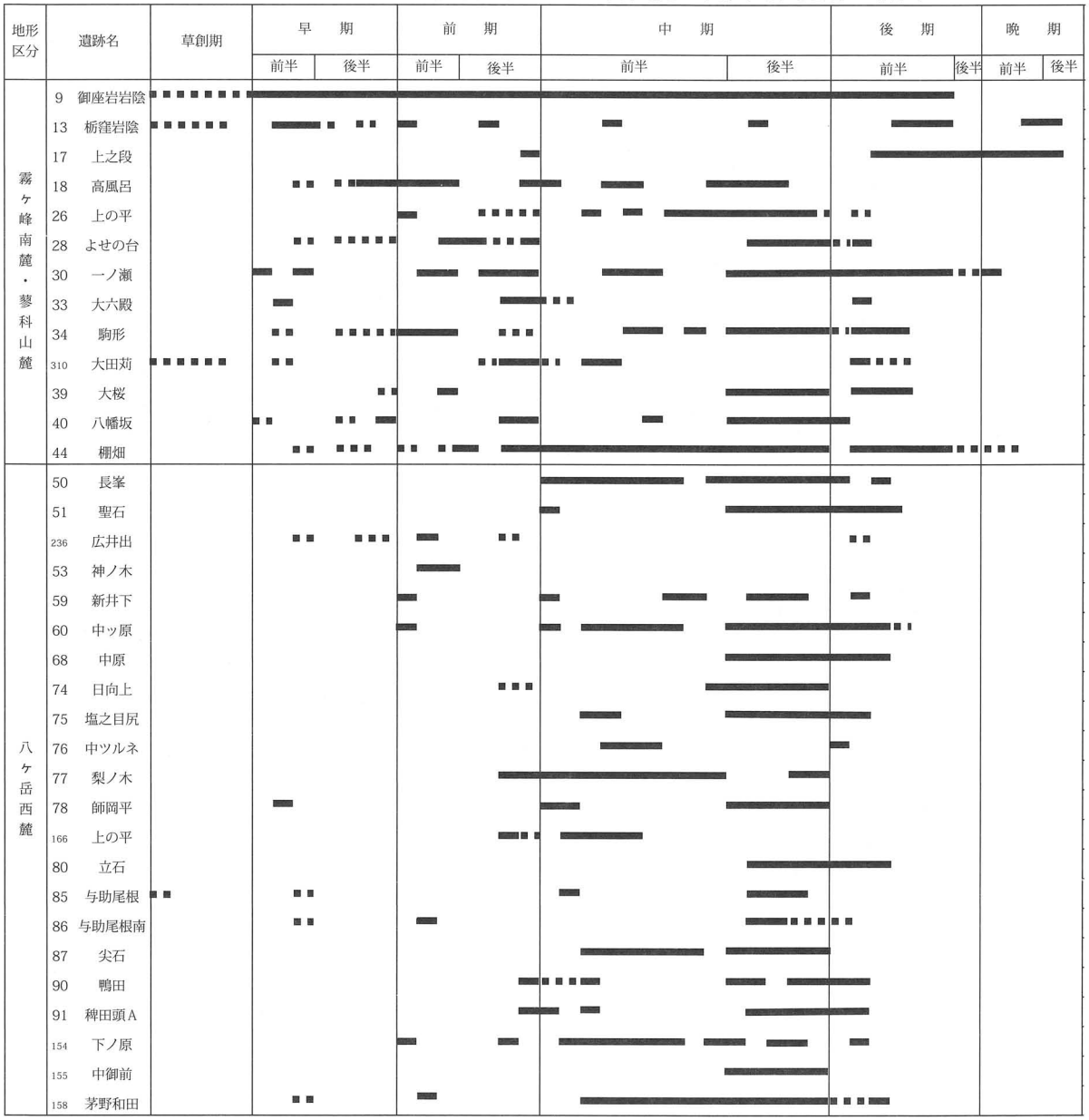
※2006年10月現在
（駒形遺跡のみ13次調査までの竪穴住居址数を含む）

第2の繁栄期とした中期後半では、台地上の前期前半集落と重なるように、やはり100mを優に超える集落の広がりが推測されている。発見された竪穴住居址数は15軒であるが、立地する地形と未検出の竪穴住居址の分布を考え合せるならば、100軒前後の竪穴住居址が見込まれる。

第3の繁栄期は後期前半である。竪穴住居址は僅かに3軒しか発見されていないが、桧沢川に沿った埋土保存範囲やその周辺に多数の竪穴住居址（敷石住居址）があるとみられるほか、国史跡範囲の西側緩斜面一帯にも竪穴住居址の存在が考えられている。

第5表によると、上記の3つの繁栄期は、それぞれの時期を二分した際の多数を占める時期（段階）にあたっている。そして、すべての時期の集落について推測される範囲や内容が、茅野市域で発見された大規模集落と同等か、あるいはそれ以上となる可能性をもつものである。駒形遺跡は茅野市域の縄文集落における盛衰を示す代表的な集落遺跡ということができる。

第6表　霧ヶ峰南麓・蓼科山麓・八ヶ岳西麓の縄文時代遺跡の消長



それでは大六殿遺跡、大田苅遺跡を含め、遺跡群としてみた場合どのようなことがわかるのだろうか。

まず、大六殿遺跡と大田苅遺跡では、早期前半が1軒、前期後半（末葉）が13 軒、中期前半（中葉）が9軒と、数に多寡はあるものの、さまざまな時期の竪穴住居址が発見されている。また前期後葉（諸磯B式）、中期初頭などの駒形遺跡ではっきりしない時期の土器も出土している。こうしたさまざまな時期の遺構や遺物が残された小規模な遺跡が、核となる駒形遺跡と一体となり桧沢川扇状地という地形区分の中で遺跡群を形成し、盛衰を繰り返しながら、あるいは地点を変えながら長期にわたり営まれる姿が捉えられた。これが桧沢川扇状地における縄文集落の特徴である。なお個々の遺跡であっても霧ヶ峰南麓の遺跡は、さまざまな時期の遺構や遺物が残される傾向がある。八ヶ岳西麓の縄文遺跡の継続期間と比較することで、霧ヶ峰南麓の縄文遺跡における継続性の高さをはっきり捉えることができる（第6表）。

駒形遺跡のこうした特徴を生む背景とはいかなるものなのか。先学諸氏らにより言い尽くされたことを繰り返すだけかもしれないが、集落の継続性ついて簡単にふれてみることとする。

まず、桧沢川扇状地一帯が、生活を営む上で食料資源および水資源にめぐまれていたことが挙げられる。前面に上川の沖積地、背後に霧ヶ峰山塊の山裾が迫り、その間を縫うように桧沢川の水量豊富な清冽な水が流れているが、このような変化に富む自然環境が、たくさんの動物・植物・魚類などを育んだことであろう。また上川周辺には、桧沢川・「大清水」水源などの豊富な水資源がある。桧沢川扇状地の前後（南北）は、湿地または山裾であり、生活を営む上で適地とは言いがたい。そのために、扇状地に集落が営まれることとなる。こうして上川から桧沢川の谷筋、明神尾根の尾根筋までの広い空間が「生活地区」として確保されたと考えられる。このことが桧沢川扇状地に限らず、霧ヶ峰南麓の他の扇状地、あるいはテラス状の台地ごとに継続期間の長い拠点的な縄文集落が残された一要因であると思われる。

霧ヶ峰には本州最大の黒曜石原産地があり、桧沢川扇状地から尾根伝い、または沢に沿って北上すれば半日程度でたどり着くことができる。こうした立地を背景に大量の黒曜石が駒形遺跡に運び下され、さかんに石鏃に加工された。また各地に黒曜石を供給するための基地的な役割を果たしたともいわれている。霧ヶ峰南麓にある他の縄文遺跡でも、原石から石器に仕上げるまでの加工工程を示す黒曜石が発見されるため、ぞれぞれの集落が黒曜石の採取から加工、供給に関わっていたする見方がなされている。駒形遺跡から発掘および採集された黒曜石の点数と重量を一覧表に示したが、この数は全体のごく一部に過ぎない（第7表）。これだけみても、自家消費であれ、供給目的であれ、大量の黒曜石が必要とされ、遺跡内に運び込まれている事実から、黒曜石と集落の継続性は少なからず関係があると思われる。

第7表　駒形遺跡出土黒曜石集計表

次	総点数(点)	総重量(g)		次	地点	総点数(点)	総重量(g)		次	地点	総点数(点)	総重量(g)
1次	948	4,404.5		12次	1T	847	1,610.4		13次	1T	13	25.1
3次	67	118.1			2T	735	1,254.0			2T	80	183.3
4次	19,845	27,456.4			3T	667	1,038.2			3T	55	106.0
5次	7,461	8,694.8			4T	551	915.3			4T	182	1,470.9
6次	55,325				5T	125	167.0			5T	5	20.6
7次	142	399.4			6T	199	381.4			6T	5	17.7
8次	7,515	4,716.2			7T	418	953.5			7T	3	5.3
9次	1,162	2,082.2			表採	48	108.6			表採	14	24.9
10次	3,205	4,955.8			小計	3,590	6,428			小計	357	1,853.8
11次	0								総合計		99,617	61,109.6

駒形遺跡の前面に広がる上川の沖積地は、古くから各地の人々や文物、さまざまな情報の行き交う交通路であったと考えられている。東は大門峠を越え、県東部を経て北関東へ、西は杖突峠を越えて伊那谷へ続いている。この交通路と現市街地付近で交差する南北に通じる交通路は、北が諏訪湖盆から松本平、南が山梨方面から南関東へ続いていく。これらのルートを通じて各地に黒曜石が供給されたことは十分に考えられる。また逆にヒスイ製やコハク製の装身具がこの地域にもたらされたのであろう。物だけでなく、人々の往来によってさまざまな情報がもたらされ、この地に集積されていったことは想像に難くない。こうした交通路に面した場所に遺跡が立地することも、遺跡の継続性に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

一方、霧ヶ峰南麓の縄文集落にくらべ八ヶ岳西麓の縄文集落は継続期間が短い。その理由は「資源地区」の十分な確保が難しい上、水が細い、黒曜石の原産地および主要な交通路から外れているとなろうか。国特別史跡の尖石遺跡もその一つとなるが、確かに中期に出現し中期に衰退、消滅を迎えている。黒曜石の出土量を数値で示せなかったが、極めて少ないという。出土量の少なさは、同じ茅野市域であっても尖石遺跡などの八ヶ岳西麓の縄文集落が黒曜石を供給される側であり、採集する側でなかったことを示しているように思われる。その霧ヶ峰南麓と八ヶ岳西麓を区分する地形的な境界は上川流域であったと考えられる。

駒形遺跡は13次調査までで、茅野市を代表する長期にわたる拠点集落として、国史跡にふさわしい遺跡であることを改めて確認することができた。

引用文献一覧

茅野市　1986　『茅野市史』上巻

茅野市　1986　『茅野市史』別巻　自然

長野県教育委員会　1997　『大規模開発事業地内遺跡　ー遺跡詳細分布調査報告書ー　』

長野県埋蔵文化財センター　2007　「駒形遺跡」『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書ー茅野市内ー 』

宮坂虎次　1983　「駒形遺跡　茅野市米沢北大塩」『長野県史』考古資料編　全一巻（二）主要遺跡（南信）長野県史刊行会

宮坂英弐　1961　「縄文早期末の住居址　ー茅野市駒形遺跡出土ー　」

宮坂英弐　1966　『日本考古学年報14』「長野県茅野市駒形遺跡」

米沢考古学クラブ　1973　『古道ー霧ガ峰南部における先史時代の黒耀石運搬ルートと考えられる古道の調査ー』

(1) 3 次調査 調査区現況（南から）

(2) 3 次調査 土坑検出状態（東から）

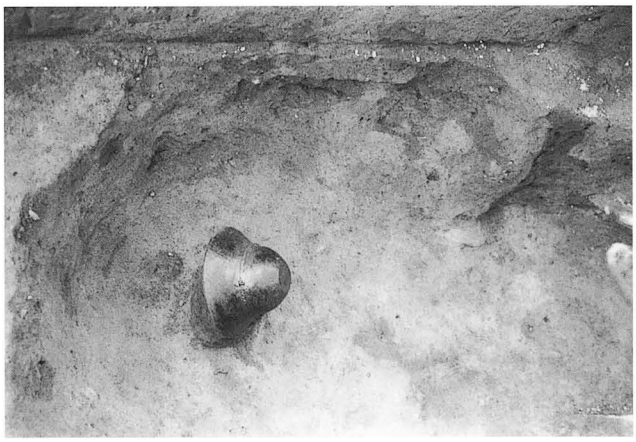
(3) 5 次調査 1 区（南西から）

(4) 5 次調査 1 区 34・35 号住居址（南西から）

(5) 5 次調査 1 区墓坑群（西から）

(6) 5 次調査 1 区黒曜石集中（南から）

(7) 8 次調査 土坑遺物出土状態（南東から）



(8) 8 次調査 土坑遺物出土状態（東から）

図版 2

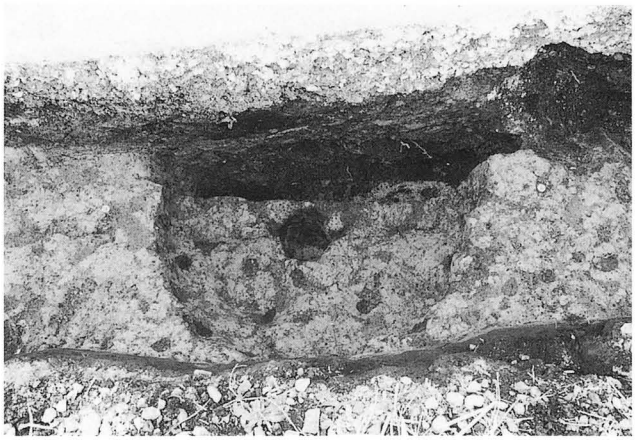
(1)　9 次調査 1 区（北から）

(2)　9 次調査 1 区土坑検出状態（西から）

(3)　9 次調査 2 区（西から）

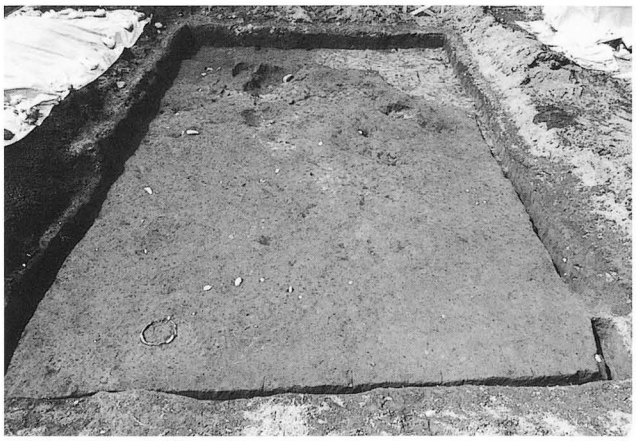
(4)　9 次調査 2 区 79 号住居址（西から）

(5)　9 次調査 3 区（東から）



(6)　9 次調査 3 区土坑検出状態（南から）

(7)　10 次調査 85 号～ 92 号住居址ほか遺構検出状態（西から）



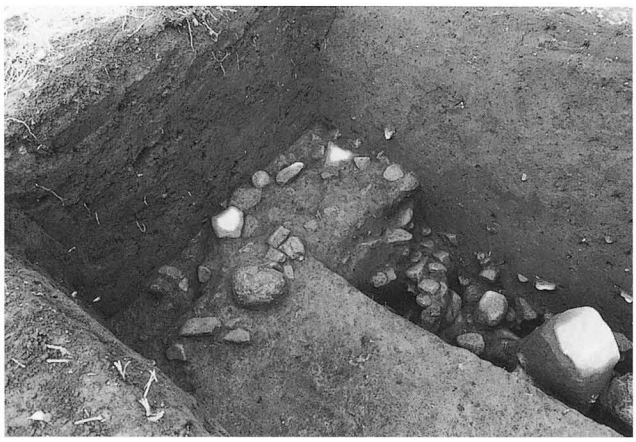
(8)　10 次調査 85 号～ 92 号住居址ほか遺構検出状態（東から）

(1)　調査区（1 号～ 3 号試掘溝）現況（北東から）

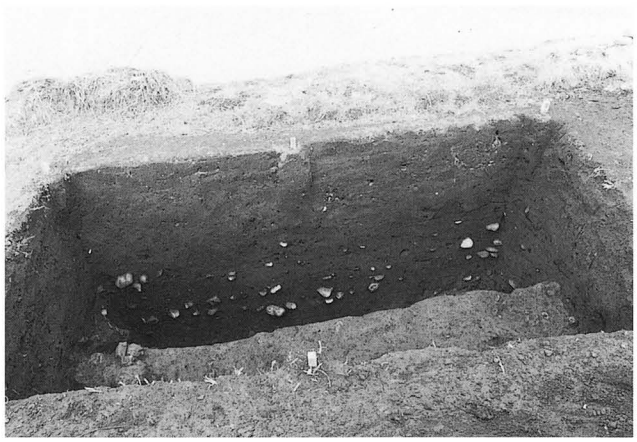
(2)　調査区（4 号～ 7 号試掘溝）現況（東から）

(3)　調査区（1 号～ 4 号試掘溝）全景（南東から）

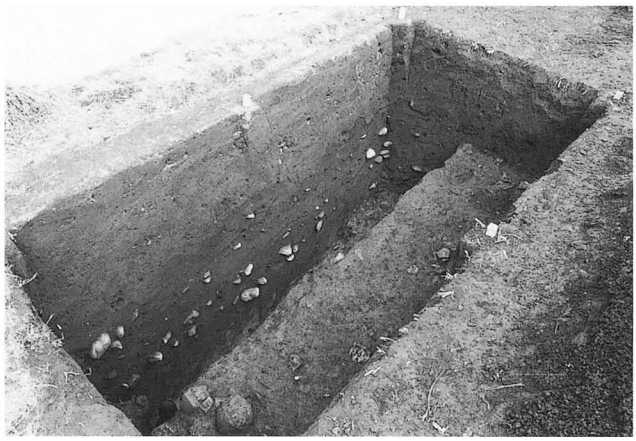
(4)　1 号試掘溝（南から）



(5)　1 号試掘溝 土層断面、遺物出土状態（南東から）



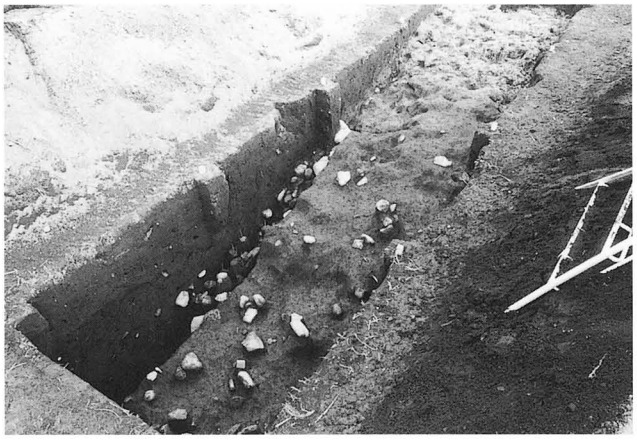
(6)　1 号試掘溝（南から）



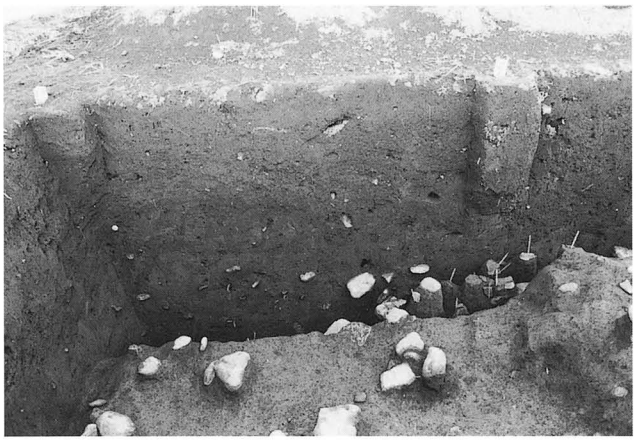
(7)　1 号試掘溝（南西から）

(8)　1 号試掘溝 土層断面、遺物出土状態（南から）

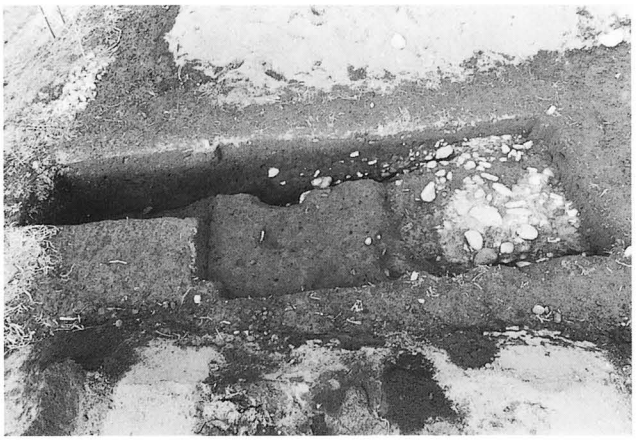
(1)　2 号試掘溝（西から）



(2)　2 号試掘溝 遺物出土状態（南西から）



(3)　2 号試掘溝 土層断面、遺物出土状態（南から）

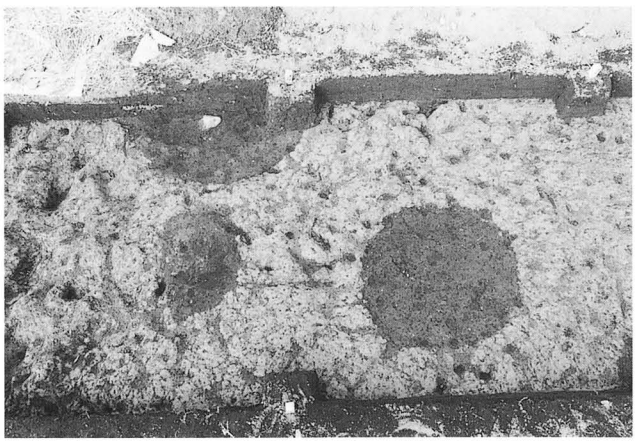


(4)　3 号試掘溝（南から）

(5)　4 号試掘溝（東側）（西から）

(6)　4 号試掘溝（東側）遺構検出状態（西から）

(7)　4 号試掘溝（東側）93 号住居址（遺構 1 ～ 4）、遺構 5・6（西から）



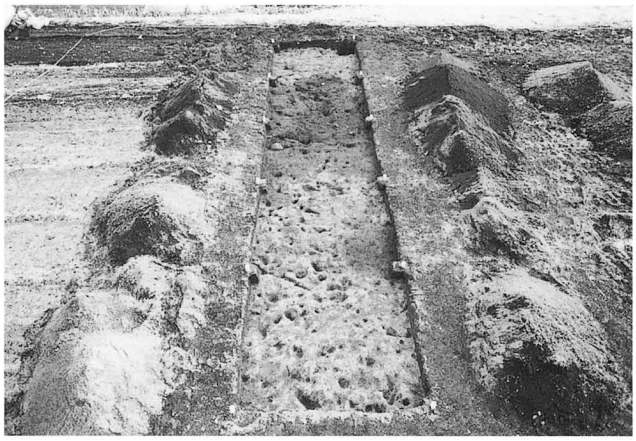
(8)　4 号試掘溝（東側）遺構 8 ～ 10 検出状態（南から）

(1)　4 号試掘溝（西側）（南西から）

(2)　4 号試掘溝（西側）土層断面（南から）

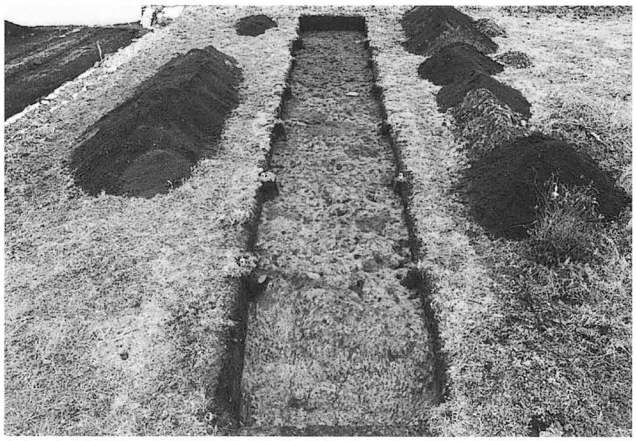
(3)　5 号試掘溝（南から）

(4)　5 号試掘溝 遺構 5・6 ほか検出状態（南西から）

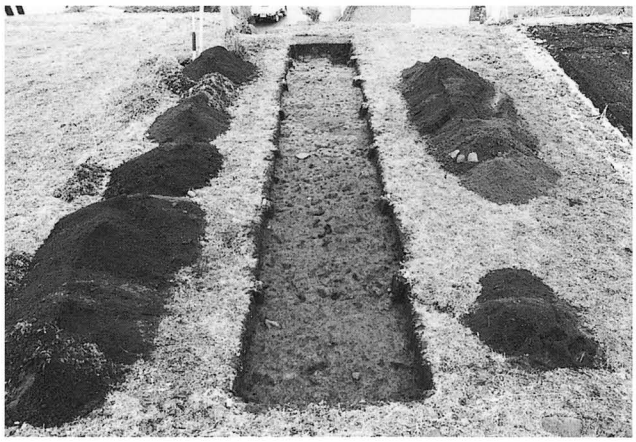


(5)　6 号試掘溝（北から）

(6)　6 号試掘溝 94 号～96 号住居址（遺構 6 ～ 15 ほか）検出状態（南から）

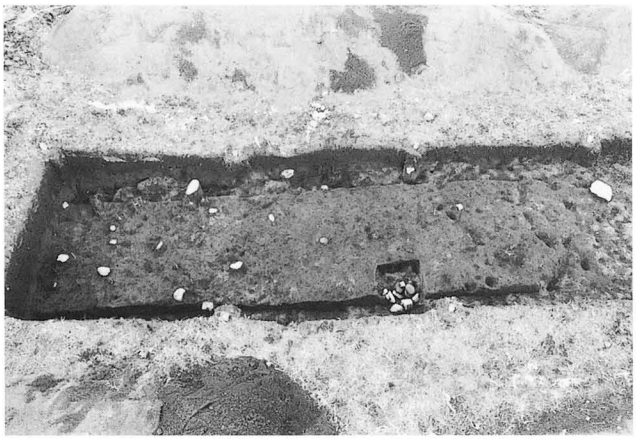


(7)　7 号試掘溝（南から）



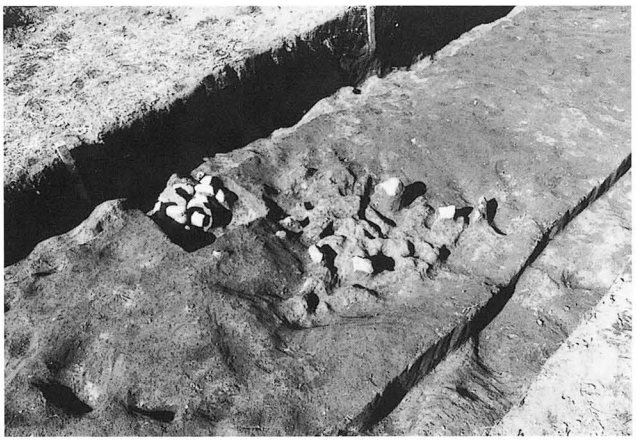
(8)　7 号試掘溝（北から）

(1)　7 号試掘溝 97 号住居址、遺構 1 ～ 30 ほか検出状態（南東から）

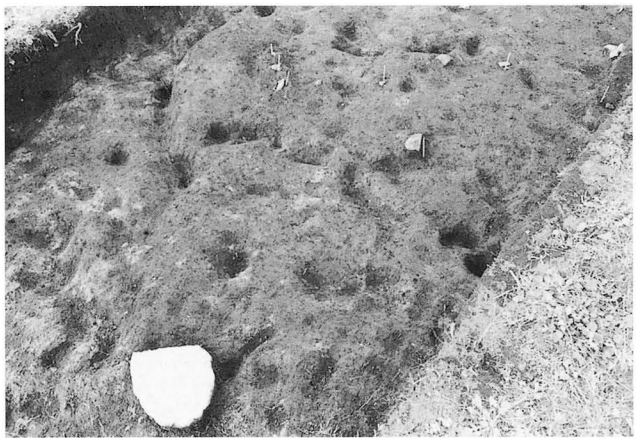


(2)　7 号試掘溝 97 号住居址、遺構 1 ～ 24 ほか検出状態（西から）

(3)　7 号試掘溝 97 号住居址検出状態（南東から）



(4)　7 号試掘溝 97 号住居址炉址（遺構 12）検出状態（南東から）



(5)　7 号試掘溝 97 号住居址台石・黒曜石出土状態（南東から）

(6)　7 号試掘溝 98 号住居址 (遺構 48 ～ 51) 検出状態 (南から)

(7)　7 号試掘溝 遺構 13 検出状態（東から）

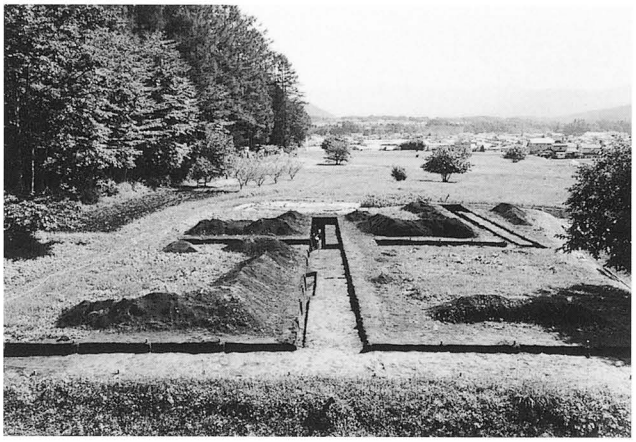
(8)　作業風景（南西から）

(1)　調査区（1 号～ 4 号試掘溝）現況（南から）

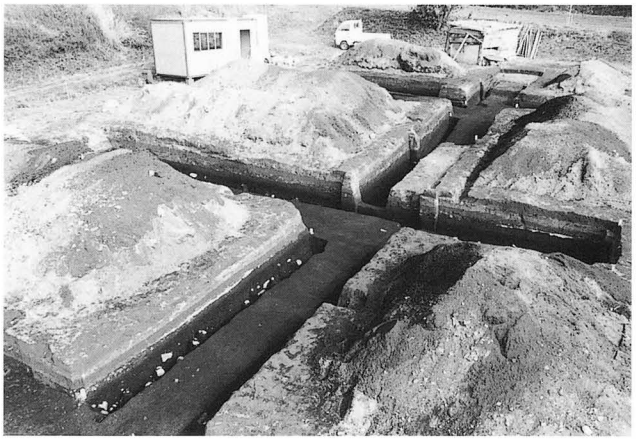
(2)　調査区（1 号～ 4 号試掘溝）現況（北から）

(3)　調査区（5 号～ 8 号試掘溝）現況（南西から）

(4)　調査区（5 号～ 8 号試掘溝）現況（南から）



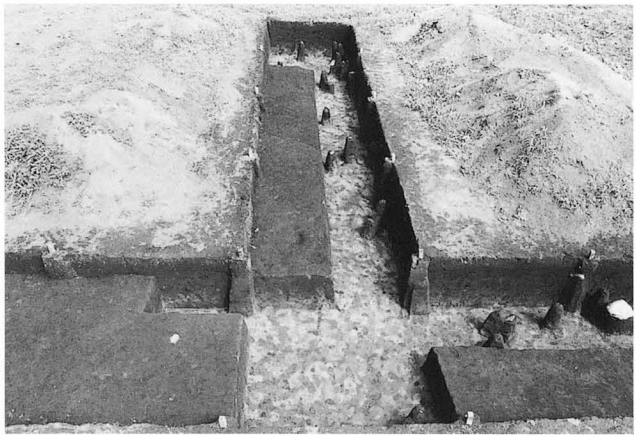
(5)　調査区（1 号～ 4 号試掘溝）全景（北から）



(6)　調査区（5 号～ 8 号試掘溝）全景（南西から）

(7)　1 号試掘溝（東から）

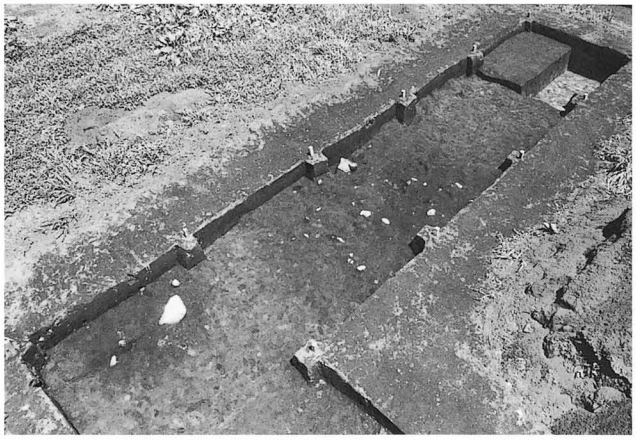
(8)　1 号試掘溝 遺構 5 検出状態（南から）



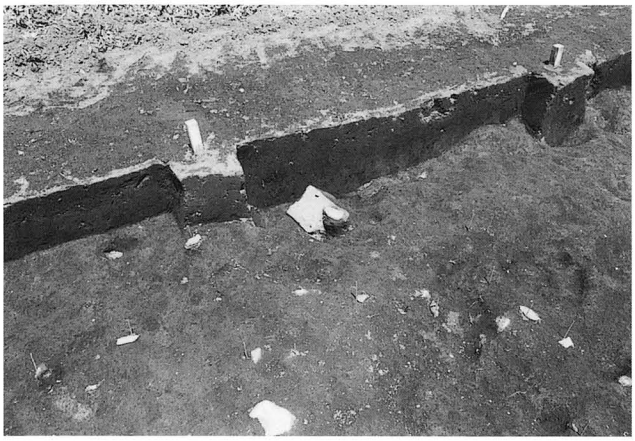
(1)　2−①号試掘溝（西から）

(2)　2−①号試掘溝 A20−10 グリッド遺物出土状態（北西から）

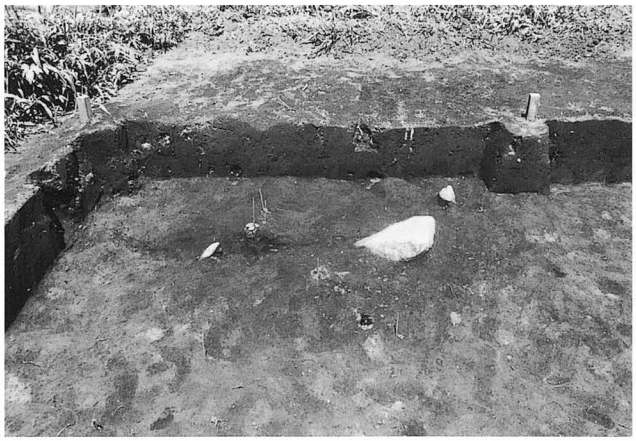
(3)　2−②号試掘溝（東から）



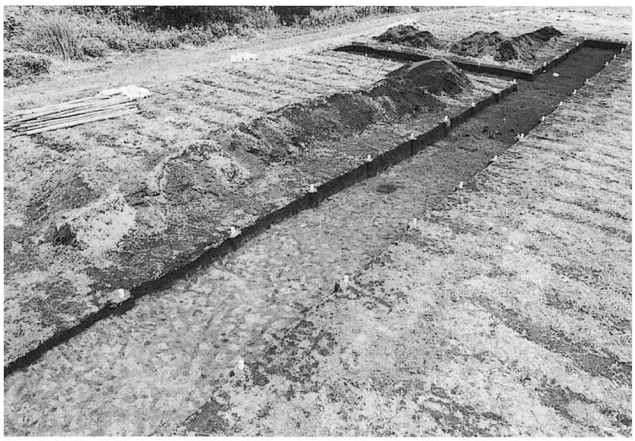
(4)　2−②号試掘溝　99 号住居址(遺構 1)、遺構 6 検出状態(南西から)



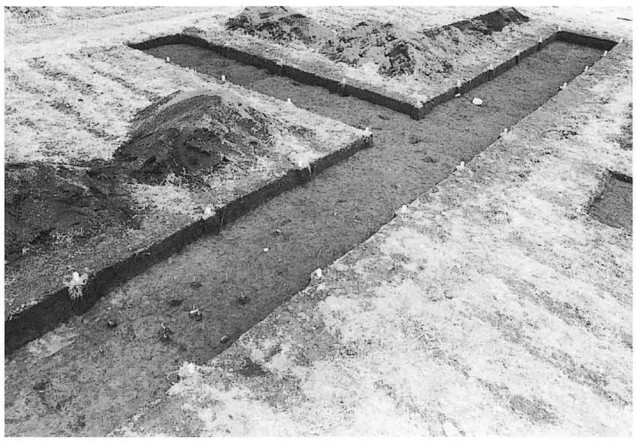
(5)　2−②号試掘溝　99 号住居址(遺構 1)、遺物出土状態(南西から)



(6)　2−②号試掘溝　遺構 6 検出状態（南から）

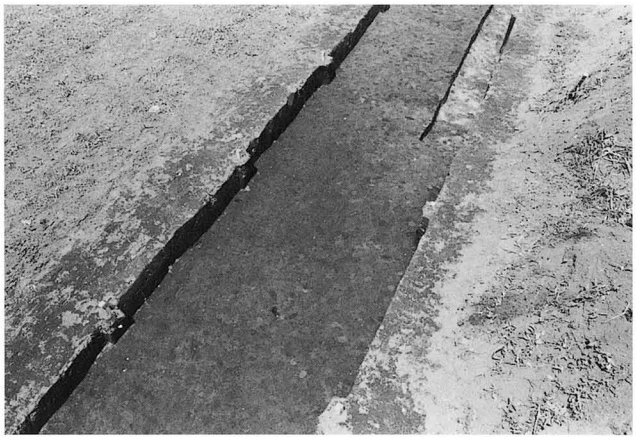


(7)　3 号試掘溝（北西から）



(8)　3 号試掘溝（北西から）

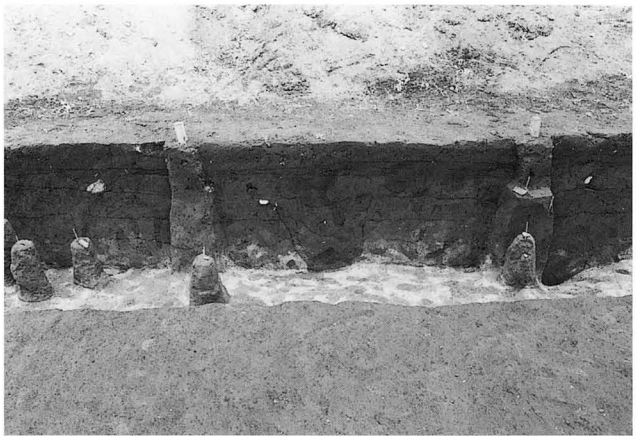
(1) 3-①号試掘溝 100 号住居址（遺構 2）検出状態（東から）



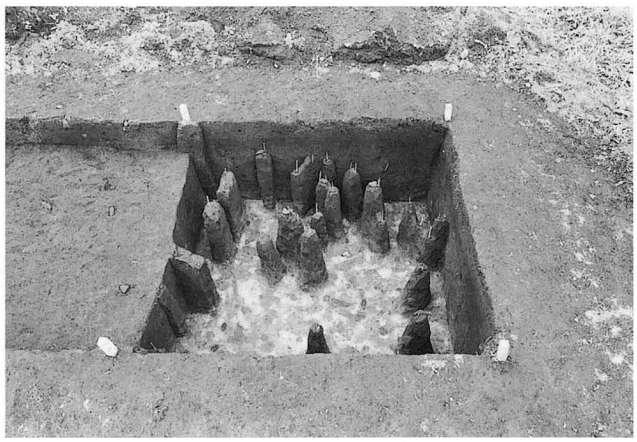
(2) 3-①号試掘溝 100 号住居址（遺構 2）検出状態（南東から）

(3) 3-②号試掘溝（南西から）

(4) 3-②号試掘溝 遺物出土状態（北から）

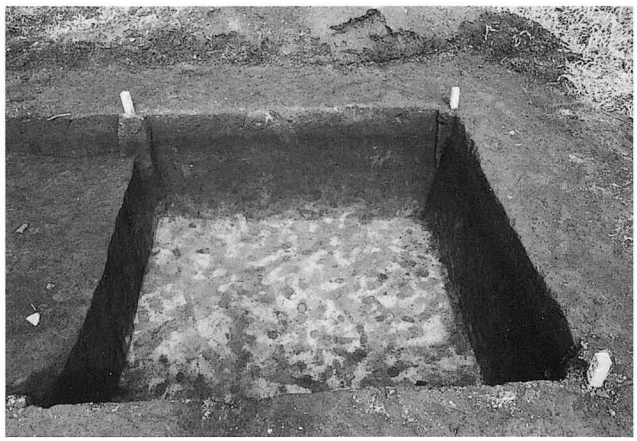


(5) 3-②号試掘溝 遺構 4 検出状態、遺物出土状態（西から）



(6) 3-②号試掘溝 A24-14グリッド遺物出土状態（西から）

(7) 3-②号試掘溝 A24-14グリッド遺物出土状態（北西から）



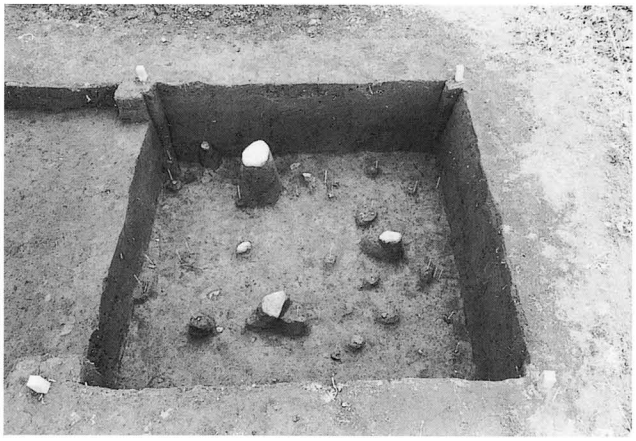
(8) 3-②号試掘溝 A24-14グリッド土層断面（西から）

(1) 4 号試掘溝 (北から)

(2) 4 号試掘溝 北側 (南西から)

(3) 4 号試掘溝 南側 (北西から)

(4) 4 号試掘溝 101 号住居址(遺構 3)遺物出土状態 (西から)



(5) 4 号試掘溝 101 号住居址(遺構 3)遺物出土状態 (西から)

(6) 4 号試掘溝 101 号住居址 (遺構 3) 検出状態 (西から)

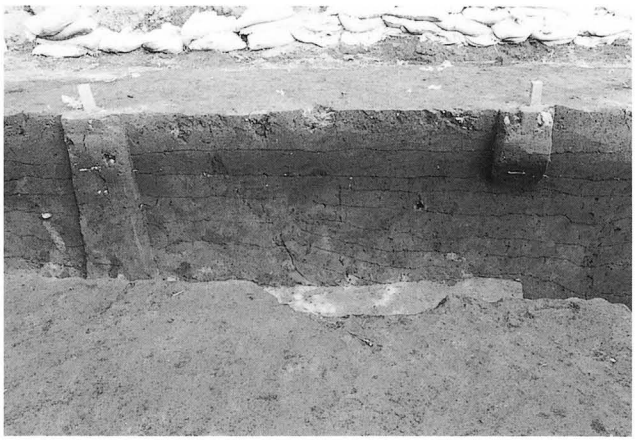
(7) 4 号試掘溝 101 号住居址 (遺構 3) 検出状態 (南西から)

(8) 4 号試掘溝 101 号住居址 (遺構 3) 検出状態 (北から)

(1) 4 号試掘溝 101 号住居址（遺構 3）遺物出土状態（東から）

(2) 4 号試掘溝 101 号住居址（遺構 3）土層断面（西から）

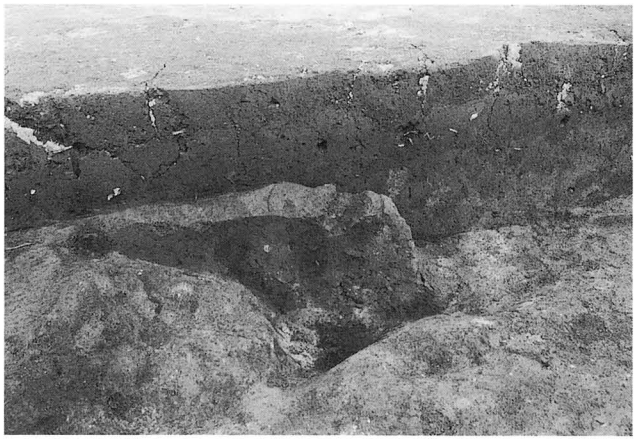
(3) 4 号試掘溝 101 号住居址（遺構 3）土層断面（西から）



(4) 4 号試掘溝 101 号住居址（遺構 3）土層断面（西から）

(5) 4 号試掘溝 黒曜石原石出土状態（西から）

(6) 4 号試掘溝 黒曜石原石出土状態（西から）



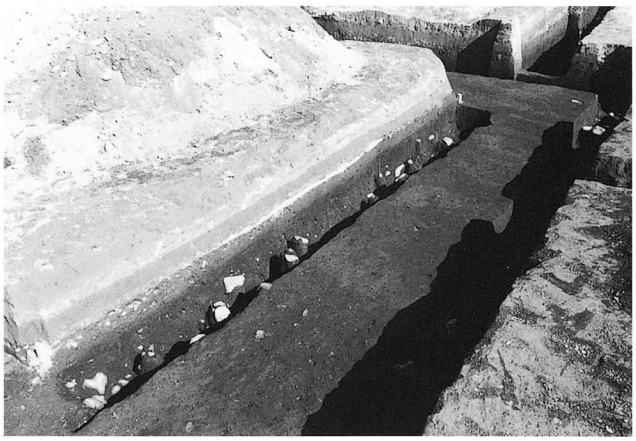
(7) 4 号試掘溝 黒曜石原石取り外し状態（北西から）

(8) 4 号試掘溝 礫出土状態（西から）

(1)　5−①号試掘溝 東端（南から）

(2)　5−②号試掘溝 遺構 10 検出状態（南から）

(3)　5−②号試掘溝（南西から）



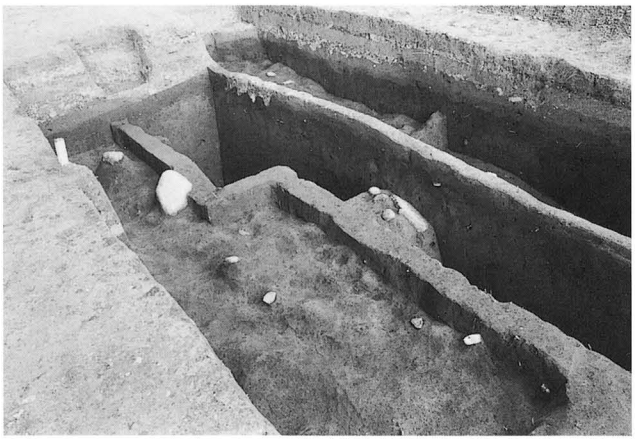
(4)　5−③号試掘溝（南西から）

(5)　5−③号試掘溝 土層断面（南西から）

(6)　5−④号試掘溝 西端（南から）

(7)　6−①号試掘溝（西から）

(8)　6−①号試掘溝（東から）



(1)　6−①号試掘溝（南西から）

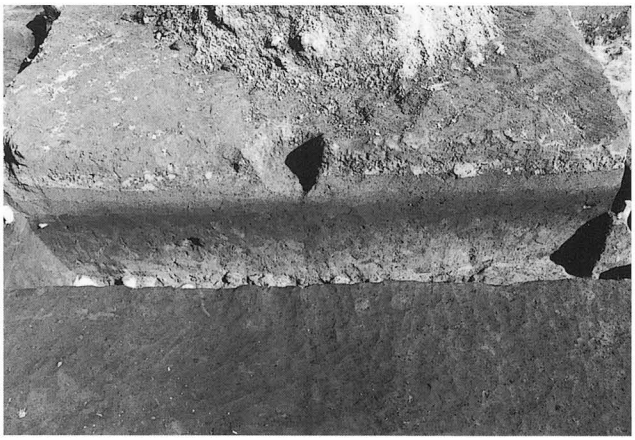
(2)　6−①号試掘溝（南東から）

(3)　6−①号試掘溝 遺構 9 検出状態（西から）

(4)　6−①号試掘溝 遺構 9 検出状態（東から）

(5)　6−①号試掘溝 遺構 9 検出状態（東から）

(6)　6−①号試掘溝 礫出土状態（西から）



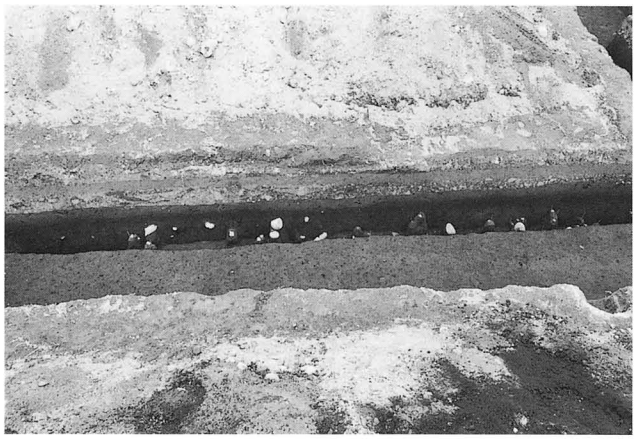
(7)　6−②号試掘溝 土層断面（西から）

(8)　6−②号試掘溝 土層断面（南西から）

(1)　6−②号試掘溝（南東から）

(2)　7 号試掘溝（南西から）

(3)　7−①号試掘溝（南西から）



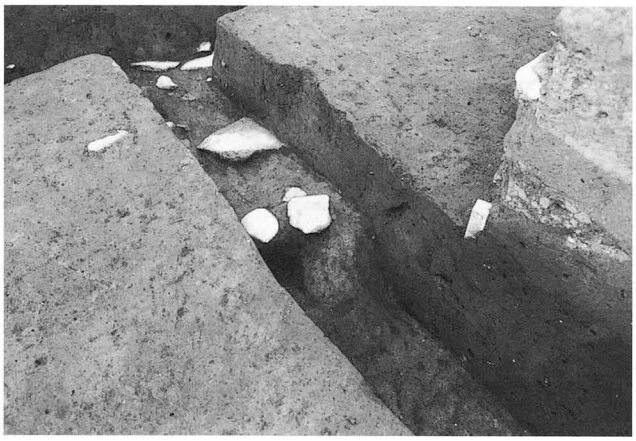
(4)　7−①号試掘溝　土層断面（西から）

(5)　5・7 号試掘溝 102 号住居址(遺構 8)検出状態（北から）

(6)　5・7 号試掘溝 102 号住居址（遺構 8）検出状態（西から）

(7)　7−②号試掘溝 102 住居址（遺構 8）炉址検出状態（南から）

(8)　7−②号試掘溝 102 号住居址（遺構 8）炉址検出状態（南西から）

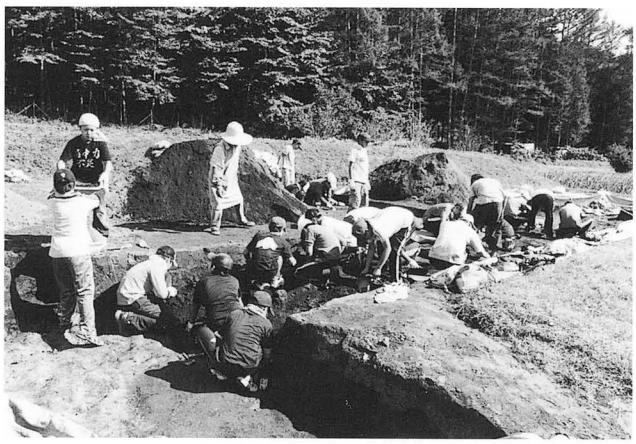


(1)　5・7 号試掘溝 102 号住居址（遺構 8）土堤検出状態（北西から）

(2)　5・7 号試掘溝 102 住居址（遺構 8）土堤検出状態（南東から）

(5)　5・7 号試掘溝 102 号住居址（遺構 8）土堤検出状態（北東から）

(4)　5・7 号試掘溝 102 号住居址（遺構 8）土堤検出状態（北から）



(5)　米沢小学校体験発掘（北西から）

(6)　米沢小学校体験発掘（南から）

(7)　米沢地区住民体験発掘（北から）

(8)　米沢地区住民体験発掘参加者（北から）

第 1 層

(1) 12 次調査 1 号試掘溝出土遺物①

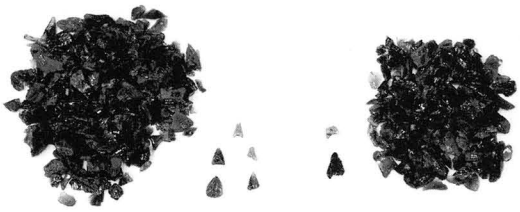
第 2-5 層

(2) 12 次調査 1 号試掘溝出土遺物②

第 3 層以下

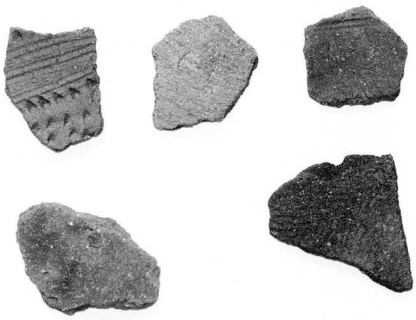
(3) 12 次調査 1 号試掘溝出土遺物③

(4) 12 次調査 1 号試掘溝出土遺物④



H-11-16　　H-11-15

(5) 12 次調査 1 号試掘溝出土遺物⑤



第 1 層

(6) 12 次調査 2 号試掘溝出土遺物①

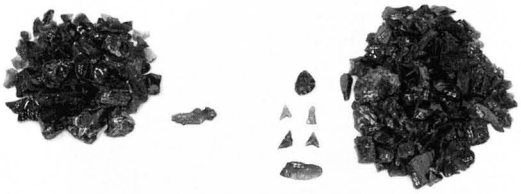
第 2 層群

(7) 12 次調査 2 号試掘溝出土遺物②

第 2 層群

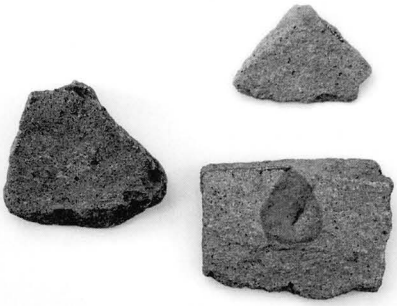
(8) 12 次調査 2 号試掘溝出土遺物③

(1) 12 次調査 2 号試掘溝出土遺物④



H-16-11　H-16-12

(2) 12 次調査 2 号試掘溝出土遺物⑤



(5) 12 次調査 1 号・2 号試掘溝出土遺物

第 2 層群

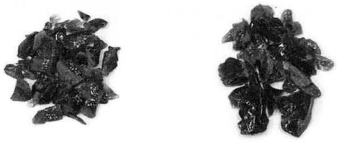
(4) 12 次調査 3 号試掘溝出土遺物①

H-21-7　H-21-8

(5) 12 次調査 3 号試掘溝出土遺物②

M-2-6　M-1-5

(6) 12 次調査 4 号試掘溝出土遺物



M-8-10　M-8-2

(7) 12 次調査 5 号試掘溝出土遺物

M-9-10　M-9-6

(8) 12 次調査 6 号試掘溝出土遺物

第 1 層

(1) 12 次調査 7 号試掘溝出土遺物①

N-1-11　　N-11-3

(2) 12 次調査 7 号試掘溝出土遺物②

99 号住居址

(3) 13 次調査 2-②号試掘溝出土遺物①

32

99 号住居址

(4) 13 次調査 2-②号試掘溝出土遺物②

壁3

101 号住居址

(5) 13 次調査 4 号試掘溝出土遺物①

208

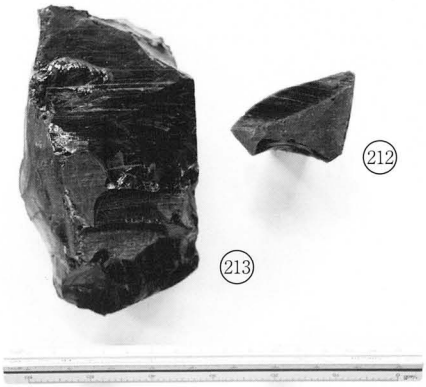
101 号住居址

(6) 13 次調査 4 号試掘溝出土遺物②

209

101 号住居址

(7) 13 次調査 4 号試掘溝出土遺物③



212

213

(8) 13 次調査 4 号試掘溝出土遺物④

報告書抄録

ふりがな	こまがた
書名	駒形遺跡
副書名	平成23・24年度保存目的のための確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小池岳史
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦2013年3月 27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
こまがた 駒形	ちのしよねざわ 茅野市米沢 きたおおしお 北大塩	20214	34	36度 02分 12秒	138度 11分 29秒	20111118 ～ 20120104 20120702 ～ 20121214	136㎡ 347㎡	保存目的のための確認調査報告書

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒形	集落跡	縄文時代 平安時代	住居址　9 土坑　多数 住居址　1	縄文時代早期～後期土器 石器 黒曜石 平安時代黒色土器坏	平成10年に国史跡に指定された霧ヶ峰南麓を代表する縄文時代の集落遺跡。史跡から広がる縄文時代前期・中期集落の範囲が明らかとなった。

駒形遺跡

平成23・24年度保存目的のための確認調査報告書

平成25年3月22日　印刷
平成25年3月27日　発行

編集　茅野市教育委員会
発行　茅野市教育委員会
長野県茅野市塚原二丁目６番地１号（0266）72－2101(代)
印刷　株式会社 マイスター
長野県茅野市ちの694番地1